月の光を纏う者
3

月の光を纏う者
3

第22話　虚ろの中の

「ん・・・」
　食器の触れる音に気づいて、レイチェルは目を覚ます。
「あ・・・ごめん。起こしちゃった？？」
　レイチェルのベットのすぐ横で、チャイムがカップを傾けながら本を読んでいた。
「ううん、いいの・・・。
　今、何時？」
　そう言いってベットから身を起こすレイチェル。心なしか、まだ体が重い。
「まだ８時よ。レイチェルも紅茶飲む？」
「うん、お願い」
「そ。じゃ、待ってて」
「ごめん」
　互いに短い言葉を交わし、チャイムはキッチンへと向かっていった。
　レイチェルは目を擦りながら部屋を見回すと、部屋の隅に置かれた椅子で、トキが座ったまま眠っていた。腕を組み、膝の上で本を広げたまま、天井を見上げるような格好で眠っている。流石にトキも疲れが溜まっていたのだろうか。

　あの後。
　ルゴワールの軍隊を退け、トキが本当に１人で奪ってしまった戦艦に旅客船の乗客を移し、一番近くの港まで船を走らせた。
　到着した港は、アスラムよりやや南の都市ベルヘイム。結果的には当面の目的地であるバイアルスにやや近い場所へ上陸出来た事になる。幸いな事に、トキの話ではベルヘイム領に対するルゴワールの影響力は皆無だという。
「まぁ、あんな襲撃をしてくるくらいですから・・・どこに居ても一緒って気もしますけどね」
　最後に付け加えられたトキの言葉にチャイム達は不安にさせられたが、今の所ルゴワールからの襲撃は無い。港に突然軍艦が入ってきて、ベルヘイムの街は大騒ぎになったのにも関わらずだ。この事はルゴワールの耳にも入っている筈であろうが、彼等から何のアプローチも無い事はがかえって不気味だった。
　もしくは、エアニスとトキの強さを警戒するようになったのか。たった２人の人間に、３隻の軍艦と数十人の兵隊が潰されたのだ。その常識を逸した事実を、果たしてルゴワールはどう受け止めたのか。
　それが２日前。
　港での騒ぎも収まらないうちに、４人は街を出て、バイアルスへ向けて旅を再開させた。しかし、隣町まで進んだ所で、レイチェルが倒れてしまったのだ。
　船上での戦いで過度剰に魔力を消耗し、その体で旅客船に乗っていた乗客達の救護手当てを続けるなど、レイチェルは動きづめだった。魔力の消耗による精神の衰弱と身体的疲労が重なり、

レイチェルは熱を出してしまったのだ。
　当然、そんな状態で旅を続ける訳にはいかず、やむなくレイチェルの体調が戻るまで、この町に留まる事にしたのだ。それに疲れていたのはレイチェルだけでなく、チャイムも、トキも、そしてエアニスも同じであった。多少の危機感、焦りといったものはあったが、トキの言葉のように「何処に居ても同じ」、という感もあったので、皆この場に留まる事に異論は無かった。
　とはいえ、レイチェルも１日ゆっくり休んだだけで魔力は全快し、体調もほぼ元に戻りつつあった。自分が皆の足止めをしてしまったと感じているレイチェルにとって、こうしてベッドで横になっている時間がどかしい。
　チャイムがカップと砂糖を持ってキッチンから戻ってきた。
「エアニスさんは？」
「あいつ？
　まだ戻って無いわよ。明日には戻るって言ってたけど・・・」
　チャイム達の泊まる宿に、エアニスの姿は無かった。この町での滞在が決定するや否や、３日程別行動を取らせてもらう、と言い出したのだ。主戦力の離脱に不安を急き立てられたチャイムはエアニスを止めた。そのエアニスは、素っ気無くこう言った。
「墓参りだ」
　その一言で、つい口をつぐんでしまった。誰の墓参りかは聞けなかったが、チャイムの予想が当たっていた事は、後にトキから聞かされた話で確認する事が出来た。
　以前、トキがエアニスから聞いた話によると、"レナ" という少女の故郷はこの地なのだという。そして彼女の墓標が、この街から離れた小さな村にあるという事も、トキは聞いていた。
　船上での稽古の合間に少しだけ聞いた、エアニスの過去。その話を聞く限り、レナという少女は、エアニスにとって特別な存在だったという事は間違いない。それを聞いている以上、チャイムはエアニスを引き止める事が出来なかった。それに、船での一件以来、どうにもエアニスの様子がおかしかった。常に考え事をしているような面持ちで、一言で言えば、無気力状態。もともと元気のある性格ではないが、いつもの様にチャイムがエアニスをからかうような事を言っても、心ここにあらずといった様子であっさりと受け流されてしまうのだ。その様子は露骨に表に出ており、そんなエアニスにトキは溜息を、レイチェルは戸惑った様子を見せていた。エアニスを墓参りへ送り出したのも、彼が１人になる事で、または墓参りをする事で何かしらの心の整理がつき、いつものエアニスに戻ってくれるのならば、それはチャイム達にとって歓迎すべきことであったからだ。
「・・・あいつでも凹む事あんのね・・・」
　自分の紅茶をすすりながらチャイムが呟く。レイチェルは苦笑した。あいつと言うのはもちろんエアニスの事だ。
「そうね・・・。流石にあんな派手な襲撃に遭うとは思わなかったし・・・」
　チャイムもレイチェルも、ルゴワールを甘く見ていた。たった４人の人間を相手にするのに、まさか軍隊を引っ張り出して来る事など、考えもしなかった。ルゴワールが、次はどのような手を打ってくるのか考えると気が重くなる。チャイムもレイチェルも、その事が心に引っかかり、

一時取り戻していた元気を無くしつつあった。
「エアニスが気にかけているのは、その事じゃ無いでしょう」
　眠っていた筈のトキが、突然話し出した。
「あんた、起きてたの・・・？」
「たった今目が覚めました。それより、あまり気に病まないで下さい。
　僕達が責任を持って、お二人をバイアルスまでお連れしますから」
　いつもの軽く中身の無い笑顔とは違い、珍しく自信に満ちた笑みを浮かべるトキ。それすらも、作り物なのかもしれないが。
「こんな言い方は自慢みたいで嫌ですけど・・・今回の襲撃にしろ、他の乗客も守るという目的が無ければ、もっと早く片付いていました。はっきり言って、僕もエアニスも、ああいうのが何人集まったとしても、敵ではありません。それは今回の戦いで証明出来たと思いますが？」
　チャイムはトキが一人で制圧したという戦艦の事を思い出した。船内のあちこちで乗組員が息絶えていた。あるものは心臓を一突きに。またあるものは額を撃ち抜かれて。殆どの乗組員が、最小限の傷で死に至っていた。
　あいつは仕事が綺麗だからな。
　旅客船の甲板で、トキの戦い方をそう評したエアニスの言葉が今では良く分かる。
　トキは膝の上の本を閉じて、考えるような仕草を見せる。
「エアニスが気にしているのは、最後に現れた２人組みの事でしょう」
　戦いの最後に現れた、銀髪の２人の男女。エアニスは、”向こう側の人間”。レッドエデンの住人と言っていた。
「あれは・・・何者なの？」
　トキはわざとらしく肩を竦めて見せる。
「さあ？
　僕は直接彼等を見た訳ではありませんし・・・元々僕も、そんな存在はおとぎ話の中だけだと思っていたクチですからね。
　僕より、レイチェルさんの方が詳しいのでは？」
　話を振られて固まるレイチェル。暫くして溜息とともに肩の力を抜いた。
「私も、世間で知られているおとぎ話程度の事しか知りません。
　ただ村の教えでは、それはおとぎ話ではなく本当に存在するのだと、昔から聞かされていましたけど・・・」
　殆どの魔物は、250年も昔にレイチェルの先祖、魔導師エレクトラによって封印されたと伝えられるおとぎ話。それによると、彼等はエレクトラの手によりこの世界とは別の世界、"レッドエデン"と呼ばれる地へと追放されたのだという。しかし、中には封印から逃れた者や、封印された世界から抜け出し、こちらの世界へ戻って来る者が存在しており、今もこの世界に魔物という存在は潜んでいるのだという。
　それは誰もが知っているおとぎ話であるが、魔物が今の世界に存在しているというフレーズは、誰も信じていない。あくまで、ただの"御伽噺"。そのような存在が確認され、世間にその認識が

広まったという話は聞いた事が無い。しかし、レイチェルはエルカカの魔導師達に、その存在は実在するという事を子供の頃から教えられてきた。
　レイチェルは、まさかそのような存在と遭遇したり、ましてや敵対するなどとは、思ってもみなかった。レイチェルも自分の言葉にどこか現実味を欠いている事は自覚していた。受け止める事実にしては大きすぎる事だと、心の底で感じているからだろうか。そのように自己分析している自分も、また何処かひとごとだ。レイチェルは堂々巡りをする自分の考えを打ち切った。
「魔族・・・ね」
「はぁ・・」
　呟くチャイムとトキも、どこかピンと来ていない様子だった。あの銀髪の二人組はやはりただの人間で、チャイムたちは担がれているのかもしれない。そう考えたくなる。
「・・・なんだか、エアニスはやたらビビってたけどね。何か知ってるのかしら」
「エアニスの事ですから、案外魔族と喧嘩した経験でもあるのかもしれませんね。
　そうそう、良くは知りませんが、エアニスの剣はそういった存在にも対抗できる、魔力を持った剣だそうですよ。以前、そんな事を自慢された覚えがあります」
　チャイムとレイチェルは上目遣いでエアニスの持つ剣を思い出す。
　薄い刀身の長剣。剣の腹は赤黒い石のような質感を持ち、見た事が無い文字か記号かが刻み込まれている。刃の部分だけ磨き込まれた金属の輝きを持ち、柄はコウモリか悪魔の羽を思わせるような装飾と、ルビーのような石が収まっていた。確かに不思議な力を持っていてもおかしくは無い、怪しい雰囲気を持つ剣だ。
　実際、製造方法が解明出来ない不思議な力を持つ古代の魔導具はこの世に幾つも存在する。それらの中には、刀剣類といった形を持つものも多い。
　その多くは宗教的な価値を持ち、強力な力を持つ物は寺院などで御神体として祭られていたり、そうでなくても博物館に納められていたり、魔導の研究所や学者が引き取るといったケースが多い。市場で取引される事は皆無に近い。エアニスのように実用しているといったケースは、更に稀だろう。
「物凄く高値で売れるらしいですよ。正直、腰に下げて出歩けるようなシロモノじゃ無いって話でした。
　本当か嘘かは知りませんけど」
「はぁ・・・」
「へぇ・・・」
　これまた現実味を欠く話で、レイチェルとチャイムは曖昧なあいづちを打つ。
「とにかく、アイツが帰ってきたらちょっと話、聞かせて貰いたいわね」
「エアニスの帰りは、明日の夕方以降にはなると思いますがね。
　今頃、目的の村に付いている頃じゃないでしょうか？」

◆

　庭の掃き掃除をしている初老の婦人が、遠くから近づいてくるエンジンの音に気づいた。
「おや、まぁ」
　その車を見て、その老婦人は驚いた顔をした。車は庭から少し離れた木立の下に停まり、車から琥珀の髪を揺らし男が降りてくる。
「どうも。ご無沙汰しております」
　柄にも無い言葉遣いで挨拶をしたのは、車を走らせやって来たエアニスだ。
「お久し振りね。エアニスさん。どうしたの？
　ミルフィストから、はるばるここまでやってたの？」
「えぇ、仕事・・・みたいな事で、近くまで来たものですから」
　言いながらその場所から見える小さな丘を眺めるエアニス。丘の先には一本の木が立っていた。。
「レナさんのお墓参りに来たのでしょう？
　お墓は私が毎日掃除しているからね。でも、エアニスさんが来てくれないと、やっぱり寂しいんじゃないかしら？」
　老婦人の言葉にエアニスは困ったような顔で笑い、車から鞄を一つ取り出すと、それを持って丘を登り始めた。

　村の中で一番高い丘の上。ここからだとゆるやかに広がってゆく平原を見渡す事ができる。レナの好きな眺めだった。その丘に立つ木の下に、背の低い小さな墓標が立っている。
　レナ=アシュフォード。墓石に記された文字を見ると、わずか１７年でその生涯を閉じた事になっている。
　その墓標の隣に、彼女はいた。

「よう。久し振り」
　軽く手を振るエアニスに、墓標の隣に佇む淡い髪色をした少女は柔らかく笑った。エアニスもその微笑を見て、優しく笑う。
　彼女の姿は、エアニスの目にだけ、映っていた。

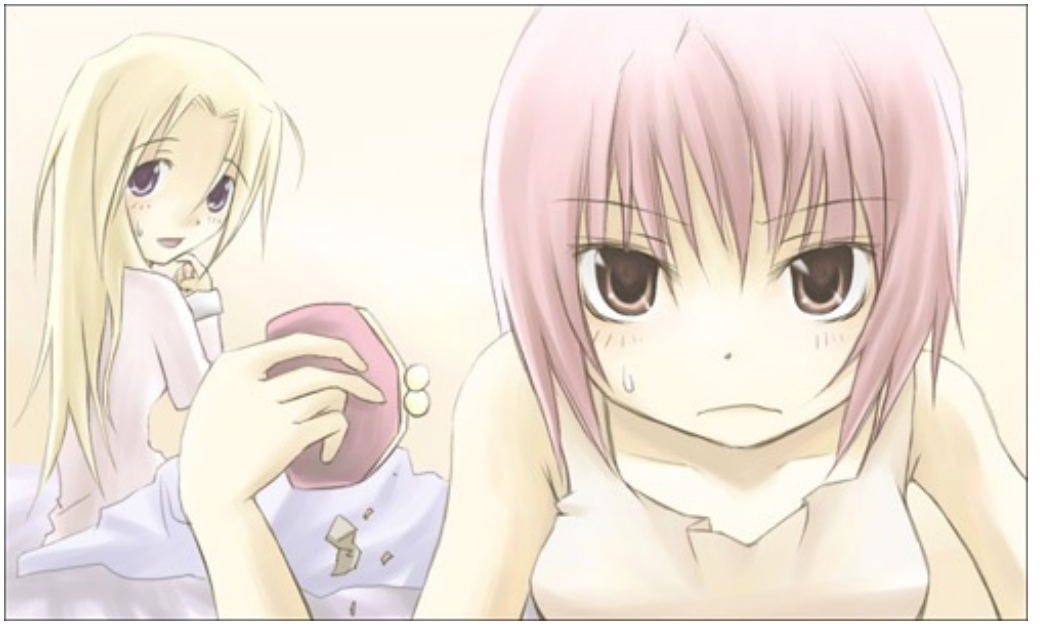
　それは、この世に現れた霊魂というものか。それとも、エアニスが見ているただの幻か。
　それが何であろうと、エアニスは構わなかった。ただ、彼女が目の前にいるという事が全てであった。
　エアニスは小さな墓標の隣に腰掛け、鞄から２つのカップと瓶を取り出し、中身をカップに注いだ。
「アップルティー。好きだったよな、確か」
　カップを石碑の前に置き、エアニスも紅茶に口を付ける。
「また愚痴を話しに来たよ。
　前来た時に、トキっていう変な奴と同居する事になったって所までは話したよな。
　そうだな、どっから話すかな・・・」
　エアニスは最近の身の回りの出来事を話し出した。戦争が終わるまでは考えられなかった、平穏で何も無い、退屈な毎日。またま手助けをする事になった、２人の少女の事。
　そして"石"の事。

「全く、因果な話だよ」
レナはエアニスの隣に座り、黙ってエアニスの話に耳を傾け、ただ優しく笑っていた。
ここに来れば、彼女を強く感じる事が出来た。
彼女は、エアニスが唯一全てを認めた存在。
そして、自分のせいで死なせてしまった人。
レナは自分を許してくれるのだろうか。
エアニスの隣にいるレナは、今優しく微笑んでいる。
ここに来る度、彼女に問いかけてみたいと思う事がある。
お前は、俺を許してくれるのか、と。
答えを聞きたい。
声を聞きたい。
しかし、それを口にすると、彼女が消えてしまうような気がした。
根拠も何も無い。
ただ、そんな気がするというだけで、エアニスの唇はその言葉を紡ぐ事は出来なかった。
自分の予感が的中する事が、恐ろしかったから。

夢のようで幻かもしれない２人だけの世界で、時間はゆっくり流れる。
２人の時間に合わせるように、ゆっくりと空が紅く染まる。
日が落ち、空に月が懸かろうとも、エアニスは彼女の元を離れる事は無かった。

第23話　Masquerade

　チャイムが読んでいた本から目を離すと、トキが棚や鞄を探りながら部屋の中を歩き回っていた。
「さっきから何してんの？」
　トキは頬を掻きながら答える。
「えぇ・・・そろそろ夕食でしょう？
　何か食べ物を調達してこようと思ってるんですが・・・
　チャイムさん、僕とエアニスの財布知りませんか？」
「えっ！？」
　この旅の資金は、エアニスとトキが共同出資している出所不明の謎資金でまかなわれている。二人の共通の財布はチャイムも見た事があったが・・・。
「あれって、トキが管理してる筈じゃないの？」
「そうなんですけど・・・僕の記憶が確かなら、車の中に置きっぱなしにしてしまったような気が・・・」
　自信なさげな返事をして、ついチャイムから視線を逸らしてしまうトキ。
「じゃあ財布は車に乗ってっちゃったエアニスが持ってるって事ね・・・・
　って、どーすんのよ、今日の晩ゴハン！！」
「チャイムさんのお金を、今晩の食事代分貸して頂けないでしょうか？
　僕個人の持ち合わせも無くなってしまいましてね」
「あたしもレイチェルも遠の昔に一文無しよっ！！」
「・・・それは・・・初耳ですね」
　ベットではレイチェルが頬を掻いている。



「仕方ないですね。ちょっとお金下ろしてきますか」

「え、トキ、銀行にお金あるの？」
「いえ、銀行ではなく、ギルドに預けたお金がありますので」
「・・・トキもギルドで仕事してたんだ・・・
　な、なんかイメージ違うな」
　ギルドというのは仕事の斡旋や賞金首の手配等を行う、いわば旅人の仕事の紹介所だ。必然的に柄の悪い、流れのごろつきばかりが集まってしまう場所でもあり、チャイムはギルドに立ち寄った事は無かった。エアニスは時折、ミルフィストのギルドへ顔を出しているような事を言っていたが、トキも出入りしているとは少々意外だった。
「まさか。僕はあんないい加減な所で仕事はしませんよ。
　僕のお金では無く、エアニスの稼いだ賞金が預けられたままなんです。
　暗証番号等、引き出しに必要な知識は頭に入っているので、問題ありません」
「問題ありませんって・・・いいの、そんな事勝手にしちゃって。
　エアニス個人のお金なんでしょ？
　それに、なんでアンタがそんな事知ってるのよ？？」
「しかし、困りましたね。
　エアニスも居ない事ですし、買い物の為に僕がお２人から離れるのも考え物、ですか」
「・・・」
　チャイムの質問をあっさり無視して問題点を切り替えるトキ。一瞬突っ込もうかと思ったが、エアニスのお金を勝手に引き出しても困るのはそのエアニスだけである。今晩の食事の為に、チャイムは涙をのんで突っ込みを自重した。
「わたし達も一緒に行きましょうか？」
　ベッドから身を起こし、レイチェルが提案した。
「でもレイチェル、体は大丈夫なの？？」
「うん。魔力はもう十分回復してるし、体調もほとんど戻ってるから、大丈夫」
　乱れた髪を整え、元気そうな笑顔でレイチェルは言った。トキとチャイムも安堵の表情を浮かべる。
「それなら、買出しも一緒に済ませて、久し振りに美味しい食事の出来る所でも探しますか」
「賛成っ！」
「あ、でもエアニスさんには悪いですね・・・」
「いいのよ、アイツはアイツで一人で羽伸ばしてるんじゃないの？？」
「んー・・・だといいんですけどねぇ」
　意味ありげなトキの相槌にチャイムとレイチェルは訝しげな顔を浮かべる。
「まぁ、仲間外れも可愛そうなので、エアニスには何かお土産でも買っておきましょうか」
「あんたのお金じゃないのに良く言うわねー・・」
　流石のチャイムも、今度ばかりは思わず突っ込みを入れてしまった。

◆

小高い丘の上にある小さな墓標。
その隣に立つ木立に背を預け、エアニスは眠っていた。レナの墓参りに来る時は、いつもここで眠る習慣がついてしまっていた。秋が訪れていたミルフィストよりかなり北に位置するこの土地は、まだ夏の終わりといった気候で、薄い毛布にくるまるだけで十分眠る事ができた。
これからバイアルスへ向けて南下して行く程寒い気候に変わり、目的の場所へ到着する頃は冬の入り口に差し掛かる頃だろう。
そんな事を思いながら浅い眠りに浸っていると。

突如、夜の闇に陰湿な殺気が満ちた。
ざっ。
エアニスは毛布をかなぐり捨て、抱いて眠っていた剣を抜き放った。
(誰か、見ている)
それも、複数の人間が、敵意・・いや、殺気を込めた視線で。
エアニスは軽く舌を打つ。やはり最近の疲れが溜まっていたのか、今まで気配に気付く事ができなかった。
もぞり、と、闇が動いた。
茂みの中から、木立の影から、丘の稜線から。次々と黒い影が浮かび上がり、エアニスを取り囲むように立ち並ぶ。２０人程か。
(こいつら・・・トキと同じ・・・)
エアニスは彼等の姿には見覚えがあった。黒いコートとマント。そして、フードの中から覗く、白いデス・マスク。
そう。トキが戦う時に身を包む、あのコートとマスクと良く似ているのだ。
しかし、トキの戦装束と同じだから知ってる、というだけではない。エアニスは一年半程前に、彼等と剣を交えた事があるのだ。ルゴワールの精鋭を集めた実験部隊。彼等が羽織っているコートとマントは特殊な防弾服で、人間一人を装甲車並の戦力に仕立て上げる事ができる。
部隊名は確か、"マスカレイド"。
そして、レイチェルの故郷を焼き払ったのも彼等だという。
この中にエルカカを襲った連中は混じっているのだろうか。それならば、仇をとるチャンスだ。
エアニスの正面に立つ黒マントが、エアニスに歩み寄る。
「レイチェル=エルナースの護衛だな？」
黒マントの言葉にエアニスは安堵する。彼等はレイチェルの護衛であるエアニスと、一年半前に彼等と戦ったエアニスを紐付ける事が出来ていないようである。
しかし、エアニスに問いかけた男はその答えを数秒と待たず、問答無用で銃口をエアニスに向けた。
「！！、よせ！」

短く制止の声を上げるエアニス。
ガヒュン！
ヒギィイン！
同時に響く破裂音と金属音。黒マントが放った銃弾は、エアニスの振るった剣に弾き飛ばされた。驚愕する黒マント。
「！！
なる程、噂通りとんでもない化け物のようだな！！」
確証を得た、と言わんばかりに歓喜の声を上げる黒マント。そのマスクの下には、歪んだ笑みが浮かんでいる事が容易に想像できる。
「・・・・」
しかしエアニスには黒マントの声が耳に入っていなかった。
エアニスの足元。弾けた銃弾が当たったのだろう。レナの墓標の端が欠けていた。
その墓標を見て、エアニスの頭は真っ白になった。
エアニスを撃った男は、その様子に構う事なく興奮した表情で喚き続ける。
「最近はくだらない任務ばかりで退屈していた所だ！！
いつも相手にするのは抵抗もしない腰抜けばかりで、いつも貴様のような化け物と戦って見たいと思って　　」
ガヒィン！！
黒マントの嬉々とした声は、体を突き抜ける凄まじい衝撃と、耳をつんざく金属音にかき消された。
「がっ・・！？」
黒マントの男が呻く。気付くと視界からエアニスが消えていた。見えているのは、自分の顔のすぐ真下にある、風で広がる琥珀の髪。
１０メートル以上離れたていたエアニスが、まばたきをする程の時間で、その間合いを一足飛びで詰め、男の胸に剣を突き立てていたのだ。
耳障りな金属音は、マントの下に仕込まれた金属板を貫いた音だ。彼等のコートとマントの生地に仕込まれた素材は、鉄鋼弾すら貫通する事の無く銃弾の衝撃すらも緩衝してしまう、魔導技術で精製された金属、アダマンタイトだった。それが、エアニスの剣に易々と貫かれていた。
ジャギイィッ・・
エアニスは男の胸から一気に刃を引き抜き、
ドシャアァァァッ！！！！！！
振り上げた剣で、脳天から股下まで男の体を両断した。
『・・・・・！！』
硬直する黒マント達の足元に、カン、カランと音を立て何かが跳ねて来た。それは左右二つに断ち切られた、彼等の上官のデスマスクだった。硬度だけで比べるなら、このデスマスクは彼等の羽織うマントよりも硬い筈だ。
流石に殺しの専門家達も、その凄惨な光景に戸惑いを見せる。そして、彼等が絶大な信頼を置

くアダマンタイトの防弾服が斬り裂かれた事に驚き、冷静さを維持する事が出来なくなった。
　我に返った黒マント達は、何かに急き立てられるかのようにエアニスへ向け一斉に発砲を始めた。両断された上官の体も銃撃に巻き込まれるが、彼の体はアダマンタイトの防弾服を着ていた事を証明するかのように銃弾をことごとく弾き飛ばしていた。
　男の体を盾にしながら、エアニスは驚異的な跳躍力で黒マントの囲みを飛び越える。空中でも銃弾を浴びせられるが、宙を飛んでいる最中でも襲い来る銃弾の全てをエアニスは叩き落とす。
　ザ、と、小さな砂の音だけを立て、エアニスは丘の一番高い場所へ降り立った。黒マント達は銃撃を一旦止めて、再度エアニスを取り囲む。
　エアニスは左手の剣を真横に構え、刀身の腹に刻まれた文字を２本の指でなぞり、ボソリと何かを呟いた。普段使われる事の無いエアニスの膨大な魔力が剣に注ぎ込まれる。まるで儀式のような短い仕草を終えると、エアニスの剣は、脈打つような紅い光に包まれていた。

　丘を低く唸る風が吹き抜ける。
　黒マントの誰かが、辺りに漂う異質な空気に息を呑んだ。
　風に吹かれて髪に隠れていたエアニスの顔があらわになる。そこには欠片の表情も浮かんでおらず、黒マント達が被っているデス・マスク以上に無表情だった。
　どくん　ずくん、
　紅い光と共鳴するように夜の空気が脈打つ。
　月の光を纏い滲む黒い影となったエアニスが、仮面の刺客達へ飛び掛った。

第24話　月の光を纏う者

　トキが先頭に立ち、立て付けの悪いギルドの扉を開けた。
　ギギィ、という音に反応するかのように、カウンターやテーブルで騒いでいたごろつき達の視線が集まる。
「うぁ・・・」
　思わず威圧感に声を上げてしまうレイチェル。
　どこのギルドも似たようなものだが、いかにもといった人相の男達が狭いエントランスにたむろしていた。この風体を見ただけでは、旅人なのか町のチンピラなのか判断出来ない。
　チャイムはムッとした視線を男達に突き返し、レイチェルは男達の視線を避けるようにトキの背中に隠れた。トキはいつもの笑顔でごろつき達の視線など気にも留めない。
　ギルドに似つかわしくない３人組みは、鉄格子越しの窓口へ向かう。
「すみませーん。預けたお金を受け取りにきたんですけどー」
　トキのはばかる事の無い間の抜けた声が、ごろつき達の視線を更に集める。
「ヤだなー・・・こいつら、あんたをカツアゲしようって考えてるわよ、絶対」
　小声でぼやくチャイムに、トキは書類にペンを走らせながら、あははと笑って見せる。
　レイチェルは慣れない雰囲気に戸惑いながら、彼等の視線をかわすように視線を壁に走らせた。
　そこには人の顔写真と数字が記された紙が、沢山貼り付けられている。
「これ・・・みんな賞金首の手配書ですか？」
　レイチェルの声にトキはペンを止める。
「あぁ、そうですね。壁に張り出されているのは、ごく最近手配された賞金首ですね」
「こんなに・・・」
　チャイムが壁を見回すと、ここだけで50枚以上の手配書が貼り付けられている。この数で最近手配された一部の手配書だというのだ。今、賞金が懸かっている人間は一体何人いるのだろうか。
　金額も、数日食べて行ける程度のものから、暫くは働かずに暮らせるような金額まで、様々なものがある。賞金首がこれほど沢山いる事を知らなかったレイチェルは、驚きと共にショックを受ける。
　その中にあった、奇妙な手配書にレイチェルの目が留まった。
「トキさん、これは？」
　レイチェルが指さした手配書は、壁に貼られた真新しい手配書の中で、1枚だけ古く、日に焼け色あせた手配書だった。そして一番奇妙なのは、その手配書には写真が無かった。男の名前と、正気の沙汰とは思えない賞金額のみが記されているのみだ。
　トキはレイチェルの指す手配書を見て驚いた顔を見せる。
「おや、これはまた・・・まだこんな物が貼り出されているのですか」
「なになに？？」

　チャイムが首を突っ込み、手配書の金額を見て固まる。
「なによ・・・コレ、人１人が一生遊んで暮らせる金額ね。
　何やったのかしら。この人？」
「なんだい、嬢ちゃん、旅人なのにこの男の事を知らんのかい？」
　トキが言葉を発するより先に、鉄格子の内側から初老の男が声をかけて来た。ギルドの職員だ。
「有名人なの？」
「そりゃそうさ、こんな賞金が懸けられているんだ。
　聞いた事は無いかい、" 月の光を纏う者 "、ザード = ウォルサム を」

◆

　刺客の一人が、ばらばらになって散らばった。
　エアニスは無造作に刺客達の円陣に斬り込み、あっさりと囲みを破って彼等を切り崩し始めていた。
　一瞬で目前にまで迫って来たエアニスに、刺客達が銃を乱射する。しかしエアニスは、まるで銃弾が見えているかのように弾丸をかわし、または弾き飛ばす。
　ジュッ
　血の焼ける匂いと共に、刺客の体が断ち切られる。エアニスが軽く振るった剣は、まるで紙でも裂くかのように次々と人を肉片へと変えてゆく。
　その肉片は焼き切られた様な断面を見せ、辺りには殆ど血が流れていなかった。それ故に、切り捨てられた刺客達の体は異様な光景を見せていた。
　まるで、夜道に打ち捨てられたマネキンのように。
　間延びしてくぐもった破裂音が響いた。
　聞き慣れない発砲音に視線を向けると、エアニスの視界一杯に投網が広がっていた。エアニスは引かずに前へ飛び、横薙ぎの一閃で網を斬り裂く。しかし網は右腕と右足に引っかかり、彼の動きを妨げた。その隙を捉え刺客の一人がエアニスに掴みかかり、剣を持つ左手を押さえつけた。残りの刺客達が、銃をエアニスと、彼に掴みかかっている刺客に向ける。アダマンタイトを纏った黒マントの刺客は、銃撃が効かないという事を活かし、味方ごとエアニスを撃つつもりなのだ。
　エアニスは自由な右手で胸元の短銃を抜き、刺客の被るデス・マスクに銃口を押し付け弾丸を打ち込む。１秒も無い間に、連続して３発。アダマンタイトで作られた仮面はエアニスの銃弾をことごとく弾き飛ばすも、３発目の銃弾の衝撃が仮面越しに刺客の額を割った。崩れ落ちる刺客のマントを剥ぎ取りエアニスが自分の体を包むのと同時に、周りの刺客達から一斉射撃を受ける。しかしアダマンタイトのマントによって、襲い来る銃弾の雨はエアニスの体を揺さぶる程度の効果しか生み出さなかった。
　エアニスは奪い取ったマントのフードを被り、そのまま刺客たちを斬り倒しにかかる。銃弾を

避けたり、剣で弾き飛ばす必要が無くなり、彼の刺客達を倒すペースは格段に上がる。
　土煙を巻き上げエアニスの足元が破裂した。着弾と同時に弾が破裂する榴弾だ。しかしエアニスは地面が弾けるよりも先に宙へ舞い、一番高い丘に立つ榴弾銃を構えた刺客に飛び掛かっていた。
　丘に立つ刺客は慌てて榴弾を弾を放つが、エアニスは羽織ったマントを振り抜き榴弾を絡め取る。
「ぅ、うわ ぁあああっ！！」
　丘の上の刺客が声を上げた。
　ジュドッ
　着地と共に、刺客の肩口を深々と切り裂く。刺客は、歪んだ人影となって、地面に崩れ落ちた。

　思わず刺客達の動きが止まった。
　丘の上に立つ、紅い剣を持った人影。
　やけに大きく見える月を背に、髪を風に揺らしている。
　その琥珀の髪は、月の光を照り返し銀糸の髪にも見えた。
　それを見た刺客の数人は、一つの可能性に気付き、凍りつく。

◆

「月の光を纏う者・・・？」
「あぁ、誰が付けた二つ名か知らんが、世間にはその名前で通ってるぜ。
　突然戦場に現れて、たった一人で何百人という人間を斬り殺して行く、とんでもない化け物って話だ」
　身振りを交え、男は大仰に語った。
「たった一人で・・・何百人も？」
　その話を聞いたチャイムは、すぐにとんでもないホラ話だと斬って捨てたが、チラリ、とエアニスやトキの顔が頭をよぎった。
　エアニスは船に乗り込んできた数十人もの刺客を、たった一人で倒してしまった。トキもどうやったかは知らないが、たった１人で戦艦を１隻、乗っ取ってしまった。そして、２人の魔族。
　常識では測れない存在がいるという事を、チャイムはつい先日実感したばかりだった。
　男は楽しそうに噂話を続ける。
「何者なのか、どのような意思で動いていたかも一切謎。
　写真も無いから、手配書には本名かどうかも分からない名前しか記されていないんだ。
　突然戦場に現れ、奴が肩入れした勢力に必ず軍配を上げて行く。ただ、どこの勢力に肩入れするかは奴の気分次第らしく、結局何が目的で動いていたのか分かる事はなかったらしい。
　こうやって奴に賞金をかける奴もいれば、逆にザード=ウォルサムを英雄として祭ってる国もある。戦場に現れることで、各国の戦力の均衡をとっていたと言う噂もあれば、ただ自侭に人殺しを楽しんでいたという噂もある。そんな所から、"戦荒らし"なんて呼ばれ方もしていたな」
　ごくり、と喉を鳴らすチャイム。
　この世界には、エアニス達以外にも、まだまだ常識を超えた強さを持つ存在がいるのだろうか。
「ま、たった一人で何百人も斬り殺す奴なんて居るわけ無いわな。戦争が終わってから、ザード=ウォルサムが現れたという話は全く聞かなくなっちまったし。実際、賞金は賭けられているが、そんな存在自体、実在してるかどうかも怪しいもんだ。ただの都市伝説、噂だよ」
　結局、最後はそう笑って話を締めるギルドの職員。話をしていた彼自身も信じてはいなかったらしい。しかし、チャイムやレイチェルには、冗談には聞こえなかった。
「その、"月の光を纏う者"って呼び名は、どういう意味なの？」
「ふむ。それにも色々説があるんだがな」
　ギルドの職員はチャイム達と話をするのが楽しいのか、調子良く噂話を続ける。
「ザード=ウォルサムには大きな特徴があってな。長く伸ばした銀の髪をしているらしい」
　確かに銀の髪を持つ人間はこの国では珍しい。体の色素に異常がある者や、元々遺伝的に色素の薄いエルフ族にしか見られない特長だ。
「そして奴が現れるのは夜の戦場だけで、まぁ、そうなると奴の姿が目撃されるのは月明りのあ

る夜に限られるわな。だから月と紐付けた二つ名がつけられたんだろう。
　そして、奴の姿を見た数少ない目撃者達は、皆同じような例えで奴の姿を語るって話で・・・」

「月明かりが銀糸の髪を淡く輝かせ、
　まるでザード=ウォルサムは、月の光を纏っているかのようだった」
　突然、黙って書類にペンを走らせていたトキが口を挟んだ。

『・・・・・。』
　突然割って入ったトキの言葉に、ギルドの職員とチャイム、レイチェルは言葉に詰まってしまった。
　なぜ、と言われればはっきりとは言えないが、チャイムとレイチェルには、トキがイラついているように見えたのだ。
「書類、書けました。
　お金頂けますか？」
　まるで話を中断させるかのように、トキは職員に手続きの催促をした。

◆

「まさか・・・こいつは・・・！」
　刺客の一人が恐々と呟く。他の刺客達も同じ想像へ行き着いたのか、戦意を失いじりじりと退ずさっている。
「・・・ッ！」
　マントを翻し、刺客の一人が逃げ出した。それに続くように、他の刺客達もエアニスから離れてゆく。
　ヴン・・・
　エアニスの握る剣にまとわり付いた赤黒い光が、虫の羽音に似た音を立てその輝きを増した。
「 逃がすか 」
　笑みを噛み殺す様に、かすれた声でエアニスが呟く。
　ばがっ！
　エアニスに背を向けた刺客の体が両断された。
　エアニスが紅く輝く剣を刺客に向けて振るった。たったそれだけの事で、剣の間合いの遥か遠くに居た刺客は斬り倒されてしまったのだ。
「魔導だと・・・！？」
　斬り飛ばされた刺客とは違う方へ飛んだ刺客が目を剥く。そして、その刺客も首元に不可視の衝撃が打ち込まれ、視界がグルリと回転し彼の首は地面へと落ちた。
　彼が最期に見たものは、月の光に照らされ淡く輝く銀の髪。

　それは、とても綺麗だった。

◆

　墓標の丘に静寂が戻る。
　そこに立っているのは、風になびく髪を月の光で鈍く光らせたエアニスのみである。
「まだ・・生きていたのか・・・」
　呻くような呟きにアニスは振り向く。彼が斬り倒した刺客の一人だ。仰向けに倒れこみ、腹の傷口を押さえながらエアニスを見上げる。
「教えてくれ・・・お前は、まさか・・・」
　どっ
　エアニスの剣に右胸を貫かれ、刺客は静かに目を閉じていった。

　(　だれも傷つけないで　)
　かつてレナに言われた言葉が、耳鳴りのようにエアニスの中で響いていた。
「俺は、何も変わってない・・・」
　エアニスは墓標の前に座り込み、頭を抱えうずくまる。
「少しアタマに来ただけで・・・このザマか・・・」
　襲い来る刺客ばかりではなく、逃げようとする刺客まで、すべて斬り捨ててしまった。　逃げる者をまで倒した理由は、ここでの出来事がルゴワールの上層部へ報告される事を危惧したというより、単純な"怒り"による所が大きかった。
　銃弾で欠けた墓石を指でなぞり、沈み込んだ声で呟く。
「当分、お前に合わす顔が無さそうだ。
　まだ暫く、こんな事を続けなきゃならないみたいだしな・・・」
　レナとの約束を忘れた訳ではなかった。しかし、だからといって今エアニスが身を置く戦いを放棄する訳にはいかない。"彼女"達を、守らなければいけない。
　こんな想いをするのなら、初めからあんな事に首を突っ込むんじゃなかったと、エアニスは後悔する。
「もう仲間を奪われたくないんだ。
　お前との約束を守れなくても、これ以上手を汚す事になっても、もうそれだけは嫌なんだ」
　彼女達を見捨てるつもりが無い以上、エアニスはこれからも手を汚し続けなくてはいけないだろう。葛藤がエアニスの心に渦巻く。
「・・・行くよ。ごめんな」
　立ち上がりレナの墓標に背を向けたエアニスの右手を、不意に温もりのある何かが触れた。

「！」
　驚いて振り返ると、そこにはエアニスの手を握る、レナの姿があった。

　しかしエアニスは、自分への嫌悪感からレナの顔を見る事は出来なかった。レナがどのような表情をしていたのか分からなかったが、レナの唇が言葉を紡ぐのを見た。
　その声はエアニスの耳に届く事はなかった。
　しかし、エアニスは確かにレナの唇が、その言葉を紡いでいたのを見た。

　ー 守ってあげて ー

「っ！
　レ ナ ・・・！！」
　エアニスはその言葉に弾かれたように面を上げ、彼女の手を取ろうとする。
　しかし、気付いた時にはそこには誰も居らず、虫の声が響く丘にエアニスは一人で立っていた。

　まるで夢から覚めたかのような感覚。しかし、それが夢でも幻想でも無い事を証明するかのように、エアニスの右手には彼女の温もりが残っていた。
　自分の右手を握り締め、頬に当てる。
「ああ・・・分かった」
　レナの意思に触れる事が出来たような気がして、今まで張り詰めていた気持ちが解放されてゆく。
　エアニスの頬に雫が流れた。
　雨でも降ってきたのかと空を仰ぐが、そこには雲一つ無い降るような星空と、銀の月。
　すぐに雨では無いと気付き、エアニスは自分の目元を押さえた。
　涙は流れていたが、エアニスの心は穏やかだった。

第25話　ブルー ・ バカンス

「・・暑ぃ・・」
　エアニスがハンドルを握りながらぼやいた。
「この辺りは周りの地形も手伝って、大陸で一番温かい気候が続く土地ですからねぇ。
　この先のロナウ山脈を越えれば、少しは涼しくなると思いますけど」
　何故か涼しげな顔をしたトキが、助手席で地図を眺めながらエアニスを励ます。
「その山脈越えるには、あとどのくらいかかる？」
「そうですねぇ。このペースで走れば、５日もあれば十分かと」
「まだまだじゃねぇか・・・」
　ますます気力が削がれ、エアニスはハンドルを抱え込む。
　エアニス達の車は、草木がまばらに生える荒野を走っていた。すぐ近くには広大な砂漠が広がっており、このままでは数年でこの辺りも砂に飲まれてしまうだろう。よって気温は年間を通して高く、さらに時刻は正午を回った辺りで一番暑い時間帯でもあった。
　既にエアニスはローブと上着を脱ぎ、長い髪をポニーティルに纏めて極力涼しくなる格好をしている。髪を纏めた事によって、チャイムに"可愛い"などと、からかわれたが、そんな事に構っていられない程、エアニスは暑さで弱っていた。
「そんなに暑いの苦手なんだ・・・エアニス」
「・・・あ ぁ・・・」
　チャイムからの質問に、元気の欠片も無い声でエアニスが答える。
「あたしは夏は大好きだけどなー。
　なんて言うか、他の季節には無い、開放感があるじゃない。暑いんだけど、それだからこそ、何するにしても楽しいっていうか、キモチイイって言うか、さ」
「・・・何言ってるか分かんねーよ」
「むう。
　じゃあエアニスは何で夏が嫌いなのよ」
「冬は寒いけど、寒かったらその分着込めば暖かくなるからいいんだよ。
　夏は暑いからと言って、服全部脱いだとしても、やっぱ暑いもんは暑いじゃねーか。
　何より汗かくのが嫌だね。夏は１日に３度、風呂に入りたい」
「アンタ、ほんとに庶民的な意見ばっか言うわね・・・。
　そんなに暑いのが嫌なら、まずそのむさっ苦しいロン毛をなんとかしなさいよ」
　エアニスはピクリと眉を動かしチャイムを横目で睨む。
「貴様、女のくせに、人の伸ばした髪を簡単に切れなどと良く言えるな。
　乙女心持ってんのか？」
「失礼ね。アンタよりは持ってるつもりよ」
「いいや、俺の方が持ってるね」
「・・・男が乙女心について張り合ってどうすんのよ・・・」

　ここまで話した所で、チャイムは思わずクスリと笑ってしまった。
「何が可笑しい？」
　イライラした表情でチャイムを睨むエアニス。
「ううん。なーんにも」
　何が嬉しいのか、妙に清々しい笑顔のチャイムはエアニスの問いを受け流した。エアニスは毒気を抜かれたような顔で、頭の上に疑問符を躍らせる。

　チャイムが喜んでいたのは、エアニスがようやくいつもの調子に戻った事であった。
　船上での襲撃以来、エアニスは暫くの間、何をするにも上の空といった様子だったが、墓参りから帰って来てからは、いつもの調子を取り戻していた。チャイム達と別行動を取っていた３日の間に、エアニスに何があったのか知らないが、エアニスがいつもの調子に戻った事は喜ばしい事であった。
　それが２日前。
　早朝にエアニスが墓参りから戻り、その日の昼から４人は再び目的地へ向けて旅を再開したのであった。

「何だよ、気味悪いな・・・言いたい事があるなら言えよ」
「ねぇ、レイチェルは夏と冬ならどっちが好き？？」
「俺の話聞いてる？」
「やっぱ冬の方が好きかも・・・。
　わたしも、暑いのは苦手だから・・・」
　大きく開けた胸元に、ぱたぱた風を送りながらレイチェルは答える。無防備なその仕草に、チャイムとエアニスは思わずギョッとする。
「こら、レイチェルっ！
　エアニス達もいるんだから、もーちょっと、何というか・・・
　って、エアニス！　見てんじゃないわよスケベ！！」
「み、見てねぇよ！！」
　エアニスはチャイムに首を捻じ曲げられながら、必死でハンドルを握る。一般の女性に比べ、このテのモラルが欠如しているレイチェルは、何でチャイムとエアニスが慌てているのか理解できずに首を傾げた。
「・・・エアニス、はしゃぐのはいいですが、ちゃんと前を見て運転してくださいよ」
「こんな砂しか無い場所でどうやったら事故るってんだよ！！
　・・・っーか！！ お前もレイチェルの胸ガン見してんじゃね　　」
　どぐわしゃっ！！
　突然の衝撃に、エアニス達は一斉に前へつんのめった。

◆

　炎天下の中、４人はボンネットから煙を上げる車を眺めていた。
「・・・ラジエータポンプが潰れてますね」
　トキが車の損傷具合を調べながら言う。
　エアニス達の車は大人の膝くらいまである岩に衝突し、車体の前面をぐしゃぐしゃに潰していた。
「走れない事はないですが、この暑さでラジエータ無しで走っていたら、すぐにオーバーヒートしてしまうでしょうね。どこか修理できる街まで持てばいいのですが・・・ねぇ」
「・・・すまん」
　トキのジト目に、エアニスはうなだれるように頭を下げた。
「この先のオーランドシティに、軍の基地がある。車の修理をしてくれる技師も、あそこなら居るはずだ。
　１０キロも無いと思うが、そこまで持ちそうか？」
「オーランドシティ？」
　エアニスの提案に応えたのはトキではなく、チャイムの戸惑うような声だった。
「どうしたの？」
　チャイムの不自然な反応に、レイチェルが心配そうな声を上げる。エアニスとトキもチャイムに視線を向けた。
「あうぅ、と・・・・
　オーランドといえば、ホラ、観光地！！
　海があるわっ！！！」
　はぁ？ とエアニスが呆れた声を出す。
「レイチェル、海で泳いだ事、無かったんだよね！
　丁度いいじゃない、このまま進むとどんどん寒くなっていくから、ココが海で遊ぶ最後のチャンスよ！！」
「海・・・かぁ・・・」
　レイチェルも嬉しそうな表情を浮かべる。
　やれやれ、といった様子でエアニスは頭を掻き、トキもそんな２人を笑顔で眺める。
　オーランドシティは、この辺りで唯一の観光都市であり、各地から海へ泳ぎに来る観光客が多く集まる。確かにチャイムの言う通り、この先の山脈を越えれば一気に気温が下がり、秋の終わりといった気候になっているだろう。赤道が北を走るこの大陸では南下を続けるほど寒い気候の土地となるので、海で泳げるような街は、この先オーランドシティしか無い。
　どうせ車の修理で街に寄らなくてはいけないのだ。車の修理をしている間、海で羽を伸ばすのもいいだろう。
「構いませんよね、エアニス？」
　にこやかに言いながらも、どこか否定は許さないといった空気を漂わせトキが確認する。
「まぁ、いいんじゃないのか？」

「やったぁ！」
　苦笑いで頷くエアニスに、表情を輝かせるチャイムとレイチェル。
「そうと決まったら早速、オーランドシティへ出発よ！」
　皆を急かすようにチャイムは３人の背中を、車に向かって押した。
「オーランドシティですか。僕一度も行った事無いので、楽しみですねぇ」
「お前まで観光気分かよ。やむを得ずの寄り道なんだから、修理が済んだらすぐ出るぞ」
「あぁああー、でも、せめて一泊はしていきたいです・・・」
　何だかんだで楽しそうな３人の後ろで、チャイムは気付かれないように小さな溜息をついた。

◆

「この型のラジエータはウチには置いて無ぇなあ」
　街外れの小さな自動車修理工場でエアニスは車の修理を頼んでいた。軍のトラックや装甲車の修理を主に受け持つ、街に幾つかある修理工場の１つだ。
「街の同業者にゃ当たってみるが、もし部品が無かったら街の外から取り寄せなきゃならん。
　そうなったら部品が届くまで２週間はかかるぞ」
　白髪交じりの技師が難しい顔で唸る。
「部品さえあれば１日で終わる作業なんだが・・・」
「壊れたラジエータ周りを、丸々別の車の物と交換する事は出来るか？」
「そりゃ出来るが、金は結構かかるぞ。大作業になっちまうから、修理も３日がかりだな」
「３日、か」
　エアニスは息を吐いて頭を掻いた。
「分かった。もし部品がこの街で見つからなかったら、その修理で頼む。金はかかってもいいから、１日でも早く修理をしてほしいんだ」
　技師は無精髭の生えた顎を撫ぜると、エアニスに力強く頷いた。

◆

　工場を出て、エアニスは溜息をつく。少なくとも２日、最悪の場合４日程度、この街に滞在しなくてはならないようだ。自分の運転ミスを心底悔やみながら、大通りに向かい歩く。
「・・・いや、でもアレは全部俺のせいってワケでもねぇよな・・・やっぱ」
　レイチェルの胸チラとかチャイムのヘッドロックとかトキのはばかる事の無いセクハラ視線とか。考えれば考えるほど腑に落ちず、だんだん貧乏くじを引かされた気分になってきた。

　エアニスは一人で歩いていた。街の中心地でチャイムとレイチェル、トキを車から降ろし、エアニス一人で街外れにある修理工場を訪ねたのだ。今頃チャイム達は宿に荷物を置いて休んでいる頃だろうか。

こうして街外れを歩いていると、嫌が応にも目に付く物がある。
ブロック塀に穿たれた無数の銃弾痕。壁に食い込んだまま折れた剣の切っ先。焼けて倒壊したままの民家。
常夏の観光都市として有名なオーランドシティだが、街外れには先の戦争の爪痕が生々しく残っていた。大戦中、この辺りは特に戦火が激しく、市街地にまで戦場を広げ多くの一般市民を巻き添えにしているのだ。
まだ戦争が終わって１年半という事を考えれば、このような光景が残っているのは珍しくは無いのだが、街の中心街の栄え具合と比較すると、どうしても取り残されている感がある。
エアニスが大通りに出ると、目の前を一台の車が走り去った。軍の車でも、仕事や旅の足に使われる汚れて傷だらけの車でもなく、趣味人が乗るようなピカピカの高級車だった。どこかの富豪が観光にでも来ているのだろう。その先には極色彩で彩られたホテルや飲食店の看板が立ち並んでいる。
ふと、エアニスは今歩いてきた裏路地の町並みに振り返る。大通りに比べると、まるで別の国か、別の時代である。どことなく不愉快な気持ちになるが、別に自分には関係の無い事である。ならば、何でこのような気持ちになるのか自分でも分からず、エアニスは首を捻った。

◆

「おー・・・」
エアニスは目の前に広がる白い砂浜と、コバルトブルーの海に感嘆の声を漏らす。柔らかな千切れ雲が抜けるような青い空にぽかぽかと浮かび、陽射しは暑いものの木陰に入るだけで随分と涼しく感じられる。頬を撫ぜるカラッと乾いた潮風が気持ちよかった。エアニスはチャイムの提案も悪いものじゃなかったなと考えを改めた。
宿へ戻る前に浜辺へ寄ってみたのだ。天気も良く、海水の透明度も驚くほど高い。長い間大陸の各地を旅してきたエアニスだったが、今まで見た中で最も綺麗な海かもしれない。白い浜辺には点々と水着姿の観光客が見えた。思った程観光客は少なく、これならば快適に海で遊べるだろう。
「あー、エアニス戻ってきたんだ。早かったわね」
聞き覚えのある声にエアニスは振り向いて、そして言葉を詰まらせた。
目の前には予想通り、チャイムとレイチェル、トキの姿があった。しかし、チャイムとレイチェルが水着姿だという事は、エアニスの予想外であった。

　チャイムは赤いタンニキタイプの水着を着て、ビーチパラソルを担いでいる。その後ろには、長い髪をいつものようにまとめた、水色のビキニ姿のレイチェル。ついでにいつもと同じ姿の、両手に色々と荷物を持たされたトキがいた。
　普段、野暮ったい旅装束やマント姿しか見たことの無いチャイムとレイチェルが肌をあらわにした姿に、エアニスは思わず視線を明後日の方角へ外した。
「な、何だよ、その格好は・・・」
「何って、水着。宿で売ってたから。まだお昼だし、すぐにでも泳ぎに行かないと損でしょ！！」
　チャイムは、今にも駆け出して海にダイブしそうなテンションだ。レイチェルも、さっきから海に視線がクギ付けになっている。
「えへへー。レイチェルの水着もあたしが選んだのよ。どう、かわいいでしょ！？」
　照れ臭そうにはにかむレイチェルの肩を掴み、自分のセンスを自慢するチャイム。確かに似合っていると感じたが、それは水着のお陰ではなくレイチェルのスタイルの良さによる処が多いだろう。
　透けるような白い肌に、形の整った手足と胸元。それでいて華奢なイメージを与えるボディラインに似合わない水着など無い。スタイルの良さは、チャイムも負けていない。レイチェルに勝るとも劣らぬプロポーションに、ほどよい肉付きの四肢が彼女の性格と同じ様な躍動感を感じさせた。なおかつ２人とも、なかなかの美人ときている。２人は浜辺にたむろする男達の視線を集めていた。それと、胸の大きさがチャイムよりレイチェルの方が大きいという事を、エアニスは今日この日、初めて知った。
「まぁ、・・・似合うと思うぞ。うん」
　妙に落ち着きを無くしたエアニスは、そのセリフを何故か２人の後ろに立つトキを見ながら言った。
「え。エアニス、それ僕に向かって言ってるんですか？」
「んな訳ないだろ！！」

「だったら僕を見ながらそういうセリフを言わないでいださいよ」
　トキの抗議にレイチェルに視線を戻すが、数秒と持たずエアニスの視線は泳ぎ始めた。
「あー・・・」
　チャイムがにんまりと笑顔を浮かべる。
「さてはエアニス、テレてるなーっ！ このっ！！」
　チャイムはエアニスに自分の白い肩をドンとぶつける。
　図星を突かれたエアニスは顔を赤く染め、慌てて顔をそむけた。
「うるさい黙れ殺すぞ！！
　遊びに行くならとっとと行って来い！！」
「えへへー、エアニスの弱点見ーっけ！
　今日はこのネタでずーっとからかってあげるわっ！！」
　満面の笑みを浮かべながらガッツポーズを見せ、チャイムは砂浜へ走り去った。
「いやー、羨ましい限りですねー、エアニス。代わって貰いたいものです」
「黙れドＭが・・・」
　色々と荷物を担がされたトキがポンとエアニスの肩を叩いて浜辺へ歩いて行き、
「あ、エアニスさん、チャイムが言ってたんですけど、後でエアニスさんでスイカ割りするって・・・
　わたし、スイカ割りっていうゲーム知らないから、後で教えてくださいね！」
「おぉぉ・・・チャイムを使ったスイカ割りなら教えてやるよ。後でスコップを用意しておけ。とりあえずレイチェルも行って来い・・・」
「はい！」
　悪意の欠片もないレイチェルの無邪気な笑顔を、エアニスは頭を抱えて見送った。

「馬鹿ばっかだ・・・」
　そう呟いたエアニスの口元は何故か緩んでおり、いつの間にかこの状況を楽しいと感じている自分に、僅かながら驚いた。
「はっ、俺も一緒、か」
　エアニスもブーツを脱ぎ捨て、素足で浜辺へ降りた。

第26話　求め与えられるもの

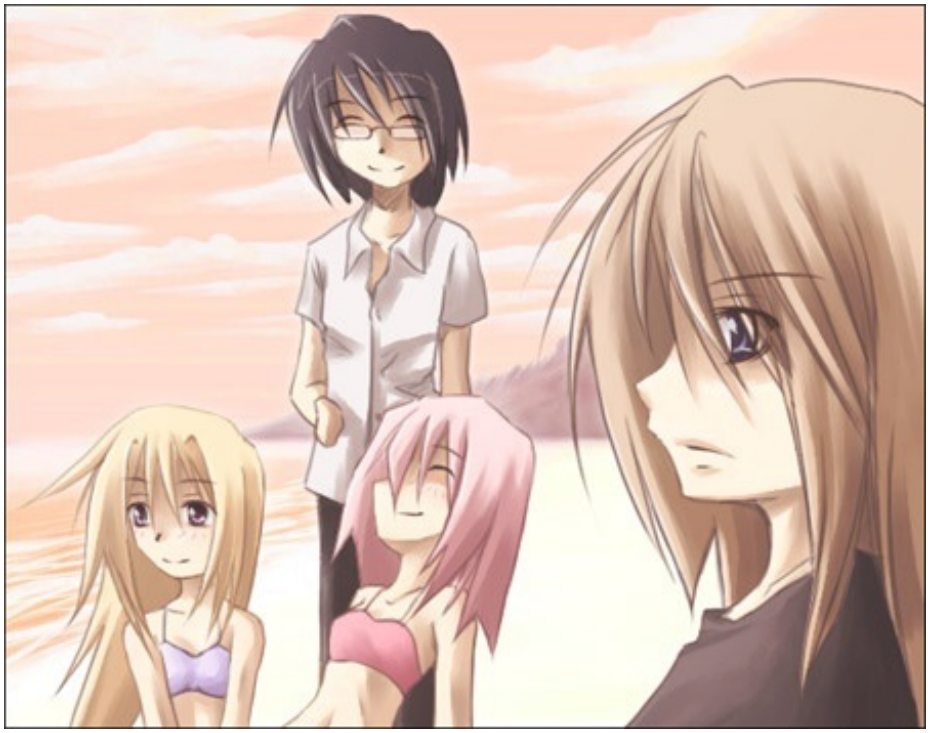
　陽射しは強いものの、海辺という事もあり、それなりに涼しい風が吹いている。
　エアニスはズボンを膝下まで上げて、波打ち際に立っていた。足元を波が洗い、なかなか気持ちが良い。妙に平和な気分に浸りながら、水平線を眺める。最初はこんな事をしている暇など無いと思っていたが、今ではもう暫くここでゆっくりしていたいと思うエアニスだった。

　後ろで波を蹴る足音がした。
　エアニスは無造作に一歩横へ動くと、エアニスがいた空間をチャイムの飛び蹴りが行き過ぎていった。エアニスは行き過ぎるチャイムの足を思い切り払い、空中で半回転したチャイムはうつ伏せで思い切り水面に叩き付けられてしまった。
「・・・おーい、生きてるかー」
　チャイムは暫くうつ伏せのまま水面に浮いていたが、肩を落としながら立ち上がった。
「ぐそー・・・なんで一発も当てられないかなー・・・」
　水着姿のチャイムは、鼻を押さえながらエアニスを睨む。アスラム行きの船で始めた剣術稽古はまだ続いている。よって、エアニスに一発でも攻撃を当てられたら合格という課題も今だ続いており、チャイムはこうして思いつきのように不意打ちをしてみるのであった。
「今のお前じゃ、一生かかっても無理だな」
「むう」
　頬を膨らませるチャイム。まぁいいや。今日は諦めた。
「エアニスは泳がないの？」
　チャイムとレイチェルが泳いでいる間、エアニスはこうして、足だけ海に入り、景色を眺めているだけだった。服装も当然水着ではなく、いつもローブの下に着ている黒いシャツとズボン。腰にはいつも通り剣が下がっており、海で遊んでいる格好には見えなかった。
「俺はいいよ」
「あー・・・さてはエアニス、泳げないとか？？」
「いいや、人並み以上には泳げるつもりだけどさ」
　チャイムの茶々に、エアニスは淡々と答える。
「まだ体に傷が残ってるんだ。先の戦争のな。あんまり上着を脱ぎたくないんだ」
「あ・・・」
　悪い事を聞いた、と、チャイムは自分の頭を叩く。
「傷跡・・・」
「ん？」
「あたしで良かったら治そうか？
　あたしなら、かなりの古傷でも目立たない位まで綺麗に治せると思うけど・・・」
　チャイムの申し出にエアニスは驚く。自分の治療魔法の力を人に頼られるのを嫌う彼女が、たかが古傷の痕を消す為だけに、その力を貸してくれると言うのだ。それなりに信頼されている証

拠のような気がして、エアニスは思わず笑みをこぼす。
「いいや、そんな事の為にお前が力を使うことはないさ。ありがとな」
　素直に笑って礼を述べるエアニス。チャイムはあ、そう、といった表情で頬を掻いた。　チャイムに遠慮したというよりも、まだエアニスにとって戦争中に付いた傷跡は、消えてしまってはいけないような気がしたのだ。傷が消えることで、戦争の事を忘れてしまうような気がしたのだ。
「かき氷買ってきましたよー」
　間延びした声で、トキがレイチェルと一緒にカップに盛られたかき氷を持ってきた。
「おー、悪いな」
「ありがとー。いちご味ある？」
　チャイムはかき氷を手に取り、トキの姿を見る。ズボンの裾を捲くりビーチサンダルを履いているという所意外、彼も普段と同じ格好をしていた。チャイムはエアニスに意味ありげな視線を送り、エアニスがそれに気付く。
「トキも似たような理由だ」
「・・・そっか」
　肩を竦めて答えるエアニスに、チャイムは残念そうに息を吐く。
「何の話です？」
「別に」
　しれっ、とトキの問い掛けを受け流し、かき氷を口に運ぶエアニス。
「いやらしいですね。お二人で内緒のお話ですか。視線だけで分かり合える仲ですか」
「そうだ！！」
　エアニスとトキの口論が始まる前に、チャイムが名案を思いついたかのような顔でエアニスに掴みかかる。
「な、何だ何だ！！？」
　チャイムの満面の笑みがすぐ目の前に迫る。髪が濡れているせいで、妙にチャイムが色っぽく見えてしまい、つい視線をそむけてしまうエアニス。
「ビーチバレー！！
　みんなでやろう！！」
「・・・ビーチバレー？」
　反射的に、面倒くさい、と言い返そうとするエアニスだったが、チャイムの嬉々とした表情に言葉が詰まり、そして理解する。要はエアニスやトキに気を遣って、水着に着替えなくても皆で一緒に遊べるゲームを提案してくれているのだ。
「・・・ビーチバレー、ね。よし、やるか」
「あらま。珍しく乗り気ですね、エアニス」
「じゃ、私、ボール買ってきますね！」
　レイチェルは売店に駆け出し、チャイムは流木を拾って砂浜にコートを描き始めた。
　エアニスも、腰に下がる剣をベルトから外し、髪を纏めて準備運動を始める。

◆

　傾いた太陽が水平線に触れる。
　沈み行く夕日を、４人は砂浜に座り込みながら見ていた。
「あ゛ー・・・疲れた・・」
「あはは、久し振りにいい運動になりましたねー」
　エアニス&チャイム　VS　トキ&レイチェルとなったビーチバレー対決は、負けず嫌いなお互いのリベンジ合戦を延々と夕刻まで続ける事になった。
　最後はトキとレイチェルが根負けしてエアニス、チャイムチームの勝利に終わったのだった。
「お前ら・・たかがビーチバレーにむきになり過ぎだ・・・」
「一番むきになってたのはエアニスさんじゃないですか・・・」
「・・・そうか？」
　エアニスを除く三人が同時に頷き、皆で笑った。
「はは、あー・・・。こんなに笑ったのは・・・どのくらい振りかな・・」
　エアニスが誰に言うでもなく呟いた。本当に、どのくらい振りだろうか。
「・・・そうですね。けっこう殺伐とした人生歩んでましたからね。
　僕もまさか今頃になって、こんな青春ごっこをするとは思いませんでしたよ」
「ははっ」
　チャイムとレイチェルは、そんな二人のやり取りを夕日を見つめながら聞き流した。
　エアニスやトキが、今までどのように生きてきたか、改まって聞いたことは無い。興味が無いといえば嘘になるが、たかが興味本位で聞ける事では無いような気がするからだ。
「これからも、もっとみんなで笑っていられればいいですね」
　レイチェルがぽそり、と呟く。
「私はあの日・・・何もかもを無くしたと思ったけど・・・。もう、お腹の底から一緒に笑える人達が居るんですから。
　ホント、人生って何があるかわかりませんね」
　そう言うレイチェルの笑みは、何処と無く寂しげだ。
「そうよっ。過去はどうあれ、未来があれば、これからいくらでも笑っていられるわっ！」
レイチェルを元気づけるように、チャイムは拳を振り上げる。
「未来があれば・・・ですか。そうかもしれませんね」
　ここで４人は言葉を切り、波の音を聞きながら日の沈む水平線に目を向けた。



「俺は　」
　エアニスの言葉に、トキ達の視線が集まった。しかし、何かを言いかけただけでエアニスは口をつぐんでしまい、親指で唇をはじいた。
「あーあー、ヤメだ、ヤメ。宿に戻るぞ。　ココにいると、どうにも変な気分になっちまう」
　すく、と立ち上がり、鞘に収めた剣を肩に担いだ。
「何よ、気持ち悪いわねー。最後まで話しなさいよ」
　チャイムの抗議を無視し、エアニスは宿の方へ向かい、歩き出してしまう。
「もー、勝手なんだから・・・」
　不満を漏らしてみても、時刻はすでに夕刻。海水浴もお開きにする時間であったので、チャイムとレイチェルも肩にシャツを羽織り、エアニスの後を追った。

◆

「楽しかったけど、まだまだ遊び足りないわねー」
「売店のおじさんから、西の浜辺から少し沖に出れば、珊瑚礁が見れるって聞いたわ」
「へぇ、いいじゃないですか。明日ボートでも借りて見に行って見ますか？」
「珊瑚礁か。悪くねーな・・・」
　とっぷり観光気分に浸った４人は、宿に向かって広い街道を歩いていた。
「あぁ？」
　エアニス達の向かう方角から、突然タイヤを滑らせながら黒い車が猛スピードで現れた。反射的にエアニスは肩に担いだ剣の柄に手を掛けたが、車はエアニス達の脇を抜けてそのまま走り去っていった。
「危ねー運転する奴だな」

　エアニスが車を横目で睨んで先に進もうとすると
　ボガンッッ
　エアニス達の泊まる宿の方角で爆発が起こった。

「おいおい・・・！？」
「エアニスさん、さっきの車・・・！」
　レイチェルがハッと声を上げた。猛スピードで走り去った車と、車の来た方角での爆発。レイチェルの連想は最もだ。車の走り去った方角を見ると、まだ車はエアニス達の視界の範囲に居た。
「トキ、銃は・・・！」
「駄目です、人目が多すぎます」
　街道にはエアニス達以外にも、地元住民や観光客が歩いており、爆発の煙を眺めていた。本来、軍隊しか持つ事の許されない銃をこの場で使うには問題がある。そうしているうちに、車は見えなくなってしまった。
「ちょっと、エアニス、爆発した宿って、あたし達がチェックインしたホテルよ！！
　ひょっとして荷物ふっ飛ばされてるかもしんない！！」
「マジかよっ！！」
　今からあの怪しい車を追うのは無理である。それよりエアニス達は、自分達の荷物が心配になり、慌てて爆破された宿屋へ向かい走り出した。

　４人は宿の入り口へ辿りつく。幸いと言うべきか、爆発はエアニス達の部屋から離れた宿の入り口で起こったようだ。胸を撫で下ろすエアニス。
「何だ・・・ルゴワールの刺客・・・か？」
「ルゴワールの手口にしては、稚拙すぎると思いますがね」
　トキは崩れて焼け爛れた宿の外壁を見て、何が起こったのかを推察する。
　爆発地点と思われる場所で、人だかりが出来ていた。行き交う怒号と、女性の泣き叫ぶ声。どうやら怪我人が居るようだ。
「どいて！」
　チャイムは真っ先に人垣を押しのけ、騒ぎの中心へ向かう。また騒ぎに首突っ込みやがって、と内心毒づきながらエアニスも後に続く。
　人だかりの中央に、子供が倒れていた。口と腹部から血を流し、全身を石やガラスの破片で傷だらけにしていた。
　思わず口元を歪めるエアニス。一目見ただけで、手遅れだと直感した。内臓を大きく痛めていれば、魔導でも治療する事は難しいからだ。しかしチャイムはその子供に駆け寄り、子供の手首を触り、瞳の反応を探る。
「レイチェル！！」
「な、なに！？」

　普段見せない剣幕でチャイムはレイチェルを呼びつけ、その細い腕を掴んだ。
「レイチェルの魔力を分けて。この傷じゃ、私の魔力だけじゃ治療しきれない！！」
　その会話にエアニスが反応する。
「待て、チャイム。お前、魔力を人から奪う術を知ってるのか？」
　魔導の術の一つに、人から魔力を奪い取り、自分の力へ変換するという術がある。しかし、その術自は普通の魔導と異なり、魔力を一切使わず、精神コントロールのみで魔導を構築させるという特殊な術であり、習得も難しい部類に入り使い手は少ない。
　エアニスが他人の殺意を明確に感じ取れる能力と同じで、魔導というよりも体質的な特殊能力といった方が近い。
「エアニスはちょっと黙ってて！」
　焦るようなチャイムの怒声を無視し、エアニスはチャイムの横にしゃがみ込み、チャイムの手を掴んだ。
「なら俺の魔力を使え。いくら二人分とはいえ、人間の魔力じゃ心細いだろ」
　ようやくエアニスの言葉に耳を傾けたチャイムは、エアニスに握られた手へ意識を集中する。
「・・・・っ！！？」
　びくん、とチャイムの肩が跳ねる。
「エアニス・・・あんた・・・！？」
「早く始めろ。でないと、この子供、死ぬぞ」
「あ・・・うんっ！」
　そしてチャイムはアニスと繋いだ手から、エアニスの魔力を抽出する。それを自分の魔力へと変換し、治療の魔導を発動させた。

◆

　チャイムの治療により息を吹き返した子供は、駆けつけた街の救護隊へと渡され、その他の怪我人達と共に街の病院へと連れて行かれた。幸い、死亡者は一人も出なかったのだ。
　爆発のあった現場では、街に駐留する軍隊や役人が、野次馬から話を聞いたり、爆破跡を調査するなど、事件の捜査が始まっていた。
　その脇で、チャイムは、レイチェルとトキに付き添われ、座り込んでいた。そこへ、情報を集めに辺りを歩き回っていたエアニスが戻ってきた。
「やっぱ、ルゴワール絡みじゃないな。ここ数ヶ月のうちに、何度かこんな事件が起きてるらしい。犯人は、町外れに住む低級層の住民だろうってよ」
　聞いてきた話を簡単に伝えるエアニス。しかし、チャイムはそのような話はどうでもよかったようだ。
「エアニス・・・、その・・・」
「俺の魔力の事か？」
「・・うん、そう。助かったわ、あの子の怪我、私とレイチェルの魔力だけじゃ、治しきれなか

ったから・・・」
「そうか、良かったな。お役に立てて何より、だ」
「う、うん」
　ぎこちない受け応えのチャイムと、いつもの調子のエアニス。そんな二人の会話にレイチェルは首を傾げる。
「エアニスの魔力、とても人間の器とは・・・思えないわ」
　チャイムが言いづらそうに話した言葉で、レイチェルはようやくチャイムの様子がおかしい理由を理解した。トキに関しては、ノーリアクションである。エアニスは頭を掻きながらそっぽを向き、
「あぁ、別に隠してるつもりは無かったが・・・
　まぁ、ココで話すのも何だし、荷物引き上げて、別の宿で落ち着いてからにしようぜ」
「う、うん」
　歯切れの悪い返事を返し、チャイムは腰を上げた。

　そこに、白いマントを羽織った男が近づいてきた。チャイムはそのマントを見て、ハッと息を呑む。かつて、自分が所属していた、エベネゼル宮廷魔導師のマントだったからだ。
「失礼ですが、ここで大怪我をした子供を魔導で治療して下さったのは、あなた方ですか？」
　金髪の長身の男だった。歳は４０代前半といったところか。
「いいや。人違いだろ」
　エアニスはチャイムの手を引き、かばう様にして騒ぎの場所から立ち去ろうとする。しかし、当のチャイムが、その場から動こうとしなかった。
「？ おい、チャイム。行くぞ」
「・・・チャイム？」
　エアニスの呼びかけに反応したのは、チャイムではなく、宮廷魔導士の男だった。
「これは・・・驚きました。
　久しぶりですね。チャイム=ブラスハート」
　男の口から、一度だけ聞いた事のある、チャイムのフルネームが呼ばれた。ハッ、とエアニスはチャイムを見る。
「まさかこの街で会えるとは思ってもみませんでしたよ。元気でしたか？」
　チャイムは、その男の優しい笑顔を見たまま、呆然と立ちすくんでいた。

第27話　傷跡

「何なんだよ・・・アイツ」
　憮然とした表情で、テーブルに並べられた料理からポテトをつまみ、口に運ぶエアニス。
「おや、気になりますか？」
「別に」
「そうですか、エアニスにしては珍しく些細な事を気にかけているように見えたのでね。
　でも、僕は気になりますねぇ。チャイムさんの、昔の彼氏でしょうか？」
　トキの言葉にポテトを喉に詰まらせ、エアニスは盛大に咳き込んだ。
「っぶわはっ！！
　バカかぁお前！！アイツとあのオヤジ幾つ年が離れてると思ってんだよ！！」
「あっはっは一冗談ですよ、エアニス。リアクションが上手になってきましたねー」
「ぶっ殺すぞ！！」
　腰の剣に手をかけるエアニスへ、よく出来ましたと言わんばかりに拍手を送るトキ。そしていつものように乾いた笑みで二人を見つめるレイチェル。
　チャイムはエアニス達の囲むテーブルには居ない。
　レイチェルが肩越しに後ろを振り向くと、少し離れたテーブルにチャイムと、宿の爆発現場で出会った、エベネゼルの魔導士が向かい合って座り、話をしていた。
「・・・昔、チャイムが魔法医をしていた時の先生だという話ですし・・・
　チャイム、昔の自分の事はあまり話そうとしないじゃないですか。きっと、私達に聞かれたくない事もありますよ」
「分かってるよ・・・」
　なだめるように諭され、エアニスは再び大人しく食事を続けた。
　時刻は夕食時。偶然にも昔の知り合いと再会したチャイムは、状況を把握出来ないままのエアニス達を引き連れ、とあるレストランへ入った。
　あたしは先生と話があるから、アンタ達はココで適当にごはん食べてて。
　そうとだけ告げて、チャイムはエアニス達から少し離れたテーブルで、"先生"と呼ばれた四十代前半の男と向かい合い何やら会話をしながら食事をしていた。ふと、エアニスがチャイムのテーブルを見ると、最初は硬かったチャイムの表情も柔らかくなり、今では"先生"と談笑していたりする。

　ガリッ
　エアニスが無表情で噛み砕いた氷の音に、トキとレイチェルがビクリと肩を震わせる。エアニスをからかっていたトキも、彼が発する謎のオーラに押され大人しく注文した食事を待つ事にした。

「ごめん、おまたせ」
　エアニス達が食事を終え、紅茶を飲みながらくつろいでいると、チャイムと"先生"が３人の居るテーブルへやって来た。「何でお前も来るんだよ」といった視線で"先生"と呼ばれる男を睨むエアニス。その視線に気付き、男は口を開いた。
「あぁ、名乗り遅れました。私はエベネゼルでチャイムに魔導を教えていた、クラインという者です。今は臨時の派遣魔法医として、ここに滞在していてね」
　聞いてねぇよ。
　そう言葉にはしなかったが、トキとレイチェルにはエアニスの心の声が聞こえたような気がした。嫌な汗がレイチェルの背中を湿らせる。
「先生が病院の部屋を貸してくれるって」
「何？」
　意味が分からず眉根を寄せるエアニス。クラインは少しだけエアニスに顔を寄せると、
「大きな声では言えないが、今この街の観光施設はテロリスト達の標的になっているんだ。
　悪い事は言わないから、街で宿を取るのは控えた方がいい」
　顔を見合わせるエアニスとトキ。そんな事になっていたとは初耳だ。言われてみれば、街中の観光客も思いのほか少なく、この辺りで唯一の観光都市というふれ込みに拍子抜けしていた所だ。しかし、そのような理由があるのならば納得できる。ならば、街を歩いていた数少ない観光客風の人間達は、エアニス達のように街の事情を知らず観光に来てしまったのだろうか。あるいは危険を承知の上で、空いているビーチや割安になっている宿泊費を目的に訪れているのかもしれない。
「その点、私が勤める病院なら心配はいらないよ。彼らも、病院を標的にする事は無いからね」
　クラインは大概の人ならば信用してしまう、人の良い笑顔で提案をする。トキの嘘臭い笑顔を見慣れているエアニスには分る。彼が本当に親切心から言っているという事が。
　しかし、
「怪我もしていないのにクスリ臭いベッドで眠りたくは無いな」

　エアニスはそう言い放った。クラインの所属する"エベネゼル"という国に思う所があるため、エアニスは彼の言葉を素直に受け入れる事が出来なかった。
「ちょっと、エアニス！！」
　それを咎めるチャイム。トキが申し訳なさそうに言葉を挟んだ。
「まぁ、病院という場所は僕も気が進みませんけど・・・
　先程の話が本当ならば、ここはお言葉に甘えさせてもらった方がいいと思いますよ？」
「でも、ご迷惑ではないですか？」
　レイチェルの配慮を、クラインは穏やかな笑みで受け止める。
「なに、戦争が終わってから病室とベッドは幾つでも余っているからね」
　全員の視線がエアニスに集まる。エアニスはチャイム達から非難されているような気分になり、面白く無い。
「・・・分かったよ」
「やったっ！」

◆

　夜もとっぷり更けてから、エアニス達はクラインの勤める病院へ案内された。
　あてがわれた部屋は患者の居る部屋から遠く離れた建物の端にある病室だった。
「夜の病院ですか。なかなかおもむきがあって良いじゃないですか。幽霊とか出れば最高ですね」
「幽・・・・あ、あはは！ やめてくださいよトキさん！！」
「すみません、冗談ですよ。
　・・・って、レイチェルさん、ひょっとしてそういう手の話駄目なんですか？」
「だだ、駄目じゃないですよっ。全然平気です！ 普通に視えたりもしますし！！」
「えっ。視える・・・ですか？」
「楽しそーだな、お前ら・・・」
　うんざりとした顔で、エアニスは腰掛けていたベットから立ち上がる。
「どこ行くの？」
「屋上。煙草吸ってくる」
　壁にかけたローブのポケットから煙草を取り出し、エアニスは病室を一人で出て行った。
「そうだ、あたしも先生に、一言お礼言ってくるわ。トキ、レイチェルをお願いね」
「えぇ、分かりました。
　ではレイチェルさん。暇潰しに僕の知ってる怪談を幾つか聞かせて差し上げましょう。
　ココで語るには最高のお話が幾つかあるんですよ・・・」
「だ、ダメですよトキさん！！こういう場所でそーいう話をすると集まってくるんですから！！」
「え。集まる・・・ですか？」

　レイチェルの "普通の人は知らない何か" を知っているかのような口振りが気になったが、楽しそうなトキの邪魔をしては悪いと思いチャイムもエアニスに少し遅れて病室を後にした。

◆

　エアニスは暗い病院の廊下を月明りのみで歩く。トキの言うように、ある種の雰囲気は満点だったがエアニスは何も感じる事など無く屋上へ続く階段を登る。
　屋上へ辿り着くと、そこには先客がいた。白衣と金髪の後姿。エアニスは思わず舌打ちをする。
「おや、貴方は確か・・・エアニスさんでしたね」
　クラインがエアニスに気付き、言葉をかけた。
「何してんだ、アンタ。こんな所で」
「仕事の合間の一服ですよ」
　クラインの指には煙草が挟まっていた。エアニスは鼻を鳴らし、自分の煙草を一本取り出し口に咥える。火をつけようとポケットの中のライターを探るが見当たらなかった。ローブのポケットへ忘れてきてしまったようだ。
「貸しましょうか？」
　煙草を咥えたままポケットを探り続けるエアニスに、クラインは銀のオイルライターを差し出した。キン、という冷たい音と共に火が灯る。断るのもおかしな話なので、エアニスはクラインの差し出す火へ煙草の先を近づけた。
「先程、チャイムから話を聞きました。随分お世話になっているそうで」
「・・・別に」
　エアニスは余計な事を話さずクラインの言葉に相槌だけを打つ。チャイムがクラインに、自分達の状況をどう話したのか分からなかったので、下手な事を喋れないと思ったのだ。まさか"石"の事を話しているとは思えないが、エアニスは念の為この旅の事については触れられないよう、話を逸らす事にした。
「こっちも助けられてるよ。あいつ、今は騎士団所属らしいけど、その前は腕利きの魔法医だったんだろ？
　この前、肩をハデに壊してあいつに治して貰ったよ」
　アスラム行きの船の戦いで負った、怪我の跡を叩く。骨にまで届く傷だったにも関わらず、チャイムの治療は傷跡を残す事なく完璧に施されていた。
「あの子の昔を知っているんですか。あまり自分の事を話そうとしない子と思っていましたが・・・。
　貴方はチャイムに信頼されているようですね」
　ふっ、と、煙草の煙を勢い良く吐き出すエアニス。鼻で笑ったつもりだった。
「それにしても・・・あの子がよく、この街に立ち入る気になれたものですね」
　溜息をつくようにクラインがそう言った。

「どういう事だ？」
　一瞬だけ考えてみるも、その言葉の意味が分からずにエアニスは尋ねる。
「あの子から、この街での出来事については、聞いていないのですね？」
「・・・あぁ」
　クラインはゆっくりと煙草の煙を吐き出し、エアニスから視線を外した。
「先の戦争中、チャイムが魔法医として働いていた事はご存知ですね。
　そして・・・私もなのですが、チャイムがこの町に派遣されていたという事はご存知ですか？」
「・・・いいや」
　エアニスもクラインから視線をはずし、月明りの映る海を眺める。病院が小高い丘の上に建っているという事もあり、美しい夜景が視界いっぱいに広がる。
「では戦時中、この街が市民をも巻き込む激戦地だったという事は？」
　その言葉を聞いた途端、目の前に広がる美しい夜景の見え方が変った。
「この街に来た事は無いが、その噂だけなら聞いた事があるよ。
　町外れのスラムも見た。酷いもんだな」
「あれでも戦争の爪痕の一部です。本当に酷い場所は、終戦直後に跡形も無く片付けられてしまいました」
　クラインは苦い表情を浮かべ、煙草を備え付けられた灰皿へ押し込んだ。
「それは・・・ひどいものでね。
　国境線を突破したベクタ軍が、このオーランド・シティの駐留軍に毎日のようにゲリラ戦を仕掛けてくるんです。彼等の進攻のためには、このオーランドシティは補給地としてとても重要な街だったようでね。どうしても欲しかったようです。
　もちろん街には一般市民も住んでいますから、沢山の人が巻き込まれ、沢山の人が私達の詰める病院へ運ばれて来ました。周りを砂漠に囲まれたこの街では、逃げる場所もありませんからね」
　エアニスは吸っていた煙草を灰皿に押し付け、箱からもう一本煙草を抜き取る。何も言わずにクラインは言葉を切り、火を貸してくれた。
「派遣されていたのは、この病院か？」
「いいえ。もっと町外れにあった別の病院です。今はもう焼け落ちてありませんけど、ね」
　クラインは何度目か分からない溜息をつきながら答えた。
「駐留軍がベクタの本隊に敗れ、遂にオーランド・シティがベクタに制圧された日でした。
　彼らは怪我人を収容する、我々の病院までをも標的にしたのです。
　我々は動ける病人、怪我人と共に、軍の施設へと避難しました。しかし、数が数でね、動かせない病人もいましたから・・・」
　ここに来て、流暢だったクラインの語りが鈍り始め、口をつぐんでしまった。
「・・・要は、我々は患者の一部を見捨てたのです」

　エアニスは黙ってクラインの話に耳を傾ける。
「あの子・・チャイムは、ベクタ兵がやって来るギリギリまで、患者達を避難させていました。そして、病院内で行われた殺戮を見てしまった・・・」
　無表情を装いつつも、クラインの話を聞き続ける事に耐えられなくなるエアニス。手を当てた口元で、歯の擦れる音が聞こえた。
「私があの子を無理矢理病院から連れ出したのですが・・・あの日の事は思い出したくありませんね。
　我々の患者達が次々と銃で撃ち殺されていく光景、それを見た、あの子の叫びが・・・
　焼け落ちてゆく病院を見ていた、あの子の表情が未だに忘れられませんよ」
「・・・もういい、聞きたくない」
　片手を振って、クラインの話を遮るエアニス。
「よくある話だ。
　戦争中、どこの町でも似たような事が起こってきたんだ。お前らが特別不幸じゃないんだよ」
　冷たい声で自分の思いを述べるエアニス。エアニスにとって、それは事実であり、世界を広く知る者からすれば、正しい意見だった。しかし、その言葉を吐いた時、エアニスの心は鈍く軋んだ。
「・・・そうですね。すみませんでした」
　クラインは煙草のケースをしまい、オイルライターをエアニスに渡した。
「貸しておきましょう。私はこれで失礼します」
　オイルライターを受け取り、クラインを睨むエアニス。特にクラインを憎む理由は無いが、何故か嫌悪感を強く感じるようになった。
　クラインが、これまでの話をエアニスに聞かせる理由が分らない。ただ単に口の軽い軽薄男という訳でもないだろう。
　では、何故？
　階段へ向かうクラインが歩みを止めて、思い出したかのように振り向いた。
「そうそう、一つだけ気になっていた事があるのですが・・・・」
「？」
　小首を傾げるエアニス。
「どこかで・・・お会いした事はありませんか？」
「あ？」
　突然思ってもみない問い掛けをされて、エアニスは間の抜けた声を上げた。
　クラインに会った記憶などエアニスには無い。
「さあな。俺には覚えは無いが」
「そうですか。
　私の勘違いかも知れないのですが・・・
　２年前、エベネゼルの王宮で貴方を見た記憶があるのです」
　益々眉根を寄せるエアニス。２年前、エベネゼルの、王宮 ー

「・・・・ッ！！」
　思わずエアニスは息を詰まらせ、驚きの表情でクラインを見てしまった。
　エアニスには、２年前にエベネゼルの王宮へ行った事があった。
「いや、勘違いならば、それでいいのです。気にしないで下さい」
「・・・・っ」
　エアニスはクラインから視線を逸らし、沈黙で答えた。長い前髪に隠れた額に、汗が浮かぶ。
　ここで突然、階段への扉が開き屋上へチャイムがやって来た。
「あ、先生。ここに居たんですね！」
　いつものように、悩みなど欠片も無い明るい顔で声をかけるチャイム。
「って・・エアニス？
　なんでアンタがココに居るのよ」
「・・・」
　訝しげな顔で聞くチャイムに、エアニスは言葉を返せなかった。
「どうしたんですか、チャイム？」
「あ、えっと、改めてお礼を言おうと思って、先生を探していたんですけど・・・」
「はは、今更改まる事もないでしょうに」
　軽く笑って、チャイムを階段へ導くクライン。チャイムはチラリとエアニスを見て、
「エアニスは部屋に戻らないの？？」
「・・・ああ。もう１本、煙草吸ってくよ」
「あっそ。
　煙草、本数控えた方がいいわよ。あんた、１日に２箱吸っちゃう時もあるじゃない」
「放っとけよ・・」
　妙に覇気の無いエアニスの様子が気にかかり、チャイムはクラインへ質問を投げかける。
「エアニスと、何の話をしていたんですか？？」
「ん？
　別に、当たり障りの無いただの昔話ですよ」
　そう話しながら、チャイムとクラインは階段を下りて行き、屋上にはエアニスだけが残された。

「・・・っ！！」
　指先の熱に驚くと、いつの間にか持っていた煙草は殆ど灰になり、火種がエアニスの指先に届いていた。
　灰になった吸殻を投げ捨て、３本目の煙草を取り出し、クラインから渡されたオイルライターで火を付けた。
　肺に吸い込んだ煙がやけに不味く感じ、クラインのオイルライターをギリ、と握り締めるエアニス。

「ックソッ！！」
　ガンッッ！
　エアニスは備え付けられた灰皿台を思い切り蹴り飛ばした。

第28話　揺ぎ無き思い

　エアニスが屋上から当てがわれた部屋へ戻ると、そこにいたのは堂々と銃を分解清掃しているトキのみだった。
「チャイムとレイチェルは？」
「・・・今、チャイムさんが戻ってきて、二人で隣の部屋へ行きました。・・もう休むそうです」
　トキは銃のバレルを覗き込みながら、半ば上の空で答える。
「そうか」
　エアニスは自分のベッドに腰を掛け、考え込むように口元を押さえた。
「・・・話を聞いて欲しいって顔してますよ」
　その様子を見たトキがエアニスに茶々を入れた。
「聞いてくれるか？」
「・・・まあ・・・聞くだけでしたら、ね」
　カチン、と、銃の部品を組み立てながら答える。
「あの野郎、俺の素性に気付いてるかもしれない」
　銃ばかりに視線を向けていたトキが、ようやくエアニスを見る。
「本当ですか・・・？」
「あぁ。２年前、俺がエベネゼルの宮殿に居た事を知っているような話をされたよ」
　２年前、まだ知り合う前のエアニスが何をしていたのか知る由も無いトキは、首を傾げる。
「エアニスはエベネゼルの宮殿へ行った事があるんですか？」
「あぁ。２年前に、１度だけ。
　レナが殺された直後、俺は報復としてエベネゼルの宮殿を襲い、国の高官を何人か殺している」
　絶句するトキ。
　エアニスの大切な人である"レナ"という女性が、エベネゼルの政略に巻き込まれ命を落とした事をトキは大まかに聞いていた。しかし、エアニスがその報復をしていたという話までは聞かされていなかった。
「だが俺のやった事は、ベクタの暗殺者が宮殿に侵入して行った事だと事実を捻じ曲げられて公表されているんだ。
　なのに奴は、宮殿で俺を見たような気がすると、白々しい事を言いやがった」
　恐らくクラインは知っているのだ。あの日宮殿を襲ったのはベクタの暗殺者などではなく、エアニスだという事を。直接その目で宮殿に這入り込んだエアニスを見たのか、あるいはクラインが捻じ曲げられた真実を知る事が出来るほど、エベネゼルの中枢に近い人間なのかまでは判断が出来なかったが。
　エアニスは髪を掻き上げて憂鬱そうな顔で笑う。
「・・・バラされるかな、チャイム達に」

　トキはエアニスにかける言葉を持たなかった。

◆

　真夜中
　胸が押し潰されるような感覚に襲われ、チャイムは目を覚ました。
　夢を見ていたようだが、どのような夢かは思い出せなかった。代わりに何とも言えない不快感と、涙の跡が残っていた。反射的に、かつてこの街で魔法医として働いていた時の事を思い出した。やはり、あの時の夢を見ていたのだろうか。
　突然、抑えきれない感情がこみ上げ、思わず声が漏れた。隣のベッドを見ると、レイチェルが静かな寝息を立てて眠っていた。チャイムはレイチェルを起こさないよう、そっと自室を出た。

「あ・・？」
　浅い眠りについていたエアニスが、隣の部屋で動く気配に気付き目を覚ます。エアニスは昔から眠っている時でも周りの気配を感じ取る事ができた。その為深く眠る事の出来る日が少ないのだが、その分睡眠時間を長く取っているので問題は無かった。そして今日も、周囲の気配に気を配りながら眠っていた。
　感じたのは隣の部屋から人が廊下へ出て行く気配。チャイムかレイチェルが廊下に出たのだろう。トイレか、とも思ったが、気配が進んでいった方向は、トイレとは逆の方向だった。時刻は真夜中。少し不安を感じたエアニスは、その気配を追う事にした。

◆

「おいおい、こんな時間に何やってんだよ・・・」
　気配の後を辿り、エアニスは暗い廊下を小走りで進む。気配は階段を上り、屋上へ向っているようだった。
　ガゴン。
　屋上へ続く鉄扉を開けると、昼間の暑さが嘘のように冷たい風が吹き抜けた。屋上の広場には、入り口に背を向けるチャイムの姿があった。エアニスは舌打ちをして、チャイムに声を掛けた。
「おい、チャイム。何してんだこんな夜中に」
　ビクリと肩を震わせて振り向いたチャイムは、口元を手で覆いながら、泣いていた。
「え、エアニス・・・！？」
　驚くチャイムに、ぎょっと目を剥くエアニス。振り向いたチャイムは、再び顔を背けてしまう。
「なっ、何の用よ。こんな、時間にっ」
　平静を装っているつもりかもしれないが、その声は震え、うわずっていた。

「へ、部屋からお前が出て行った気配を感じたから・・・。何事かと思ってよ」
「あたしが夜、どこに出歩こうが勝手じゃないの・・・」
「あぁ。そりゃそうだが・・・」
　困ったようにエアラスは頭をかく。こんな時、どんな言葉を掛ければいいのか分らない。
「・・・放っておいた方がいいか？」
　チャイムは鼻をすすり、溜息混じりに答える。
「気が利かないわね・・・あんた、泣いてる女の子放っておいて寝ちゃうつもり？」
　頬を濡らしたまま、いつもの意地の悪い笑みを浮かべる。
「少し、付き合いなさいよ」
　その表情を見て、エアニスは少しだけ安心し、肩を竦めた。
「はいはい。仰せのままに・・・」
　エアニスはチャイムの隣で、屋上を囲う柵に背を預けた。

　キーン、と通る音と共に、エアニスはオイルライターに火を灯す。
「あんた、そんなシャレたライター持ってたっけ？」
「お前の先生に借りたんだ。いつもの使い捨てライターはどっか行った」
　ぐずり、と鼻をすすって問うチャイムに、エアニスはクラインから借りた銀のオイルライターをもてあそびながら答える。そして、少しだけ話すべきか迷った後、口を開いた。
「奴から、お前がこの街に派遣されてた時の話を聞いたよ」
「！」
　僅かに動揺の色を見せるも、諦めたような顔で目を伏せるチャイム。
「もう・・・」
「・・・悪い」
「って、なんでアンタが謝るのよ」
　暫し、二人の間で会話が途絶えた。

　沈黙に耐えかね、エアニスが口を開く。
「この街に寄るのは、しんどかったか？」
「べつに、そんな大袈裟な事じゃないわよ。
　でも、どうしても、思い出しちゃうのよね・・・。この街で、起きた事を」
　目を閉じると、あの日の光景が鮮明によみがえる。沈み、潰れそうな気持ちを誤魔化すように、空を仰いで背伸びをするチャイム。
「この街での出来事が、魔法医を辞める切っ掛けだったのかもね。あれほど自分が無力だと感じた事は・・・無いわ」
　エアニスはふと、ヴェネツィアの港でチャイムが言った言葉を思い出す。
「魔法医は傷ついた人しか助けられないが、騎士は傷ついていく人を守ることができる。
　だから、今は騎士として、人助けをしながら旅をしてる・・・だったか？」

　チャイムは目を丸くして驚く。
「そうそう、ソレ。良く覚えてるわねー・・・」
「あぁ、お前にしては名言だったからな」
　えへへ、と、頭を掻いて照れ笑いを見せるチャイム。
「あの日以来、無性に"力"が欲しくなったわ。魔法医なんて、力の前では何も出来ない、無力な存在って、思い知らされたからね。だから、魔法医を辞めて、騎士団に入ったの。傷ついた人を助けるんじゃなくて、人が傷つく前に助ける事が出来るようにね。
　・・・それまで魔導を教えてくれていた先生には悪い事をしたなって思ったけど・・・。今日、久し振りに会えて、良かったわ。先生、私の択んだ道を認めてくれていたから・・・」
　エアニスはチャイムの話を聞きながら小さく頷く。チャイムが何故、人を助ける道ではなく、人を守る道を択んだのか、ようやく理解することができた。
「でも、あたしは一体何がしたいのかな・・・
　人の力になりたくて魔法医になって、今度は目の前のものを守れるだけの力が欲しくて騎士になって。
　多分、私は人の為に何かしてないと、自分の存在意義っていうのが見出せないのかも知れないわね・・・。
　とは言っても、最近じゃ何をしても自分の無力さを思い知るばっかだし・・・」
「そうか？ お前に助けられた奴は、きっとお前が思っている以上に救われていると思うぞ。
　俺を含めて、な」
　そう言ってチャイムに治してもらった左肩を叩いた。
「そんなんじゃ駄目よ。あたしが納得できる形じゃなきゃ意味無い。
　そんな感謝のされ方じゃ、私が同情されてるみたいじゃないの！」
　こぶしを突き上げ、力いっぱい自分の思いを主張するチャイム。しかし、すぐにため息と共に振り上げた腕を下ろした。
　エアニスは苦笑いを浮かべ、一つ、咳払いをしてから自分の考えを話し始めた。
「お前が選んだ道は、きっと一人じゃ誰も成し遂げる事の出来ない事だ。俺だって、目の前のものぐらいは守れると思っていたが、結局、自惚れだった」
　手が届きながらも失ってしまった、大切な人を想うエアニス。
「この旅の出発前にも言っただろ。一人で抱え込むなってな。
　俺達全員でなら、お前の納得する形でレイチェルのやらなきゃならない事を手伝えるんじゃないのか？」
　チャイムもそれは理解していた。人一人の力では、どうにもならない事はいくらでもあるのだと、他でもない自分自身が知っているから。
　だが、旅を始めてからずっと一人だったチャイムは、それまでとは違う今自分を取り巻く環境に気付く。
（そっか・・・今は、一人じゃないんだ・・・）
　ずっと一人だったので、一人で成し遂げなくてはいけないと思い込んでいた。しかし、今は

違う。
　そう思うと、胸のわだかまりがすぅっと、消えてゆくのを感じた。
「うん。絶対、レイチェルをバイアルスまで連れて行ってあげようね」
「あぁ」
　まだ涙の跡が残る顔を、満面の笑みで飾るチャイム。エアニスもそれに応えるように、力強く笑って見せた。

「ごめんね。愚痴ばっかで。なんか楽になったわ」
「別に」
「あーあ、何だかエアニスには、要らない事をいっぱい喋っちゃってる気がするなー・・・」
　チャイムのこの言葉で、エアニスは夕方の事を思い出した。
「それじゃ、俺も一つ、まだ話していない事を教えてやるよ。夕方話しそびれたが、俺の、魔力の話だ」
　あっ、と、チャイムが声を漏らした。ふざけていた二人の顔から、笑みが消える。昼間、チャイムが大怪我をした子供の傷を治療するため、エアニスから魔力を分けてもらった時の事。エアニスから感じられる魔力のキャパシティは、人間のそれでは無かった。

「まぁ、見当ついてるだろうが・・・その、俺はハーフエルフだ」
　人より優れた知能と魔力、そして長い寿命を持つ、人間と殆ど同じ容姿の種族、エルフ。大昔、エルフはその高い能力から人間かにとって畏怖の対象とされていた。しかし、250年前にあったとされる魔族との戦争により、大幅にその数を減らした彼らは、今や人間社会にとって畏怖の対象では無かった。
　人より長い年月を生きるエルフは、どうしても人間と共存する事が難しく、人の街に、エルフ族が住む事は稀だ。現在では人間とエルフは互いに干渉する事無く理想とも呼べる形でこの世界を住み分けている。
「別に隠してるワケじゃなかったけど、どうでもいい事だし改まって言う事でもないし、言う機

会も無かったからさ」
「へー・・・やっぱり」
「・・・期待してた訳じゃないが薄いリアクションだな？」
　心なしか寂しい顔を見せるエアニス。
「うーん。あ、でも納得できるトコはいっぱいあるかな。魔力もそうだし、肌の色だってあたしより白いし、こんな陽射しの強い街に居るのに全然日に焼けないし。エルフは食べても太らないって話だし、やっぱエルフって美形ばっかなワケ？」
「び・・・いや、ソレはお前ら人間が勝手に持ってる固定概念だぞ。
　エルフにだって太ってる奴もいるし、まぁ、正直な話不細工な奴だっている」
「へー・・・そうなんだ」
「・・・あぁ。・・・・感想は、そんなもんか」
「うーん。うん。そう、かな」
「あ、そう・・・」
　互いに気の抜けた声で頷くと、エアニスが肩を震わせて笑い始めた。
「なっ、何よ、気味悪いわね！！？」
「ははっっ、悪ぃ。何だろう、ちょっと安心してな」
「安心？」
「情けない話だが、エルフだって言う事で、お前達に今までと違う目で見られないだろうかって、少し心配してたんだ。
　でも、そんな事気にするタイプじゃなかったな、お前は」
「へー。アンタでも、人にどう思われてるかなんて気にするんだ。意外ね」
「どうしても寿命の違いから、俺たちを遠い存在として見る人間は少なくないからな」
　エアニスのその言葉に、チャイムは少し怒ったような表情を見せる。
「そんな些細な事しにしないわよ。小さく見られたものね」
「お前の場合大雑把というか雑なだけなんじゃ・・・」
「何 か 言 っ た？」
「いや、別に」
　エアニスは笑いながらそっぽを向いた。
「寿命なんてどうでもいい事よ。今日明日とかに死なれちゃ困るけどさ。
　別にアンタなんかと一生付き合っていくワケじゃないんだし？」
「・・・何だ、寂しい事を言うな？」
「あら何？ あたしとずっと友達で居たいの？」
　小悪魔めいた笑みを浮かべながらチャイムはエアニスの顔を覗きこむ。エアニスは少しだけ寂しそうに笑うと、
「この旅が終わったらそれっきり、なんてのはご免かな」
「・・・・・・」
　ぽかんと口を開くチャイム。

　そんなエアニスの言葉と表情に、二の句を継げなくなってしまった。
「なんか、ズルイわ・・・そーやって急に素直になるのって・・・」
「何だって？」
「何でもないっ！！」
　そこまで話すと、二人で声を出して笑った。エアニスが、心のどこかでずっと心配していた事は、随分と馬鹿けた事だったらしい。そう思うと、何故だか笑いがこみ上げてくる。
「さて、と。まだ夜明けまでだいぶあるし。もう寝ておかないと明日辛いぞ」
「ん。そーね」
　どこかさっぱりした顔の二人は、階段へ向けて歩き出す。エアニスは吸っていた煙草を捨てようと、備え付けの灰皿に吸殻を押し込む。そこで、数時間前に自分で蹴り付けた灰皿の傷を見た瞬間、エアニスは反射的にチャイムにへ振り向いた。
「チャイム！」
「な、何よ！？」
　思わず大きな声でチャイムを呼び止めるエアニス。しかし、その後に何を話せば良いのか、分からなくなってしまった。
　クラインが自分の過去を知っているかも知れない事。それは、チャイムとレイチェルに隠しているエアニスの過去。自分がハーフエルフという事などより重要で、でも、できれば話したく無い過去の話。
　とはいえ、いつまでも隠し通すのはエアニスにとっても辛く、恐らく"石"に関わりながら旅を続ける以上、いずれ話さなくてはいけない時が来るだろう。
　チャイムがあの男の、クラインの口からエアニスの過去を聞く事になるかもしれない可能性が出てきた今、いっそここで自ら打ち明けてしまおうか。
　自分がハーフエルフだという事を軽く受け入れてくれたように、彼女は自分の過去も受け入れてはくれるのではないだろうか。
　そんな甘い考えが、頭をよぎる。

「エアニス？」
　話を切り出そうとしないエアニスに、チャイムは訝しげな声をかける。
「もう１つ、話していない事がある」
「何よ・・・あらたまっちゃって」
　乾いた笑みを浮かべて、エアニスに向き直るチャイム。
「俺の昔の話だが　　」

「はーっくしょん！！」
『！！？』
　エアニス達が突然上がったくしゃみの声に振り向くと、屋上の入り口の扉から、顔を半分覗かせたレイチェルが見えた。

「あっ・・・」
　エアニス達と視線が合ってしまったレイチェルは、慌ててドアの影に隠れた。暫くすると、おずおずと顔を覗かせる。
「あの・・・その・・・えと・・・・・ごめんなさい・・・・」
　泣きそうな顔で謝るレイチェルの後ろから、今度はトキがヒョコリと顔を覗かせる。
「いゃあ、お邪魔しました。僕達に構わず、どうぞ続けてください」
　鼻をすすりながら笑っているトキ。先のくしゃみはトキがしたものだった。無表情のまま、ぴくりと頬を引きつらすエアニス。
　エアニスは備え付けの灰皿台を持ち上げると、トキの脳天めがけて叩き落した。

◆

「レイチェルさんが、チャイムさんが居ないと僕達の部屋に伝えに来ましてね。まぁ、僕はこんな事だろうと心配していませんでしたが、レイチェルさんが気にされていたようなので、一応こうやって探しに来たんですよ」
　屋上へ引きずり出されたトキとレイチェルから、何の真似をしているのかと聞きだすエアニスとチャイム。
「で、見つけた俺達をそのまま覗き見してたワケか。どうせトキが扇動したんだろうが・・・
　レイチェルもこんな覗きのようなマネしてると、トキのエロメガネが染るぞ」
「言い得て妙ですね」
「黙ってろ」
　トキを睨みつけるエアニス。しかし、トキの言葉は止まらなかった。
「いや、悪いのは本当に僕ですから。
　眠る前に僕がレイチェルさんにあんな怪談をしなければ、レイチェルさんも僕を呼びに来なかったのでしょうしね」
「ち、違いますよ！！ 本当にチャイムが心配になってトキさんを呼びに行ったんですっ！！
　部屋で一人で居るのが怖くなったからトキさんの所へ行った訳じゃありません！！」
「あれれ。僕そこまで言ってませんよ？ やっぱ一人で眠るのが怖かったんですね」
「ト、トキさんっ！！」
　ごんっ
　エアニスに頭を殴りつけられる事で、トキはようやく口をつぐんだ。
「ごめんね、チャイム・・・」
　肩を落としてレイチェルは謝った。
「だーかーらーっ！！
　別に聞かれちゃマズイ話してた訳じゃないって！」
「赤くなりながら言うなっ」
　何故か慌てて弁解するチャイムに、エアニスは突っ込みを入れる。

　チャイムはふと思い出したかのようにエアニスを見上げた。
「あ。そいえばアンタ、さっき何か言いかけてなかったっけ」
　彼女はトキのクシャミの直前に、エアニスがあらたまって何かを話そうとしていた事を思い出す。
「・・・そうだったか？」
「んー・・・まぁ、いいけどさ」
　とぼけるエアニスに合わせ、チャイムも話を受け流した。聞かれても困る話をしていたつもりはないが、いざ全員が集まっている前で、二人で話していた事を掘り返すのは、何故か照れくさく感じた。
「ほら、もう寝ないと。明日は船借りて珊瑚礁見に行くんだろ？　とっとと寝ろ」
　エアニスはチャイムとレイチェルの背中を押して、部屋へ戻るように促す。そして、彼女達に見えない所でトキの横腹を抉るように小突いた。
「なんで邪魔をした？」
　小声でトキを責める。彼は困ったように頬を掻き、
「だって、あのままお二人を僕達が覗き見ていたら、後々エアニスは怒ってたんじゃないですか？
　あの後、チャイムさんに自分の昔話を聞かせるつもりだったったんでしょう？」
　図星を突かれ暫し口ごもると、エアニスは溜息をついて頭を掻く。トキの気遣いは間違ってはいなかった。
「まあ、邪魔してしまった事には変わりないですからね。それについては、すみませんでした」
「いいや、いい。やっぱり、まだ話すべきじゃないかもしれないしな。
　出来れば、話したくないし・・・」
　らしくもない、弱気な口調のエアニスを見て、顔を曇らせるトキ。トキは、エアニスの意見は誤りだと思った。エアニスがチャイム達に隠している事は、できれば二人に打ち明け、その事実を受け入れてもらうべき事だと思った。しかし、トキもエアニスと似たような過去をチャイム達に隠しているので、エアニスに意見できる立場ではなかったため、黙っていた。
　少なくとも、まだ話すのには早いような気がした。
「ね、ねぇ、チャイム！！廊下の明りってどこ？真っ暗なんだけどっ！！」
「ちょっとー、何してんのー。早く部屋戻ろうよ！」
「馬鹿野郎！ 夜中だぞ、明り点けるな！！ 大声出すな！！」
　階段の下から響くチャイム達の呼びかけに、エアニスも大声で応える。
　そんな３人のやり取りを見て、トキは額に手をあてて顔をしかめた。
　今回ばかりはトキは自分の軽率な行動を恥じていた。自分の過去を打ち明けようとしたエアニスは、それなりの覚悟をしていただろう。それをトキは、自分の都合で邪魔をしてしまったのだ。
　しかし、あのまま身を隠してレイチェルにまでエアニスの話を聞かせる訳にもいかなかった。それはエアニスにとっても不本意だっただろう。そんな事を言って自分の行いを正当化する気は

なく、とにかく、今回はトキがレイチェルを連れて覗きのような真似をしなければ良かったのだ。
「・・・でも、あそこでいきなりあの話を始めるエアニスにだって責任ありますよねぇ・・・流石に話の流れが読めませんよ」
　全てにおいて自分が悪い事を自覚しつつも、一人でささやかな悪態をついてみるトキ。
　今日、エアニスが自分の過去を打ち明けるきっかけを逃した事で、今後チャイム達に誤解を与えたりする事にならないだろうかと心配するトキだった。

第29話　トラブル＝チャンプ

「と・・・言う事で、俺の魔力がケタ外れなのはエルフの血が混じってるからなんだ」
　どうでもいい事のように、自分の素性を淡々と語るエアニス。
　場所はコバルトブルーの海の上。朝からエアニス達は珊瑚礁を見るため船外機の付いたボートを借り、沖へ向っていた。その間の暇潰しとして、エアニスは舵取りをしながらレイチェルにも自分の素性をあらためて説明していた。
「あ、はい。昨日屋上でトキさんと聞いていました」
「・・・そうだったな」
　レイチェルにまでどうでもいいようなリアクションをされるエアニス。自分はハーフエルフだと明かした事で変にぎこちない態度を取られるのも嫌だが、逆にこうも興味なさげな反応をされると自分に関心が無いんじゃないのかと少し寂しい気持ちになるエアニスだった。
　レイチェルの後ろに座るチャイムが、妙に嬉しそうに笑いかけてきた。エアニスには、チャイムが"よかったじゃん。"と、言っているような気がした。喜んで良いものかどうか、エアニスは曖昧な笑みでチャイムに答えた。
「トキは、知ってたんだよね。」
「それは・・・エアニスと一年以上も同棲しているんですからね。知らない事なんてありませんよ」
「ほぅ・・・詳しく話を聞きたいわね・・・」
　意味ありげに笑ったトキに、何故かチャイムが反応した。
「トキ。貴様本当に海に沈めるぞ」
　そういう冗談は嫌いなのか、エアニスはトキの襟首を掴んで吊るし上げ、その身を海の上に突き出した。
「あの、あの、ちょっと気になったんですけどっ！」
　たった一言の冗談でいきなり目が据わってしまったエアニスを、レイチェルは話題を変える事で必死に止めようとする。
「エアニスさん、いつか自分の年齢を２１歳と言ってましたよね？
　それって、人間年齢ですか、それとも、エルフとしての年齢ですか？」
　レイチェルの疑問に、チャイムが"あっ"、と、声を上げ、青ざめた顔をエアニスに向ける。
「ひっょとして、エアニス・・・さんって、人間で言うと百ン歳っていう年齢・・・とかですか？」
「なんで敬語なの？
　違うよ、人間年齢で２１歳。２１年生きてるって意味だ」
　エアニスの言葉に安堵のため息をつくチャイムとレイチェル。
「あーよかったー・・・。そんな年上だったらどうしようかと思ったわよ、タメ口叩いちゃってるしさー」
「待てよ。俺はどのみち、お前より２つ年上じゃねーか」

「大して変んないじゃない。そんな事で先輩ヅラする気アンタ？」
「・・・てめー」
　顔を引き攣らせるエアニスを差し置いて、チャイムは次の話題へ移る。
「でも、てっきりエルフって寿命が長い分成長も遅いものだと思ってたわ。エアニスは年相応ってカンジだけど・・・」
　コロコロと変わるチャイムの話題について行けず、こめかみを押さえるエアニス。とりあえず、素直にチャイムの疑問に答える事にした。
「種族にもよるがな。俺達は成人するまで人と同じペースで成長する。体力と知力の最盛期に差し掛かると成長が止まり、生涯の大半をその姿で生きる事が出来る。そして寿命が近くなると、また人間と同じペースで老いていくんだ。老化が始まりくたばるまでは、まぁ３０年ってトコかな。」
「へーっ・・・それは羨ましい体ねー。
　でもま、今回の旅には関係無い話なんじゃない」
「・・・そうだね」
　長々と話した割には"関係ない"の一言で片付けられてしまった。割と意を決しての告白だったのだが肩透かしを食らった気分だ。
　エアニスは虚しさを噛み締めながら船を走らせた。

◆

「で、どこよ珊瑚礁って？」
　４人が船の周りを見回しても、日の光を照り返す海面以外は何も見えなかった。ふと振り返ると陸も随分と遠くに見えるようになっていた。
「ちょっと沖に出過ぎじゃないですか？」
「方角は合ってる筈だがな」
　腕を組んで唸るエアニス。チャイムが船から身を乗り出し、海面を覗き込んだ。
「まぁ、珊瑚礁は海の底にあるんだから。船の上から探しても見つかんないでしょ」
　しかし、海水の透明度は高いにも関わらず、海の底には何も見えなかった。難しい顔をするチャイムの頭に、後ろから水中眼鏡が引っ掛けられた。振り返ると、そこには無愛想なエアニスの顔。
「よし、オマエ、潜って珊瑚礁があるか見て来い」
「なんであたしが！？」
「お前、水着着てるじゃないか」
　チャイムとレイチェルは水着の上にシャツを着ただけの姿で船に乗っていた。エアニスとトキは普段着である。
「むぅ。仕方ないわね。
　でも、ココけっこう深そうよ。息続くかな？」

　不安げなチャイムの肩をレイチェルがつついた。
「私、水中で息ができる術使えるわよ。魔導使おうか？」
「ホント？　っていうか、そんな魔導あるんだ・・・。
　じゃ、お願いしようかな」
　その返事を聞くと、レイチェルは小声で呪文を唱えだし片手で印を切ってその指先を唇に当て、
　いきなり、チャイムにキスをした。

「～～～～！！」
突然のレイチェルの行動に、チャイムは顔を真っ赤にして背中から後ろに引っくり返った。エアニスとトキも二人に視線がクギ付けになる。
　チャイムは引っくり返ったまま　はぁはぁと息を荒げると、
「なにすんのー！！あんたはーーーっ！！！」
　チャイムが飛び上がり、ボートの先端まで一気にあとずさった。レイチェルはいつもと何も変らない様子で、
「これで１０分くらいの間は水中でも息ができるわ。普通に息をしても、水が口に入る事は無いから大丈夫よ」
　全身を固まらせたまま、エアニスが聞きにくそうにレイチェルに問う。
「レイチェル。何で今・・・その、チャイムに・・・き、キス、した？」
「水中呼吸の魔導、術者の息が魔導の媒体になるので、他人に術をかける時はこうするんです」
「・・・へー。そうか、それは・・・アレだな」
「アレ・・・ですか？」
　こくん、と、小首をかしげるレイチェル。エアニスの動揺の原因が何か理解していない様子だ。当人にはまったく恥ずかしいといった気が無いようだ。
「いや・・・何でもない。気にするな」
「よくない！！ 今！！ ここで！！ レイチェルに色々と教えてあげる必要があるッ！！」
「そうですね。ご協力しましょう」
「何を教える気だお前ら！！」
　俗世から隔離された山奥の村で育ったレイチェルは、女性としてのモラル、マナー、羞恥心というものが激しく世間ズレしていた。その事はエアニスもトキもチャイムも、何となく気付いてはいたが、まさかここまで常識を逸脱しているとは思っていなかった。
　３人は、レイチェルに一般的な教養を一から教え込むべきかと真剣に考えてしまう。
　こほん、と、チャイムが咳払いをし、レイチェルに背を向ける。
「えっと・・・それじゃ、ちょっと海の中見てくるわ・・・」
　せっかくかけてもらった術がこんな無駄話(?)をしている間に切れてしまうのも勿体無い。チャイムはとりあえず海底の様子を調べるという当初の任を果たす事にした。
「気をつけてね、チャイム。」

「・・・・。」
　チャイムは赤くなった顔を３人に見られないようにして海へ飛び込んだ。
　暫くして、トキが呆然とした様子で口を開いた。
「僕、女性同士のキスって始めて見ました」
「・・・俺も。恐るべし・・・天然」
　エアニスとトキは小声で言葉を交わし、レイチェルから少しだけ距離をとった。

　気を取り直し、チャイムは波を蹴りどんどん深く潜っていく。思いのほか、すぐに海の底へ到達する事ができ、チャイムは海底の周りを見回した。しかし、この 周辺は海草すらろくに生えておらず、ごつごつとした岩が転がる殺風景な景色が広がっているのみだった。念の為にボートから少し離れた場所の様子も確認した が、珊瑚礁などどこにも無かった。
「・・・？」
　チャイムがエアニスに文句の一つでも言ってやろうとボートに戻ろうとした時、すこし離れた岩場で奇妙な物を見つけた。気になって、それの間近まで近づいてみたが、"それ"のあまりの不自然さに、益々首をひねる事になった。

　ざばっと、チャイムが海面から顔を出した。
「お、遅かったな。溺れたかと思ったぞ。どうだ、下の様子は？」
「珊瑚礁なんて無かったわよ。
　そんな事よりさ、面白いモノ見つけたわ。」
　エアニスの茶々は無視し、チャイムは自分の見た事を伝える。
「面白いモノ？」
「うん、海底の岩に、大きなケースが沈んでたの。そんなに古い物じゃなかったわ」
「ただのゴミじゃないのか？」
「ただのゴミが、鎖で岩場に繋ぎとめられてると思う？　しかも海の底で」
　チャイムの言葉に、エアニスとトキ、レイチェルは顔を見合わせた。
　チャイムが見たのは、金属で出来た鞄のようなケースだった。そのケースの握り手に、太い鎖

が巻きつけられており、その先は岩に打ち付けられたアンカーへと繋がっていた。
「そいつは・・・ちょっと気になるな。」
　エアニスが食いついてきた。
「気にはなりますけど、怪しさ大爆発ですね。あまり関わらない方が良い気もしますが」
　それに対して、あからさまに乗り気のしない意見を述べるトキ。レイチェルは何も言わなかったが、瞳が財宝を見つけた子供のように輝いている所をみると乗り気ではあるようだ。
「それで、鎖を何とかして外したいんだけど・・・エアニス、剣で斬れる？」
「流石に水中で鉄を斬るのは無理だが・・・まぁ、何とかしてみるよ。
　どこに沈んでる？ 息続きそうか？」
「あたしはレイチェルの魔導で平気だったけど、けっこう深いから少し苦しいかもしんない」
「そうか・・・」
　エアニスは考えるようにして黙り込んだあと、レイチェルと視線を合わせる。
「だ、駄目に決まってるでしょーがっ！！！」
　まだ何も言っていないのに、エアニスはチャイムによって海へ引きずり落とされてしまった。

　そのままエアニスはチャイムの後について海を潜ってゆき、海底に沈むケースの元へ辿り着いた。チャイムが話した通り、ケースの握り手と岩に打ち付けられたアンカーが太い鎖で繋がれていた。それを見たエアニスは、迷わず比較的脆そうなケースの握り手に剣の刀身を押し当て、刃を一気に引き抜いた。
　ぎゅがっ
　チャイムの耳へ海水越しに金属の擦れるような音が届くとケースは繋がれた鎖から離れ、海底の岩場に転がった。エアニスはそれを両手で抱えると、チャイムに目で合図をする。ボートに戻るぞ、という意味だ。

　ざぶん
「ぶはぁっ！！ぜーっ、ぜーっ、」
　海面に顔を出したエアニスは激しく息を切らす。魔導を使わず５分近くも潜っていたのだ。
「アンタ、よく息続いたわねー・・・」
「お、お前等とは出来が違うんだよ。おい、トキ、引き上げるの、手伝ってくれ、コレけっこー重い・・・」
「はいはい。うわっ、よくこんな重い物持って浮かんでこれましたねー・・・」
トキとレイチェルが、エアニスが必死に持ち上げるケースを、ボートの上に引き上げた。

「で、何が入ってるのかな？？」
　一息ついた４人は、早速海底に沈められた宝箱を開けようとするが
「おや、鍵がかかってるみたいですね」
「どけ」

　エアニスが鍵穴に向け無造作に剣を振った。しゃこん、と軽い音を立て、ケースの蓋がバネ仕掛けのように開く。そのケースの中に納まっていたものは・・・
「・・・何これ？　何の機械？？」
　箱の中には、沢山のボタンやコードがはみ出した、何に使うのか分からない機械が納まっていた。内側には海水は一滴も付いていなかった。
「これは・・・驚きました・・・。ベクタ製の "イヴォーク" ですね」
　身を乗り出してきたトキが、その機械を見て眼鏡のツルを持ち上げた。聞きなれない名前と、ベクタという国名に、チャイムは不吉な予感を感じた。
「な、なにそれ？」
「ベクタが大戦の後期に製造した核爆弾です。
　名前くらいは聞いた事があるでしょう？　死の灰をばら撒く、プルトニュウムやウランを使ったアレです。」
「・・・私にはアンタが何を言っているのか分からない」
「簡単に言えば、超強力な爆弾です。
　首都レベルの街を一瞬で消し飛ばし、その後100年は人の住めない死の大地にするそうですよ」
　何故か笑って答えるトキ。その他３人の表情が一気に引いた。
「チャイム。そいつを海に捨てろ。」
「よっしゃあああ！！」
「ち、ちょっと待って下さい！！
　何でこんな物がここにあるのか調べておく必要はありませんか！？」
　トキは、エアニスの命令を即座に遂行しようとしたチャイムを止める。
「ない。もう俺はこれ以上厄介事に関わる気はない」
　両耳を塞いでエアニスとチャイムは必死で首を振った。
「しかし、これの回収には800万の懸賞金が懸かってるんですよ？」
「800万！！」
　チャイムの目の色が変わる。
「この爆弾は、ベクタが大戦の後期に製造した物です。
　製造されたのは、大型爆弾が８機、持ち運べるサイズの爆弾が２４機で、大型爆弾は全て、小型のものは２４機中、２０機は回収され、廃棄されていると公表されています。」
「２４機中の、残り４機はどうなったんですか？」
「うち１機は大戦中にハルモニアで使用され、残りの３機は、現在行方不明だそうです。」
「・・・・」
　４人の視線がケースに収められた爆弾に集まる。
「いやいや、金はあり余ってるから、やっぱり海に捨てよう。珊瑚礁見に行くんだろ。忘れようぜこんなくだらね一事」
「エアニス・・・現実逃避ならまだしも、ただ単に面倒くさがってるだけですね？」
「ああ面倒くさい。面倒くさいね。」

　そう答えると、エアニスはケースを持ち上げて海に投げ捨てようとする。３人が慌ててエアニスを取り押さえようとすると。

　ボゥウウウウ・・・ン
　背後から近づいてくるエンジン音。レイチェルが振り向くと、遠くに小さな船影が見えた。
「ボート・・こっちに来ますよ・・・？」
「なんか・・・激烈に嫌な予感がしてきたんだけど」
「海兵隊の船ではなさそうですね。エアニス、見えますか？」
　エアニスは額に手をかざし、目を細める。
「漁船・・・に見えるな。チンピラみたいな奴が２、３人こっち指差して何か言ってる」
「アンタ、よく見えるわねー・・・」
　チャイムには人影さえ見えない。エアニスは異常に目が良いようだ。これもハーフエルフの身体的長所だろうか。
「どうしますか？」
「逃げよう。関わることは無い」
「爆弾は捨てないんですか？」
「捨てない」
「それでこそエアニスです」
　エアニスは船外機のスターターロープを引き抜き、エンジンに火を入れた。

　エアニス達が近づいてくる船の進路を避けるように移動を始めると、相手の船はエアニス達のボートを追いかけるように進路を変更した。
「やっぱり、僕達に用があるみたいですね」
　ボートにしがみつきながらトキはぼやく。エアニス達のボートはエンジンを全開にして海を走っていた。小さいボートなので、いつ転覆してもおかしくないような揺れ方をしていた。まるで飛び魚のように船は水面を跳ねながら走る。それでも真っ直ぐ走っていられるのは、エアニスの操船技術のお陰か。
「どうする？ こんな小さなエンジンじゃ、すぐに追いつかれるぞ」
「・・・撃沈しないの？」
　チャイムが不思議そうに聞いた。
「・・・相手が敵がどうか分からないのに撃沈したらマズイですよ。
　チャイムさん、発言がエアニス寄りになってきましたね。悪い兆候です。」
「俺寄りが悪い兆候ってどういう意味だトキ！！」
「そうよ、今の発言取り消しなさいよ！！　あたしに対して失礼だわ！！」
「え、えぇーーー・・・」
　揺れる船上でトキはエアニスとチャイムに胸ぐらを掴まれる。
「エアニスさん！」

　レイチェルが緊迫した声を上げる。すると同時にエアニス達のボートの周りで細い水柱が幾つも跳ね上がった。
「撃って来やがった！　あいつら、銃持ってんのかよ！？」
「ですがこれで敵確定ですね。沈めましょう」
　相手の船から放たれる銃弾は、殆どが明後日の方向へ飛んでいた。揺れる船の上で狙いを定めても当たる筈も無く、狙撃手の人数も少ないようで弾幕も薄い。しかし、安心していられる状況ではない。みるみるうちに相手の船との距離は縮んできている。
「沈めるって言っても、俺は剣しか持ってないぞ！」
「僕はハンドガンと手投げ弾１つだけですね。流石にもっと近づかないと当たる気がしませんが・・・」
　エアニスとトキの視線が、レイチェルに集まった。
「・・・私、ですか？」
「この状況でアレを沈めるにはレイチェルの魔導が一番確実そうだ。一発お見舞いしてやれ」
「し、沈めるって・・・。別に沈めなくても、相手を振り切れればいいですよね？
　魔導であの船の動きを止めます」
　レイチェルはボートから身を乗り出し海水に手を当てる。いつものように小声で呪文を唱え、海面に当てていた手を振り抜く。
　途端に辺りの気温が急激に下がり海面から雪のようなものが舞い散った。
　バギバギバキギシシイィィィッ・・・
　レイチェルの振った手の方角へ向けて、海面が一気に凍りつき、エアニス達と相手のボートの間に横たわるような長細い氷の島を作り出した。
　突然海面に現れた障害物を避けるため、エアニス達を追ってきた船は慌てて氷の島を避けようとする。が、間に合わない。
　ドゴン！！
　景気の良い音を立て、ボートは氷の島に乗り上げた。
「あっ。」
　レイチェルが間の抜けた声を上げる。
　相手のボートは氷の島に乗り上げ、ジャンプ台を飛ぶように船体が海面から飛び出した。そして空中で船体が斜めに傾き、そのまま再び海面に激突し、転覆、見事に沈没した。投げ出された船員はすぐに海面に浮かび上がり、エアニス達に向けて怒号を飛ばしていた。何を言っているのかまでは分らない。

「・・・・」
　あーあ、と言った表情で沈み行く船を見届けるエアニス達。レイチェル自信は"やっちゃった"、という顔をしていた。
「やるじゃないか・・・レイチェル」
「・・・それほどでも」

　レイチェルは、氷の島を相手の船にぶつけて動きを止めるつもりだけで、ここまで派手に船をひっくり返してやるつもりは無かった。
　エアニスによる同情の色を帯びた賞賛に、レイチェルは何も弁解せず謙遜してみせた。

第30話　逃れられぬ罪業

　エアニス達の乗ったボートが船着場に戻った時には、もう日が暮れ始めていた。
　何事も無かったかのようにボートの返却手続きを終え、その後市場で今晩の夕食と、旅で必要となる消耗品等を買い込み、４人は他愛の無い雑談を交わしながら帰路に就いていた。
「やー、いい買い物したわ。この魚、エベネゼルで買ったら３倍の値段はするわよ」
「あそこは内陸地ですからねぇ。エベネゼルで魚介類を口にする機会は少ないのですか？」
「少ないわねー。食べる機会があっても、鮮度が落ちててあまり美味しくないのよね。レイチェルは？？」
「エルカカには大きな川と湖があったから、そんなに珍しくないかな。海の魚は珍しいけど。
　それにしてもチャイム、こんなに食材買ってどうするの？」
　４人の両手には沢山の買い物袋が抱えられていた。その半分近くは肉や魚などの食材である。
「どうするって、料理するに決まってるじゃない。エアニス達の部屋にはミニキッチンがあったわよね。
　アンタたち、あたしの料理の腕見せたげるから覚悟なさい。あ、レイチェルは手伝ってね」
　ここで、一人黙り込んでいたエアニスがため息をついた。
「・・・信じられるか？
　こんな平和な会話をしてるのに、俺の鞄にはこの街を吹き飛ばせるような爆弾が収まってるんだぞ・・・」
『・・・・』
　現実逃避していた３人が、エアニスのつぶやきで現実に引き戻された。
「あり得ねーよ、なんで偶然海の底から核爆弾拾って来れるんだよ。
　チャイム。いい加減お前のトラブル体質は神がかっている。一度、マジで御払いしてもらった方がいい」
　チャイムは乾いた笑みを浮かべるだけで反論が出来ない。チャイム自身も最近は何かに憑かれているのではないかと思う程、非常識なトラブルに巻き込まれ過ぎていると感じているからだ。
「さっさと海に捨てちまえばいいのに、なんで俺がこんなモノ持ち歩かなきゃならんのだ。
　まさか、このまま部屋に持ち帰るつもりじゃないだろうな？」
「そのつもりですけど？
　ゴミ箱に捨てる訳にも行かないでしょう」
「その方がマシだ。どうすんだよ。こんな複雑な爆弾、解体出来るのか？」
　トキは眉間に指を当てて暫し考え、
「あ、チャイムさん。パイナップルがありますよ。デザートにどうでしょう？」
　エアニスを無視し、果物の並ぶ露店を指差した。馬鹿らしくなったエアニスは、ここで会話を打ち切る事にした。
◆
　宿代わりの病院へ着き、エアニスは一人であてがわれた病室へ向っていた。他の３人は食堂で

足りない調理器具の調達へ向かい、エアニスは一人で荷物運びをさせられていた。
「ん・・」
　エアニスの進む先のベンチに、あまり顔を会わせたくない相手が座っていた。白衣を羽織ったクラインは妙に疲れた表情でエアニスに手を振った。
「・・・何だ。ひどい顔してるな」
「えぇ、また街で爆発事件がありましてね。怪我人がウチへ運び込まれて来たんです。つい先程まで治療に当たっていましてね・・・
　そうだ、煙草、頂けますか？」
「病院内は禁煙じゃないのか？」
「このフロアの責任者は私です。許可しますよ」
　エアニスは苦笑いをして自分の煙草のケースを渡し、ついでに昨晩クラインから借りた銀のオイルライターも手渡した。
「綺麗だな、このオイルライター。少し欲しくなったよ」
「・・・気に入られたのなら差し上げますよ？」
「要らねーよ。こんな、"探索"の魔導がかかったライターなんて」
　エアニスの言葉にクラインは驚き、思わず咥えた煙草を落としてしまう。
　"探索"の魔導。要は、魔力を込めた対象物の現在地や、持ち主の状態を術者に伝える、魔導式の発信機である。
　昨晩、クラインは"探索"の魔導を仕掛け、エアニスにオイルライターを貸し与えたのだ。
「いつ気付かれたのですか？」
「受け取った時からだ。
　なめるなよ。何のつもりだ」
「自分の教え子が、伝説になるような殺戮者と一緒にいるんです。普通は気になるでしょう？」
「・・・何の事だ？」
　クラインが自分をどう見ているのか知りつつ、エアニスはシラを切って見せる。
「あの子は、あなたの素性を知らないのですね？」
　クラインは落とした煙草を拾って、再び咥えなおした。
「・・・そろそろ行かせて貰うぞ。早く戻らないとチャイム達がうるさいからな」
　エアニスにとっては、これ以上クラインの話を聞きたく無かった。クラインはエアニスの素性に気付いている。知らないフリもこれ以上続けるには限界があり、愚痴をこぼしながらもエアニスはこの場をどう切り抜けようかと必死に考えていた。
　クラインはエアニスの言葉を無視し、不意に自分の服をまくりあげ、エアニスに自分の胸を見せる。
「！」
　驚き目を剥くエアニス。
　クラインの胸の右側に、大きな刀傷がついていた。傷跡は胸の前面だけではなく、背中にまで繋がっている。即死していても不思議では無い怪我であっただろう。

「２年前、エベネゼルの宮殿であなたに斬られた傷です。
　あなたは覚えていないかもしれませんが、私はあなたの顔をしっかり覚えているんですよ」

　クラインの言葉に不思議とエアニスは驚きを感じなかった。
　正確には、クラインの言葉を理解する事を、頭が拒絶していた。ただ、全身の血が引いて行く様な冷たい感覚と、どうしようもない罪悪感が胸に広がる。
　２年前。自分の大切な人を奪ったエベネゼルへ報復する為、たった一人で宮殿に乗り込み何人かの高官と、自分の邪魔をする人間を斬り殺した、あの夜。忘れたい過去の一つだが、今でも鮮明に覚えている。
　気付くと、足が震えていた。さっきまで、この場をどう誤魔化そうかと必死で働かせていた頭も、完全に止まっている。
「あ、エアニスさん！」
　不意に背後から名を呼ばれ、飛び上がるエアニス。
「な、なんだ、レイチェルか。どうした？」
「チャイムに、エアニスさんを探して来いって言われて・・。
　チャイム怒ってますよ。料理の食材持って、どこほっつき歩いてるんだーっ、て」
「あ ・・・」
　レイチェルは頭から角が生えるようなジェスチャーを見せる。それほどチャイムは怒っているらしい。

「エアニスさん？
　少し、顔色が悪いみたいですけど・・・」
「あぁ、ちょっと疲れたかもな。大丈夫、行こうか」
　そう言い、エアニスは床に置いた荷物を持ち上げる。そして、言わなければならない言葉を小声でクラインに伝えた。
「・・・すまなかった」
「！」

　たった一言、しかし、エアニスがクラインの言う事を認めた証。
　まだ問いただしたい事は沢山あったが、思っても見なかったクラインは何故かエアニスを引き止める事ができなかった。

◆

その晩。エアニス達は夕食として、チャイムの作った手作り料理を囲んでいた。
「これはまた・・・驚きましたね」
「・・・おいしい。凄く」
　トキとレイチェルは目を丸くしながらチャイムの料理に舌鼓を打つ。
「うんうん、当然よ。こんだけ良い食材をあたしが料理したんだからねー」
　得意満面で頷くチャイム。テーブルに並んだ多種多様な料理。盛り付けや野菜切りなどはレイチェルも手伝ったが、調理は全てチャイムの手によるものだった。
「チャイム、凄いわ。こんなに沢山レシピ知ってるなんて」
「いやいや～」
「このパエリアなんで絶品ですね。いやはや、人は見かけによらないと申しますが・・・」
「そこのメガネ一言多い」
　チャイムにパエリアの皿を奪われ、トキは悲しそうな表情を見せた。
　ふと、黙々と食事を進めるエアニスに視線が止まる。もともと無口なエアニスだが、先程から一言も感想を言わない事にチャイムは不機嫌になる。
「ちょっと、エアニスも何か言いなさいよ。ね、おいしい？？」
「・・・」
「・・・ちょっと・・・コラ。」
「あ？」
　チャイムに頭を鷲掴みされて、ようやくエアニスは返事をした。どこかうわの空といった様子だ。そんなエアニスをレイチェルが心配する。
「エアニスさん、さっきクライン先生と話していた時も顔色が悪かったですよ。
　先生に見て貰っていたんですか？
　体調、悪いんですか？」
　レイチェルの心配顔に迫られ、思わず仰け反るエアニス。
「そんな事無い。俺はいつもこんな調子のつもりだけどな。心配いらない。ありがと。
　料理も美味いよ。凄いな、チャイムは」
　妙に穏やかで素直な笑顔に、チャイムとトキは口を歪めた。
「・・・エアニスが変です」
「・・・確実に変ね。エアニス、アンタ熱でもあるんじゃないの？」
「・・・今の俺の台詞、どこか変か？」
「台詞自体は普通だけど、アンタが言うと違和感バリバリなんだけど」

「・・・そう、か」
　そこで会話が途切れてしまう。エアニスは黙って食事を進める。エアニスを除く３人は互いに顔を見合わせた。チャイムは心配そうな顔でエアニスに向き直る。
「エアニスー、ホントに大丈夫？　あたし本気で心配になってきたんだけどさ・・・」
　チャイムの言葉を聴きながら、エアニスは別の事を考える。
　ついクラインに言ってしまった "すまない" という言葉。自分が傷つけた相手を、いい加減な言葉で誤魔化そうとするほど、エアニスは自分の罪を軽く受け止めてはいなかった。
　人の命に価値を感じなかった、かつての自分。
　その自分に命の価値を教えてくれた彼女。
　その彼女を奪ったエベネゼルの高官達。
　自分の罪。
　クラインとの会話の後から、エアニスの頭の中では忘れていたかった過去の出来事が次々と巡ってゆく。
　認めてしまったのだ。もう無理に隠すことも無い。クラインに、そしてチャイムやレイチェルにも、自分の素性を明かしておくべきだろうと、エアニスは考えてした。しかし、それでもエアニスは恐れていた。
　もし俺がクラインを斬った事をチャイムが知ったら、チャイムは俺を許すだろうか？
　もし俺が宮殿で斬り殺した人間の中に、チャイムの友人や、仲間が居たら、
　チャイムは、　　俺を、
　とても食事のできる気分では無かった。まるで大きな氷塊を胃に押し込まれているようだ。

「そうそう、例の爆弾の件ですけど」
　不意にトキが話題を変える。エアニスは軽く頭を振り、皆で抱えている問題に頭を切り替えた。
「僕とレイチェルさんで調べたのですが、ちょっと、解体は僕達の手に負えるものではなさそうですね。
　僕も爆弾の知識はそれなりに持っているのですが、レイチェルさんの見た目では、どうも爆弾の制御には魔導技術も取り入れられているようです。流石に魔導は僕の専門外でして、正直解体できる自信がありません。
　で、どうするかという話ですが、軍に引き渡して賞金を頂きますか？
　それとも、誰も見つけられない場所へ、捨ててしまいますか？」
　トキの問い掛けに、３人は押し黙る。やがてエアニスが口を開いた。
「・・・捨てよう」
「えぇええ！！８００万の賞金が懸かってるんじゃないの！！」
「そうなんですけど・・・この爆弾を欲しがっている人は沢山居る筈なんですよ。
　適当な役所や軍の基地へ渡しに行っても、この爆弾がちゃんと処分される かどうか信用出来ないのです。いいとこオーランド軍に横取りされるか、兵器会社に売られるか、ヘタをすれば犯罪

組織に流れて行くかもしれません」
　まぁ、僕達の知った事ではないのですがね、と不要な一言を付け加えトキは黙る。
　街を一つ消し飛ばす程の爆弾。そのようなものはベクタが開発した、この"イヴォーク"以外に存在しない。よって"イヴォーク"の仕組みや構成を知りたがっている者は沢山いるのだ。
「何者かは分りませんがイヴォークを狙っている者がいた以上、少なくともこのオーランド領内で捨てるのは辞めた方がいいですね。もう暫く南の、ロナウ山脈を越える時、山の中にでも捨てますか」
「いや、捨てるなら海だろ。
　ってか、ひょっとして何か。ただでさえ"石"をルゴワールや、あの魔族の二人組みに狙われてるってのに、今度はその爆弾を欲しがってる奴からも狙われるようになるって事か？」
「まぁ、今更大して変りませんよ」
「えー・・・そーかなー？」
緊張感の無い声で、料理に手を伸ばすチャイム。その様子はどこか他人事のようだ。それを見たトキは、やっぱりチャイムさんはエアニスに似てきましたね、と思うのだった。
「それにしても、一体誰がどこからこんな物を手に入れてきたんでしょうかね」
トキは肩をすくめ、床に転がる爆弾ケースを爪先で蹴飛ばした。

◆

　そして、オーランドシティでの２度目の夜。
　真夜中。エアニスが突然身を起こした。それに僅かに遅れ、トキも身を起こす。
「んー・・・お客ですか？」
「みたいだな」
　トキは眠そうに、エアニスは眠そうではないものの、面倒くさそうに囁く。部屋の外に数人の人間の気配がした。扉越しに伝わる気配に特別な物は感じないので、大した相手ではなさそうである。
「お目当ては石か、爆弾。どっちだと思う？」
「石だったらこの部屋には来ないんじゃないですか？」
　エアニスのベッドの横には、例の爆弾ケースが無造作に転がっていた。エアニスとトキは枕元の短銃を手に取り、扉へ向けた。夜中の病院という場所に気を遣い、迎え撃つ側にも関わらず銃にサイレンサーを取り付ける余裕ぶりである。
　しかし。エアニスは、扉の向こうから放たれる殺気の中に、"確信"という意識が込められている事に気付いた。
「・・・！
　やば・・・！」
　猛烈に嫌な予感が走り抜けた。
　エアニスが感じた殺気は、敵が "確実に相手を倒せる" と思っている時に発する、驕りにも似た

殺気だった。この状況でこの殺気を向けられた時の展開に、エアニスはおおよその見当がついた。
　エアニスは爆弾のケースとトキの襟首を掴み、窓ガラスを叩き割って外へ飛び出した。　次の瞬間、扉を突き破り何かが部屋の壁に突き刺さった。
　バヴン！！
　窓を飛び出したエアニス達の背中を爆風が押し出す。３階の窓から飛び出したエアニスとトキは、そのまま大きな木に突っ込み、枝に引っかかりながら地面へ落ちた。
「・・・あ、ちょっと僕、久し振りにアタマに来ました。僕達の荷物、吹っ飛びましたね。あれは」
　トキは木の葉まみれで仰向けに横たわり、煙と炎を上げる部屋を見つめた。

◆

「ケースはどこだ、もっと良く探せ！！」
　エアニス達の部屋に炸裂弾を打ち込んだ５人組の男達は、焼け焦げて滅茶苦茶になった部屋を掻き回していた。男達の様子には落ち着きが無く、部屋で眠ってい た相手の姿が消えている事にも気付かず、必死で家捜しを続ける。しかし、目当てである爆弾の詰められたケースは見当たらなかった。
「何してんのアンタたち！！」
　隣の部屋から、寝間着姿のチャイムがボーンクラッシャーを片手に駆け込んで来た。扉の前にいた男が反射的にナイフを片手にチャイムに襲い掛かる。しかしチャイムは慌てず一歩引き、横薙ぎの一撃で男の左あばら骨を叩き折った。
「このっ・・・取り押さえろ！」
　残りの男達が同時にチャイムへ飛び掛る。チャイムはさらに後退し、狭い扉から一度に出てこようとする男達へ向けて、剣を振るう。チャイムは襲い掛かる相手 を一人ずつ、顎を、肩を、胸を叩き、男達の自由を確実に奪ってゆく。ものの十数秒で、男達は気を失い、または骨を砕かれ、まともに動けなくなってしまった。
「私の出る幕無かったね」
　手を出す暇も無く終わった戦いを見届け、レイチェルは魔導で作り出した氷の霧で僅かに部屋に残る炎を消し止めた。
「あいつらは・・・？」
　部屋を爆破されたとは言え、エアニスとトキの事である。無事でいるだろうが、姿が見えなかった。とりあえずチャイムは、部屋の焼け焦げたシーツを裂き、それで男達の手足の自由を奪った。
「アンタ達、何者よ。あたし達に何の用？」
「とぼけるな！ イヴォークを持ち逃げしたのは貴様等だろ！」
　チャイムに見下ろされた男は痛みに顔をしかめながら叫ぶ。

(・・・うわ、マジで核爆弾だったんだ・・・)
　心のどこかで、トキの話が間違いであって欲しいと願っていたチャイムとレイチェルだったが、どうやらトキの目と知識は確かだったようだ。
「そーよ。アンタ達はあれを何に使うつもりだったの。話によっては返してあげてもいいわよ」
　そんなつもりは欠片も無かったが、上からモノを言う場合は下の者に甘さや妥協を見せる事で話が上手く進む場合がある。因みにこの知識はエアニスを見て学んだ物だ。
「俺達は、大戦後の混乱に乗じてこの町の土地を占領し、観光地にしちまった金持ち共と戦っているんだ！
　あれは俺たちの土地を奴等から取り返すための、脅しの道具だ！！」
　男の口上に、チャイムとレイチェルは顔を見合わせた。そして、チャイムは弾かれたように、昨日の事を思い出す。
「・・・観光ホテルばかり狙う爆弾テロ集団って、アンタ達の事？
　昨日の宿の爆発も、あんた達の仕業？」
「そうだ・・・。
　昨日だって奴等は俺達の要求を無視した、俺達に返す土地も金も、一切無いと言いやがった、だから・・・」
がつっ！
　チャイムは思わず男の鼻面を殴りつけていた。そのまま襟首を掴み、床に押し付ける。
「爆発に巻き込まれた子供が死にかけたのよ！！
　どういう理由であれ、そんな事が許される筈が無いでしょう！！」
　チャイムの激昂を見たレイチェルは、思わず身を竦ませる。しかし、殴られた男の方は違った。
「貴様に何が分かる！！
　戦争が終わって故郷に帰ると、自分の居場所が余所者に奪われているんだぞ！！
　俺の家族も、今じゃ町外れのスラム暮らしだ。奴等が大人しく俺達の土地を返せば、こんな事をする必要も無いんだ！！」
　尚も男は反論をする。男の事情も分らない事はないが、だからといってそれが正当だと認める気は無い。チャイムは再び拳を振り上げる。しかし、その拳は振り下ろされる前に誰かの手で包まれた。
「よせ、時間の無駄だ」
　いつの間にか背後にエアニスが立っていた。そのエアニスの冷静な声に、チャイムも相手に腹を立てる事が馬鹿らしく感じてしまった。力なく振り上げた拳を下ろし、小さく溜息をつく。
「なるほど、この町の爆発事件にはそんな背景があったのですね」
　一緒に現れたトキの手に持たれたケースを見て、チャイムに殴られた男は声を上げる。
「それは・・・っ」
「おっと、返しませんよ。これはあなた達のようなテロリストには過ぎた長物です。こちらで処分させて頂きますよ」

　そう言いながら、トキは爆破された自分の部屋を覗き込む。
「あぁあぁ、無茶苦茶にしてくれましたね。せっかく買い込んだ物がパァですよ。どうしてくれましょう？」
　あ、怒ってる。
　いつも通りのニコニコ笑顔のトキだったが、チャイムとレイチェルはその笑顔からとてつもない威圧感を感じて乾いた笑みを浮かべた。
　止めた方がいいかな。チャイムがそんな事を思っていると、
　突然、周りの空気が変った。
「う、ぐ・・・」
縛られた男達は突然の圧迫感に胸が詰まり、呻き声を上げる。そして、それはエアニス達にも襲い掛かった。
「何だ、何が起こった・・・？」
異変には気付きつつも、その正体が分からずに辺りを見回すエアニス。体に感じる異変は、喉に絡みつくような空気による息苦しさと、突然の虚脱感。真っ先に毒ガスなどの兵器の可能性を考えたが、違う。周囲の空気には魔力的な力が満ちている。
トキ達もエアニス同様、息苦しそうに胸に手を当て辺りの様子を伺っている。しかし、目に見える変化は・・・
あった。病院の窓の外に、薄い紫色をした霧が立ち込めている。レイチェルが窓から身を乗り出す。
「結界の魔導・・・？」
レイチェルが、どこか自信なさげに呟く。
「まさか・・・ここから見える範囲でも、かなり広く覆われてるわよ。こんな大きな結界を作る事が出来るなんて人間の魔力じゃ・・・」
魔導を知るチャイムでもレイチェル同様、推測を述べる事しか出来ない。
「・・・これをやったのは人間じゃないってのはアタリみたいだな」
一度だけ遭遇した、"彼女"の存在を感じながら、エアニスは呟く。エアニス以外の３人は、その気配を感じる事は出来なかったが、エアニスの言葉と硬い表情から、嫌な予感を感じる。
「来るぞ」
その言葉の後、突然床の一部が歪み、黒ずんだ泉に変った。そしてその泉からゴシック調の短いドレスを纏った少女が現れる。

「どうも、お久し振りね。探したわよ、色男さん」
それは数日前、アスラムへ向う船で戦った魔族、アイビスだった。

第31話　月夜の舞

　紫色の結界と共に出現した少女。最悪の敵との遭遇にエアニス達は動揺する。
「こんな時に・・・っ！」
　エアニスは焼け焦げた部屋に飛び込み、自分の剣とローブを拾い上げる。同時にトキの銃とコートも掴み、トキに投げつけてやる。アイビスを囲み、４人は武器を構えた。
「そんなに警戒しなくてもいいわよ。今日はあんた達を相手にする気は無いから」
　アイビスは手を首の後ろで組み、つまらなさそうに呟く。奇襲をかけるには絶好の機会だったにも関わらず、エアニス達の前に立つアイビスは、全く戦う意思がなさそうだ。エアニスは剣を抜き放ちアイビスに聞く。
「彼氏はどうした。愛想でもつかされたのか？」
　アイビスは "こいつ何言ってるの？" といった表情を浮かべた後、すぐにあぁと呟いた。
「イビスは来ないわ。今日はあたし一人のお仕事。
　ルゴワールにも、あんた達には暫く手を出すなって言われてるのよね」
　予想外の言葉を聞き、眉を寄せるエアニス。チャイム達も同じ顔をしていた。
「でも。あたしはあなた達を放っておけなくてねー。
　色々と調べさせてもらったわよ。あなた達の事」
　アイビスはトキに目視線を送る。
「トラキア＝スティンブルグ。旧マスカレイド部隊の、通称"U-66"。一年半前の任務中に行方不明って記録にあったけど、まだ生きてたのね」
　「・・・！」
　アイビスの言葉にトキは思わず立ち上がる。しかし、すぐに結界が及ぼす虚脱感によって膝を折った。忌々しげな目で、アイビスを見上げる。
「・・・あまりそういう話はしないで貰えますか？」
　言葉遣いこそは普段どおりだが、トキからは並々ならぬ怒気、もとい憎悪を感じた。思わず息を呑むチャイムとレイチェル。トキがこうもあからさまに敵意を向ける所を、二人は初めて目にした。
　アイビスはトキに冷たい視線を送った後、同じ視線をエアニスにも向ける。
「そして、エアニス＝ブルーゲイル・・・
　ううん、本名で呼んだ方がいいかしら？」
「っ・・・な！」
　エアニスが慌てて何かを言いかけた。しかしアイビスはそれに構う事無く、一文字一文字噛んで含むようにして、その名を口にする。
「ザード＝ウオルサム」

　それが何を意味するのか、チャイムとレイチェルには分からなかった。
　ただ、聞き覚えのある名前だという思いが、心に引っ掛かった。アイビスを警戒しつつ頭の隅

でそのような事を考えていると、
「黙れ！！」
　彼女達が戸惑いを感じていた一瞬の間。エアニスはアイビスに踊りかかり、左手の紅い剣を叩きつけた。エアニスの剣はアイビスの手の平によって受け止められたが、その勢いまでは殺しきれず彼女の体を撥ね飛ばし背後の窓ガラスに叩きつけた。
「あら。やっぱ、お仲間には秘密にしてたのね？
　有名人なんだから自慢すればいいのに。それとも恥ずかしいのかしら？」
　自分の秘密をばらされた上、小馬鹿にしたような口を叩かれ、エアニスの頭に一気に血が昇った。すぅ、と、エアニスから表情が消え、エアニスは空いている右手でアイビスの喉を掴み、そのまま握り潰した。"ごりっ"と鈍い音が耳に届き、チャイムとレイチェルは息を呑んだ。
「黙れと言っている」
　アイビスの首を絞めたまま、エアニスはアイビスの鼻先に額を突きつけるようにして睨み付ける。魔族とはいえ、人間の少女の姿をした相手に対し、エアニスは全く躊躇が無かった。
　人間ならば既に死んでいるところだが、魔族であるアイビスはエアニスに喉を潰されながらも、変わらず言葉を発する。
「まだまだ色々と調べたのよ。あなたのせいで死んだ、あなたの彼女の事もね」
　ざわっ
　エアニスの全身が総毛立つ。
　剣を翻したエアニスはアイビスの胸元目掛けて突きを繰り出す。切っ先が彼女の体に食い込んだ途端、アイビスの体は爆風にも似た衝撃波に襲われ、砂埃と赤い光を撒き散らしながら窓枠ごと建物の外へと吹き飛ばされた。
　窓の外へ落ちたアイビスを追うように、エアニスも窓から飛び出して行った。

「今の・・・何ですか！？
　狼狽するレイチェル。レイチェルの目では今の攻防で何があったのか理解が及ばなかったが、彼女にはエアニスが魔導を使った様に見えた。
「それより、ちょっと待って・・・！
　あのアイビスって魔族が言った、ザード＝ウオルサムって名前・・・何処かで・・・」
　固まったままエアニスが飛び出した窓を見つめていた二人は、せきを切ったように喋りだした。短い間に様々な事が起こり、混乱する二人。
「それよりも、まずはエアニスを追いましょう。
　エアニス、完全にキレてましたからね。無茶をする前に止めなくては・・・
　他の事を考えるのは後回しです。」
　そう言って、そう誤魔化して、トキは階段へ向けて駆け出した。チャイムもすっきりしない気分のままトキとレイチェルの背中を追った。

◆

　ガイン！
　エアニスが振り下ろした剣は、アイビスの手の中に突然現れたスティッキによって受け止められた。
「どうしても、伝説になった人間の戦いを見たくてね。ちょっと趣向を凝らした仕掛けをさせて貰ったわ」
　アイビスはエアニスの剣を受け止めたまま涼しい声で話す。大して力を入れているようには見えないが、彼女のスティッキは微動だにしない。無論、彼女の存在と同じ様に、このスティッキもただのスティッキでは無いのだろう。
「本当は結界内の人間全員を "生ける屍" に変えて襲わせようと思ったんだけど・・・・」
　エアニスの脳裏に、致命傷を負いながらも立ち上がるルゴワールの刺客達とバルザックの姿が蘇る。
　しかし、アイビスの言葉にエアニスの表情は動かなかった。彼の神経を逆なでるつもりで言った言葉だったので、反応を示さない事にアイビスは不機嫌になる。
「ふん・・・人間相手じゃ、アンタも迷いが出て、本気で戦ってくれないでしょ？」
　エアニスの剣を弾き返し、アイビスは宙に浮いた。
「だから、こうしてみたわ」
　パチン、とアイビスが指を鳴らすと、
　エアニスの足元が、蠢いた。

　ズドドドォオオッ！！
　地面の土が猛烈に吹き上がった。エアニスは両腕で目元を覆い、土煙が立ち込める周りを見回す。
　周りには無数の土の柱が立っていた。高さは人の身の丈程。数は、数え切れないほど、沢山。
　アイビスの意図が読めず、エアニスは周りの様子を何度も見回した。
　ぼこっ
　目の前の土柱が割れた。崩れたのかと思ったが、すぐに土の柱は別の物に姿を変える。土で出来た人形。ゴーレムだった。
　エアニスは反射的に自分の周りにある３、４本の土柱、もといゴーレムを斬り飛ばした。ゴーレムの体は脆く、簡単に刃が土の体を突き抜けた。その手応えは人間を斬った時のそれに似ていた。両断されたゴーレムはバラバラに砕け、そのまま土塊に戻る。
　ぼごっ、ぼこん
　次々と土の柱は人の形へと変ってゆき、鈍い足取りでエアニスに歩み寄る。
「３００体くらい作ってみたわ。力も体の強度も人間と変らないくらいかしら」
　宙に浮いて、ゴーレムに囲まれるエアニスを見下ろしながらアイビスは面白そうに話す。
「あんた、戦争中はたった一人で何百人って数の人間を斬り殺したそうじゃない。そんな化け物の戦い方ってのを私にも見せてよ」

周囲にはゴーレム達が隙間も無い程ひしめき合っている。エアニスはその中心で前後左右に剣を振り回し、襲い来るゴーレム達を次々と斬り倒しているが、完全に囲まれた状態でこれだけの数のゴーレムを相手にするには無理があった。ゴーレム達の岩の爪が、エアニスの腕や肩を掴んだ。

舌打ちをしたエアニスは、刀身に右手の指先を走らせる。すると剣の腹に刻まれた文字のような模様が光りを放った。紅い輝きを増した剣を、エアニスは自分の足元に突き立てる。

ばがぁっ！

同時にエアニスを取り囲む数体のゴーレムが砕け散る。エアニスは魔力を込めた剣を地面に突き立て、周りのゴーレムを動かしている魔力の干渉を断ち切ったのだ。

「へぇ！！

ハーフエルフのくせに、私の干渉を越える魔力を扱えるんだ！！」

嬉々とした表情で、アイビスはエアニスの一挙一動を食い入るように見つめる。

エアニスは密度の薄くなったゴーレムの群れへ駆け込んだ。先頭のゴーレムが伸ばした腕を剣のひと振りで斬り飛ばす。両腕を失ったゴーレムの胸を踏み台にして、エアニスはゴーレムの群れの頭上へ飛び出した。そしてゴーレムの頭や肩を踏み付け、高みの見物を決め込むアイビスへ向い、一瞬で距離を詰める。

がっ

足場にしたゴーレムの頭を踏み砕く勢いでエアニスはアイビスに飛び掛かった。剣を振りかぶり、袈裟懸けにアイビスを斬り付ける。が、エアニスの刃が触れる瞬間、アイビスが微笑を浮かべると共にその姿は霞のように消え失せた。空間移動だ。エアニスはそのままゴーレムの群れの中へ着地する。

「クソッ！！」

　アイビスが何処へ姿を消したか分からないが、どこへ行くにしても、このゴーレムの群れを幾ばか切り崩さなくてはならないようだ。
　エアニスにとって、これ程の数の敵を相手取るのは、先の大戦以来だった。かつての戦いの感覚が、少しづつエアニスに戻ってくる。
「まぁいい。奴の言う通り、土人形相手なら思い切りやれるしな」
　戦う事で感じる、狂気にも似た歓喜。普段は抑えている感情が疼く。アイビスの配慮に、僅かながら感謝をするエアニスだった。

◆

　トキを先頭に、チャイムとレイチェルは病院内の階段を駆け下りる。道中、病室の幾つかを覗いてみたが、殆どの入院患者が気を失うか、衰弱をしていた。この結界と同時に発生した、まるで徐々に体力を奪われるような魔導の影響だろう。
(早く、この結界を壊さなくちゃ・・・)
　大戦中に自分の勤める病院が軍隊に襲われた時の事を思い出す。チャイムは締め付けられるような自分の胸を叩き、冷静さを保てと自分に言い聞かせる。
　チャイムの前を走るトキの姿勢が、ぐらりと傾いだ。え？ と思う間も無く、トキは勢い良く廊下に倒れ込んだ。
「トキ！！？」
「トキさんっ！！」
　２人はうつ伏せに倒れるトキに駆け寄った。トキはチャイムとレイチェルの手を借りず自分で起き上がろうとした。しかし、猛烈な虚脱感で膝に力が入らない。滅多に顔色を変えないトキの顔が青ざめ、不規則に息が乱れている。
「お、おかしいですね・・・。チャイムさんもレイチェルさんも、体は大丈夫ですか？」
「なんでアンタがあたし達の心配すんのよ！！
　どうしたの、顔まっ青よ！？」
　トキは壁に手を当てながら立ち上がる。膝が震えていた。
「お二人は結界が張られたと同時に発生した、この不快感や脱力感を感じないのですか？」
　チャイムとレイチェルは顔を見合わせる。
「たしかに違和感はあるけど・・・あたしは苦しい程じゃないわよ」
「きっとトキさんは、魔力の耐性が弱いから、まともに術の影響を受けてしまっているんですね・・・」
「あぁ、なるほど。それでエアニスもお二人も平気な顔をしていられるのですか」
　人間の体、正確には"血"には大なり小なり魔力が宿っている。魔導が使えなくても、誰の身にも多少の魔力が宿っている筈なのだ。しかしトキには魔術への耐性は全く無い。体に魔力が欠片も宿っていないからだ。それは彼の生まれに起因するものだった。そして魔力量の多さは、同時に魔術への耐性にも比例している。魔導師であるチャイムやレイチェル、エルフの魔力を持つエ

アニスはこの結界の影響は少ないようだが、トキにとっては相当な負荷だった。
「とは言え、寝てる訳にもいきませんからね・・・。すみません、先を急ぎ・・」
　トキの言葉が尻すぼみするように消える。目の前のチャイムとレイチェルの表情が固まっていたのだ。彼女等の視線の先、自分の背後に視線を向けると、そこにはアイビスの姿があった。トキは脱力感に震える腕で銃を構えた。

　トキを見てアイビスは笑う。
「辛そうね。あ、そっか、あなたは普通の人間じゃないから魔力がカケラも無いんだ。それじゃこの結界の中に居るのは辛いかもねぇ・・・」
　思わせぶりなアイビスの言葉に、トキは口元を歪める。
　本当に、気に入らない女だ。
「エアニスは・・・どうしました？」
「あぁ、ザード＝ウオルサムならあたしの駒達と遊んでるわ。暫くは助けに来ないと思うわよ」
　エアニスを聞き慣れない名で呼ぶアイビスに、チャイムとレイチェルは戸惑いを覚える。その反応を面白く感じたアイビスは、もう少しだけ彼女達の心を揺さぶってみたくなった。
「本当に彼の事を何も知らないのね。エアニスってのは戦争が終わってから使い始めた偽名みたいよ。アレの本当の名前は、ザード＝ウオルサムって言うの」
「偽名・・・？」
　誰ともなく呟き、何となく視線をトキに向けるチャイム。トキはその視線に気付きながらも無視をする。
「そんな事より、ソレ、渡してくれない？」
「・・・渡す？」
　何の事か分からずトキはアイビスに聞き返したが、すぐに自分が手に持っている物を思い出す。トキの持つケースの中には、"イヴォーク"が収まっている。
「まさか、初めからコレが目的で・・・？」
「そーよ。ルゴワールの人間も、その爆弾を欲しがってるみたいなの。ソレの追跡をしていた調査員から、あんた達の報告が入ってね。コレは挨拶しなきゃって、飛んできたのよ」
　ほぞを噛むトキ。てっきり彼女の目的はレイチェルの"石"とばかり思っていたが、本当の目的はこの爆弾だったとは。
　トキは魔族のような非現実的な相手と戦った事は無い。そういえば、あの船の上での戦いでエアニスはアイビスの片手を斬り落としてやったと話していた。が、どう見てもアイビスの両手は無傷である。トキ達の目の前に現れた時も、突然空間から滲み出るように姿を現した。そのような非常識な存在に、トキの持つ常識がどれだけ通用するのか正直自信が無かった。
　アイビスとまともに戦えそうなのはエアニスしか居ない。しかし、見事にエアニスと分断されてしまい、トキはどう出るべきか迷っていた。とりあえず、銃口をアイビスに向けて牽制する。
「なに？ そんな銃であたしと戦うつもり？？」
　アイビスは、小馬鹿にしたような笑みを浮かべ、両手を広げて見せる。

「撃ってもいいわよ。避けないからさ」
「・・・・。」
　アイビスの挑発にトキは躊躇する。魔族とは言え、少女の姿をした相手に銃を撃つ事に抵抗を感じた。
「撃たないんだったらコッチから行くわよ。ザード＝ウォルサムが戻って来るまでに、そのバクダンを頂いて行きたいのよね」
　ぎゃんっ！
　空気が軋むような、電撃が弾ける様な音と共に、アイビスの周りに無数の光の槍が生まれた。
『！！！』
　槍に込められた膨大なな魔力を感じ取り、チャイムとレイチェルは凍りつく。
「トキ、下がって！！」
　チャイムは身を引きながら叫び、レイチェルは結界の呪文を紡ぐ。アイビスの笑みが深くなった次の瞬間、槍はトキに向けて一斉に襲い掛かった。同時に完成したレイチェルの障壁が、トキの数歩先で発動し薄い光の壁を作り出した。
　ガン！　ガヒィン！！　ガインッ！！！
　槍が次々とレイチェルの作り出した壁に突き刺さる。しかし、光の槍は消える事無く魔力の欠片を撒き散らしながら障壁に食い込み続けた。障壁を維持するレイチェルの顔色が変わる。
「だめ・・・・耐えきれないっ！！！」
　レイチェルが叫び、障壁全体が大きく歪んだ。トキが銃弾すら通さない自分のコートでレイチェルとチャイムを覆い、盾となろうとしたその時。

　ばじゅゅっ
　水が蒸発するような音と大量の水蒸気が立ち上り、同時に光の槍が砕け散った。何が起こったのか分からず周りを見回すトキ達。それはアイビスも同じであった。
「早く！ この煙に紛れて逃げて！」
　下階に続く階段からクラインの声が上がった。光の槍を打ち消したのは彼の魔導のようだ。辺りには光の槍の消失と共に発生した水蒸気が充満し、アイビスとトキ達の互いの姿を隠していた。トキ達は急いでクラインの後に続き、病棟の１階まで駆け下りた。
「この結界を作ったのは先程の少女ですね。チャイム、あれは何者ですか。とても人間の魔力とは思えませんが・・・」
　走りながら問うクライン。チャイムは返答に困りつつも、
「あれとまともに戦えるのはエアニスだけなんです、中庭にエアニスが居るはずだから、早く合流しないと・・・！」
「中庭ですね。近道をしましょう」
　クラインを先頭に、４人は中庭への最短路を辿る。近道を遮る木戸と窓ガラスを一枚づつ壊し、その先にあった小さな門を抜けてようやく中庭に出た。エアニスの姿を探し、チャイムは辺りを見回した。

がつっ、
つま先に何かが引っかかり、チャイムは転んでしまった。擦りむいた膝の痛みに顔をしかめながらもすぐに立ち上がり、自分が何につまづいたのかと思い足元を見る。
明るい月明かりに照らされたそれは、人間の腕に見えた。
「う・・・！」
思わず声が漏れた。それが何なのか理解しようとチャイムの目は地面に落ちた物体に釘付けになる。そして、月明りに照らされたそれに何かの影が横切った。
チャイムは月の昇る空を振り返る。

最初に目に付いたのは月光を映した長剣の軌跡。そして、その軌跡に触れた人影は真ん中で二つに分かれて地に落ちた。
息を呑んでその光景に見入る４人。
銀色の人影へ襲い掛かる幾つもの黒い人影。しかし、黒い影は銀色の影が振るう剣に次々と斬り裂かれ地面へ散らばる。銀色の足元には黒い人影達が折り重なり、山のようになっていた。
銀色の人影、エアニスは、月の光に照らされた琥珀の髪を銀色に輝かせ闇夜を舞う。

「戦場に現れ、たった一人で何百人もの人間を切り倒す剣士・・・」
チャイムはつい先日、ギルドで聞いた桁外れの賞金を賭けられた男の噂を思い出す。
銀の髪と紅い剣を持った剣士。たった一人で幾千もの人間を斬り、伝説となった殺戮者。
月の光を纏う者 "ザード = ウオルサム"

第32話　デーモン

　チャイムにとって、それは正に地獄のような光景だった。
　どざぁっ
　エアニスに切り飛ばされた人影が歪な形に崩れてチャイム達の目前に転がる。
「何よ、コレ・・・」
　チャイムはその光景に思わず足が竦み、膝をついてしまった。そのチャイムを、トキがそっと支えた。
「チャイムさん、良く見て下さい。これは、人ではありません」
　トキがチャイムを安心させるように落ち着いた声で言った。チャイムは足元の人影を良く見ると、それは人の形をした土の塊だった。途端に、全身を支配していた恐怖による緊張が、少しだけ緩んだ。
「ゴーレム・・・でも、こんなに沢山・・・！」
　暗闇に慣れてきた目で中庭を見渡すと、百に上ろうかというゴーレムの残骸が散らばり、折り重なっていた。そして、それを踏み付けながら次々と襲い掛かるゴーレムを斬り払い続けるエアニス。
　エアニスは、たった一人でこれだけの数のゴーレムを壊したのか。
チャイムとレイチェルの脳裏に、アイビスの言葉がよぎった。
　たった一人で幾千もの人間を斬り、伝説となった殺戮者
　月の光を纏う者。

「まさか、たった十数分でこんなにも減らされるとはねー。」
　間延びしたアイビスの声は、トキ達の背後、中庭への出口から不意に聞こえた。トキが慌てて振り向くと、アイビスの振るったステッキが、トキに叩き付けられようとしていた。
　ガンッ
　咄嗟に持っていた銃の銃身でステッキを受け止めるも、アイビスの人間のそれではない力で弾き飛ばされてしまった。背中を壁に叩きつけられ、息を詰まらせ倒れるトキ。
「・・・っ、この！」
　僅かに怯み、反応を遅らせながらも、チャイムとレイチェルはアイビスに向って武器を振り上げ、クラインも呪文を唱え始める。しかし、アイビスはふわりと宙に舞い、チャイム達の手の届かない木立の枝に立った。その手には、いつの間にかトキから奪った、"イヴォーク"のケースが下げられていた。
「さっきも言ったけど、あたしの目的はこの爆弾なの。あんた達にはちょっと挨拶したかっただけだから」
　チラリと、アイビスは中庭に散乱したゴーレムの山を見て、笑った。
「けっこう楽しかったわ。あの有名な、月の光を纏う者の戦いも見れたし・・・」
　そこで言葉を切り、アイビスは戦場の異変に気付いた。エアニスが、どこにも居ない。

　それに気付いた途端、頭上から強烈な殺気が降りかかる。体をねじる様に飛びながら、エアニスが斬り掛かって来たのだ。
「 返せ 」
　声は聞こえなかったが、エアニスの唇がそう動くのを見た。アイビスは笑みを浮かべながら、その場から飛びさがる。
　ざごぉっ！
　エアニスの剣が木立の太い幹を斬り裂いた。飛びさがったアイビスを、エアニスの感情を持たない瞳が追う。その落ち着いた瞳は、とても誰かを殺そうとしているとは思えない静かな光をたたえていた。それが逆に異常で、アイビスはたかが人間相手に恐怖を感じた。
（ こいつ、噂以上の化け物みたいね・・・ ）
　アイビスは、エアニスに向って不敵に笑って見せる。しかし、それがぎこちない笑みになっていた事に気付いていなかった。

斬り裂いた幹を蹴り、エアニスがチャイム達の元に着地した。
「無事か？
　俺が離れたせいで、危険な目に遭わせたみたいだな。悪かった」
　エアニスは剣を構えながら、背後のチャイム達に謝った。その言葉に、チャイムとレイチェルは、どう答えれば良いか分からず、口ごもった。その二人の反応を背中で感じながら、エアニスは言葉を続ける。
「アイツが言った、俺の素性の話は・・・本当だ」
「 ・ ・ ・ ！」
　想像はついていたが、それでもやはり驚きを隠せなかったチャイムとレイチェル。
「それじゃあ・・・本当にエアニスは・・・」
「その話は後にしよう。今は・・・」
　言葉を切り、エアニスは再びアイビスを睨んだ。
　チャイムとレイチェルは、今のエアニスに対して違和感を感じていた。このような状況でも、いつものように落ち着いた声のエアニス。しかし、今のエアニス は、何かが違っていた。落ち着いているというよりも、まるで感情が欠如したような、どこか得体の知れない別人のように感じられた。今までエアニスから感じた事の無いものであった。

「エアニス、彼女の狙いは"イヴォーク"です”！」
　苦しそうな声でエアニスに呼びかけるトキ。エアニスはアイビスの持つケースに視線を向けた。
「元々、今回はアンタ達に用はなかったの。今日はコレさえ手には入れはわたしのお仕事は終り。
　だから、そろそろ退散させてもらうわ。楽しかったわ。また会いましょ」
　そう言うと、アイビスは夜の空間に裂け目を作り出し、空間の断裂に手をかけた。

「このまま逃がすと思うか？」
　紅い剣を肩に担いだエアニスは、アイビスの元へ駆け出す。病院の外壁と木立を使った三角飛びで、一瞬で宙に浮くアイビスの高みまで身を舞い上がらせた。
　三階建ての建物に匹敵する高さだ。空中という絶対的な安全圏にいたつもりのアイビスはア慌てて身を翻す。
「あんた達の相手は、この子がしてくれるわ！」
　アイビスの声と同時に、エアニスの目前の空間がねじれた。
「！！」
　目前に現れた猛烈な不快感に、エアニスは反射的に剣をかざした。
　がんっ！！
　空間のねじれから、突然巨大な腕が飛び出し、宙に舞ったエアニスを弾き飛ばした。エアニスは足から地面に着地するものの、その衝撃を受け止めきれず砂埃を巻き上げながら地面を転がった。
「っつ・・・！この野郎！」
　ばね人形のように身を起こしてアイビスに再び飛び掛かろうとするも、そこにアイビスの姿は無かった。悔しそうに舌打ちをするエアニス。ゴーレムと戦っているうちは嫌に頭が冴えていたが、今の事で急に頭に血が昇り始めた。

　どすん
　空間の裂け目から放逐されたそれは、エアニス達から少し離れた場所に地響きを立てて降り立った。チャイムとレイチェル、トキとクラインまでも、驚愕の表情を浮かべ、エアニスだけが、憮然とした表情で"それ"を見上げる。

「・・・うそ・・・？」
「化け物・・・！」
　チャイムとレイチェルは、呆然と立ち尽くし、小さく声を漏らした。
　それは文字通り、"化け物"だった。２本の足でかがむように立つ、３メートルは越えているだろうという巨体。頭には角が２本生え、青黒い皮膚とコウモリの羽を持った鬼のような怪物。それはまさしく、今や伝説やおとぎ話になりつつある、"魔物"という存在であった。

　グォアアアアアアアアアアア！！！！
　中庭に面した窓ガラスをビリビリと震わせながら、デーモンが雄叫びを上げた。腹の底を揺さぶられる、とても生き物の声とは思えない轟音。そのデーモンの姿にチャイム達は竦み上がった。
「ひ・・・」
　半歩だけあとずさり、チャイムが短く声を上げた。
「も・・・もれた・・・」
「えっ。」
「・・・マジですか？」
　レイチェルとトキは、思わずデーモンの存在を忘れチャイムから距離を取った。
「阿呆な事言ってないで逃げろ馬鹿！！」
　どがあっ！！
　エアニスがチャイム達を突き飛ばすのと同時に、デーモンの両腕がその場に振り下ろされた。そのままエアニス達は茂みに飛び込み、デーモンの視界から姿を隠す。
「なになに、何なのよアレは！？」
　茂みの中、チャイムは目を白黒させながらエアニスに詰め寄る。ややパニック状態のチャイムだが、あのような怪物を見て落ち着いていられる方が異常である。
「１００年以上昔に絶滅したって言われてる、魔物・・・デーモンって奴だな。たまに、"向こう側"の世界からこっちに呼び出す馬鹿がいるんだ」
　レイチェルが弾かれるように顔を上げた。
「向こう側って・・・まさか！？」

　御伽噺の向こう側の世界。この世界から追放された者達の世界、"レッドエデン"。
　エアニスはレイチェルの目を見ながら、無言で頷いた。
「まさか・・・ホントにあんな化け物が存在してるとは・・・
　正直、今までおとぎ話のように何処か信じていない所もありましたが・・・
　いやいや、参りましたね」
　あまり参っている様子の無いトキが頭を掻く。現実逃避にも似た諦め感があった。
「実際に"魔族"がいるんだ。奴等より下等な"魔物"がいたって不思議じゃないだろ」
　さも当たり前のようにエアニスは答えた。
「エアニスさん、随分落ち着いてますね・・・」
　普段、エアニス達の気まずいかけあい漫才を見ている時と同じ乾いた笑みを浮かべるレイチェル。しかしその笑みは、いつもと違い恐怖を誤魔化すためのものだった。
「先の大戦でも、ああいう奴と戦った事はある。面倒な相手だが、まあ、なんとかしてみせるよ。
　気をつけろよ。まともに殴られたらただじゃ済まない。アレでも魔導を使ってくるから、距離を取ってても油断するな。
　救いと言えば、魔物は魔族よりも、存在を"精神"よりも"物質"に依存している点だ。物理的な打撃だけでもダメージを与える事はできるが・・・」
「ちょ、ちょっとタンマ！ 物質とか精神って何の話よ！？」
「あー、難しく考えるな。とにかく、倒せない相手じゃないって事だ。
　魔導使ってくる熊か何かだと思っていればいい」
「そ、そんなんでいいの？」
　チャイムを始め魔物を見る３人の不安は、そんなエアニスの言葉で拭いきれるものではなかった。見た目のインパクトだけならば今まで目にした生き物の中で最高の禍々しさである。
「そんな事より、大丈夫なんですか、チャイムさん？」
　デーモンを見て身震いするチャイムに、トキが心配そうに声をかけた。
「大丈夫って、何がよ？」
「先程の、おもら　」
「いっぺん死んで来いエロメガネ！！！」
　どがあぁっ！　と、トキはチャイムに茂みの外へ蹴り飛ばされた。

「うわっ！！」
　チャイムに蹴り飛ばされ仰向けに倒れこんだトキの頭上に、デーモンの持ち上げた足の裏があった。トキは慌ててベルトに挿した銃を引き抜き、デーモンの顔を狙う。
　トキの銃口が、爆音と火を吹く。
　デーモンは短い悲鳴とともに仰け反っただけで、銃弾がデーモンの体を傷つける事は無かった。小石でもぶつけられた程度のものだったのかもしれない。トキはデーモンが怯んだ隙に起き上がり、距離を取る。

「効いてませんね・・・！？
　対戦車砲でも持ってこればよかったですかね！」
　トキが構える銃は、トキが持ち歩いてる銃の中で最も破壊力のある銃であった。鋼で出来た鎧でも簡単に貫通するほどの銃弾は、デーモンを怯ませる程度の役にしか立たないようだ。
　ゴアアァ！
　トキは無駄だと知りつつも、デーモンに銃弾を浴びせる。デーモンは銃弾に構う素振りを見せず、雄叫びを上げながらトキに向って襲い掛かる。
　トキは、短絡的なデーモンの行動を見て僅かに笑みを浮かべた。そして、一発の銃弾を放つ為に慎重に狙いを定める。
　パグシッ！
　鈍い破裂音を立てデーモンの片目が破裂した。どんなに硬い皮膚を持っていても、眼球まではその丈夫さを持っていなかったようである。デーモンはその場にうずくまり、苦悶するかのような雄叫びを上げた。
「エアニス！」
　トキの呼びかけと同時に、木立の枝からエアニスがデーモンの頭上へ飛び掛った。その手には、うっすらと輝く紅い剣が握られている。一撃で倒すつもりで、エアニスはデーモンの後頭部に剣を振り下ろした。が、
「くっ！」
　エアニスの存在に気付いたデーモンが、エアニスを叩き落そうと当てずっぽうで腕を振るった。アイビスと違い空中で止まるといった芸の出来ないエアニスは、デーモンの頭に叩きつける筈だった剣を振るわれた腕に突き立てる。
　さぶっ
　エアニスはそのままデーモンの腕を斬り落とした。体勢をまともに崩してはいたが、エアニスは返す刃でデーモンの額を狙う。しかし、デーモンが身をよじったお陰で、エアニスの切っ先は紙一重の差でデーモンに届かなかった。
「ちっ、カンの良い奴だな！」
　トキの銃で傷付かなかったデーモンの皮膚は、まるで焼いたナイフでバターを切るように易々と斬り裂かれた。
　魔力を込めたエアニスの剣は普段以上の切れ味を見せていた。剣の魔力がデーモンの魔導的な存在に強く干渉しているのだ。
　やや距離を取ってデーモンと対峙するエアニスは、次こそ仕留めようと剣に魔力を送り込む。
　ぶわっ
　デーモンが背中の翼を広げた。
「やべ、飛ばせるな！手が出せなくなる！！」
　翼を羽ばたかせ、宙に舞い上がったデーモンの頭上に、トキが手投げ弾を放る。宙に浮かびかけたデーモンの丁度頭上で爆弾は炸裂し、爆風でデーモンを地面へ叩き付け翼も吹き飛ばした。エアニスはデーモンへ追い討ちをかける為、未だ収まらぬ爆風を裂いて駆け出した。

ばぢっ
エアニスを迎え討とうと起き上がったデーモンの体に、その動きを封じるよう幾条もの光の帯が巻き付いた。エアニスが横目で見ると、茂みの中から光る手のひらをデーモンに向ける チャイムとクラインの姿があった。いつかの港町でも見た、束縛の術である。エアニスはデーモンとの距離を更に縮める。
ボンッ
何の前触れも無く、光の帯に束縛されたデーモンの体の周りに、十程の光の玉が現れた。身動きの取れなくなったデーモンが作り出した魔導である。
しかし、エアニスは今にも自分に向けて放たれるであろう光球に構う事なくデーモンに飛び掛った。
どどどっ
エアニスが信じていた通り、デーモンの生み出した光球は横手から飛来した光の槍に一つ残らず撃ち抜かれ、粉々に砕け散った。レイチェルの放った魔導である。デーモンが光球を生み出したと同時に、エアニスはレイチェルが魔導を構築し始めた事に気付いていた。彼女が光球を全て破壊してくれると信じ、エアニスは追撃の手を緩めなかったのだ。
自由を奪われたデーモンと剣を振りかざすエアニスの間を遮る物は、もはや何も無い。
ざぶっ！
エアニスの剣が、デーモンの顎を突き上げるように貫いた。
鼓膜をつんざくデーモンの咆哮と盛大に噴出す黒い血液。焼けるように熱いそれが、エアニスの顔や服に噴き付ける。
その時、鎖を引き千切る様な音と共にデーモンの右腕が動き出した。チャイムとクラインの束縛の術を、デーモンは力づくで破ったのだ。デーモンは自分に剣を突き立てるエアニスを巨大な手のひらで鷲掴みにした。デーモンの手に力が込められ、エアニスの肋骨が悲鳴を上げる。
「・・・！
しつこいぜ！！」
エアニスはデーモンの顎に突き立てた剣に、ありったけの魔力を叩き込んだ。紅い剣が銀色に光を放つ。
ドジュッ！！
くぐもった爆音と共に、デーモンの体が大きく跳ねた。エアニスの魔力がデーモンの体を内側から焼き尽くしたのだ。
煙を上げるデーモンの体はゆっくりと傾いて行き、そのまま地響きを上げて倒れ動かなくなった。

・・・しゅうううううう・・・・
エアニスが浴びたデーモンの血液は白煙を上げながら蒸発を始める。それと同じ様に、倒れたデーモンの死骸も真っ白な砂に変わり、ばらばらと風に溶け、程なくそれは跡形も無く消えて無くなった。

　その頃には血で真っ黒に染まったエアニスの服からも、染み一つ残らずデーモンの血は消えていた。気付けば魔物の存在を示す物は、何も、無くなっていた。
「終わったの・・・？」
　不安そうに周りを見回すチャイムがエアニスに問いかける。エアニスも暫く回りの様子を伺ってから、
「あぁ、あの女・・・アイビスの気配も消えたままだし。終わりだな」
　霧の結界も、ゴーレムの大群も、アイビスの姿が消えると共に消えていた。所々に破壊の爪跡が残ってはいるものの、辺りにはいつもの夜の空気が戻っていた。
　エアニスは剣を地面に突き立て、腰を下ろした。チャイムも安堵の溜息をついて、夜空を仰ぐ。

　クラインを含む５人は脱力したようにその場で座り込み、今、この夜に起こった非現実的な出来事を受け入れるため、今一度目にした光景を思い出す。
　そしてチャイムとレイチェルの胸に引っかかる、一つの疑念にも似た不安。
　不意にエアニスが立ち上がった。
「・・お前達に、話しておきたい事がある」
　重く、迷いを感じさせる声色で
　どこか諦めと観念の色を含めて
　エアニスが俯きながら言った。

第33話　今ここにいる事を

「今度は珊瑚礁の場所間違えないでよー」
「はいはい・・・」
　泰然と船首に座るチャイムに、エアニスはボートの梶を取りながら投げやりに答える。エアニス達４人は再び港でボートを借り、先日見損ねてしまった珊瑚礁へ向かっていた。
　今日はオーランドシティを立つ日。街を出る最後の思い出にと、チャイムがどうしても見に行きたいと言い出したのだ。時間を持て余したエアニスに反対する理由は無く、こうして暢気に海上の散歩を楽しんでいた。
「お前も、また海の底から爆弾とか引き上げたりするなよ」
「そうも頻繁にああいうモノ見つけられるワケないでしょーが！」
「お前はそういった確率論を無視して見つけてきそうだから怖いんだよ・・・。
　それにしても、"イヴォーク"の件に関してはトキに見事に騙されたな」
　エアニスは関心しているような、しかし何処か噛んで含むような口振りでトキを睨む。　対してレイチェルはトキを尊敬のまなざしで見つめながら言った。
「そうですね。まさかあの魔族が持ち去ったケースが偽物だったなんて、想像もつきませんでした。」

　３日前の、魔族アイビスとの戦い。
　トキはアイビスにイヴォークを奪われてしまったが、それはトキが事前に中身を入れ替えてた偽物であった。
　たった４人で、相手の顔も頭数も分からないテロリスト達からたった１つの爆弾を守る。その難しさを正しく理解していたトキは、エアニス達にすら知らせず偽物の"イヴォーク"を用意し、それを大事そうに守っていたのだ。
「敵を騙すには味方からって言いますしねぇ。
　とはいえ、僕はアイビスさんを騙すつもりではなかったのですけどね。いい気味です」
　くっくっく、と、トキにしては珍しく意地悪そうな笑みを見せる。
　因みに本物はというと、まだエアニス達の荷物に紛れていたりする。ひょっとしたら、これもトキが仕込んだ偽物かもしれないが。
　その話を切っ欠けに、ふと４人の頭にあの戦いの直後が蘇る。

◆

　エアニスがアイビスの呼び出したデーモンを倒した後。
　幸い病院内で戦いに巻き込まれ、怪我をした者は一人も居なかった。アイビスの結界に生気を奪われた患者は沢山いたが、みな一晩休めば回復する程度のものだった。
　戦いが終わり、日の昇り始めた早朝。外は軍隊や憲兵の現場検証で騒がしい中、エアニス達は

吹き飛ばされた自室の代わりに新たな部屋を提供して貰い、ようやく一息つく事が出来た。
　一息つく、と言ってもベッドや椅子に腰掛けた４人の表情は、暗い。長い沈黙が続いた後、部屋のドアがノックされクラインがトレイに紅茶を乗せて運んで来た。
　それを待っていたかのように、エアニスは大きく息を吸って顔を上げる。
「丁度いい。先生、あんたも付き合ってくれよ」
　エアニスが、カップを並べるクラインに声を掛ける。
「・・・あなたの、昔話に、ですか？
　それならばもう結構です。私は昔のあなたを責めるつもりはありません」
　事も無げに言うクラインに、エアニスは意外といった視線を向ける。
「私はただ、あなたがチャイムやレイチェルさんに、危害を加えるような人間ではないのかと心配していたのです。
　が、取り越し苦労でしたね。あなたは、そういう人間でないという事は良く分かりました」
　クラインの言葉に続き、チャイムもエアニスを励ますかのように肩を叩く。
「そうよ、昔のアンタが何してようが、どうだっていいわ。少なくとも、今のアンタは、あたし、嫌いじゃないしさ」
「・・・違う」
　軽く言ったチャイムに、エアニスは俯きながら呟く。そのはっきりとしない反応に、チャイムは苛立ちを感じた。
　やや口調を強め、チャイムは更に言いつのる。
「・・・ザード＝ウォルサム・・・だっけ？
　"月の光を纏う者"？
　戦争中の事でしょ。昔の名前や、くだらない二つ名なんか、さっさと捨てちゃいなさいよ。
　浜辺で皆で話したじゃない。"過去がどうあれ、未来があればいくらでも笑っていられる"って・・・」
「違うッ！！」
　エアニスの短い叫びに部屋に居た全員が驚き、固まった。
　これ程までに感情的なエアニスの声を、チャイム達は聞いた事が無かったからだ。
「俺が、どれだけの人間を殺してきたと思ってる・・・？
　自慢じゃねぇが、多いぞ。一度に数え切れないほどの人間を殺して、数え切れないほどの戦場を渡り歩いてきたんだ。
　例えば、その中にお前の知り合いや、仲間が居たらどうだ？
　そんな簡単に俺を許せるのか！？」
　エアニスは髪をくしゃりと掴み、引き攣った笑みをはりつかせながら喚いた。
　チャイムを始め、レイチェルも、トキでさえも、エアニスにかける言葉を見つける事が出来なかった。彼女達の視線を感じて、エアニスは我に返る。
「・・・悪い・・・」
　息を乱し、額に汗を滲ませたエアニスは、片手で額を覆う。胸の内を思わず口走ってしまった

事を後悔し、力なくベッドに座り込んだ。
「その・・・ごめん。分かったような口、利いちゃったよね・・・」
　珍しく素直に謝るチャイムに、エアニスは軽く首を振った。
「謝るのは、俺だ。
　今言った事は、例えでも何でもねぇ・・・事実だ」
　エアニスの返事を、チャイムが理解するのに一瞬の時を要した。そしてチャイムはぎこちなく、困ったような笑みを見せる。どういう反応を示せばよいのか分からない時の、チャイムの癖である。
「２年前になるか・・・
　帝国の・・ベクタの暗殺者達がエベネゼルの王宮に入り込み、高官や衛兵、数十人が殺された事件を知っているか？」
　当時、チャイムはエベネゼルの宮廷魔導師として各地の戦場を巡っていた。もちろん、王宮に勤める者として知らない訳が無い。チャイムは浅く頷く。
「あれは、ベクタの仕業なんかじゃない。俺がやったんだ」

　チャイムの顔から表情が消えた。そして、驚くようにクラインを見た。クラインはチャイムにどう応えればわいのか分らなかったのだろう。俯くようにも頷くようにも見えるように視線を床に落とした。
「じゃあ２年前、先生を斬った暗殺者って・・・・！」
「俺だよ」
　まるで胃に氷塊を詰め込まれたかのような感覚に陥るチャイム。その感覚は、ゆっくりと全身に広がってゆく。自分が立っているのか、座っているのかも分からなくなるほど、全身から感覚という感覚が消えた。足がもつれて背中が壁に当たった。
「チャイム・・・！」
　一瞬にして顔色を失ったチャイムをレイチェルが支える。
「ごめん・・・」
　その一言だけを告げると、チャイムは一人、部屋を飛び出してしまった。

「エアニスさん！！」
　追いかけて、と言うようにレイチェルはエアニスの名を呼ぶ。しかし、エアニスは動こうとしない。黙って事の成り行きを見ていたトキも、我慢できず口を挟んだ。
「言いたかった事はそれだけですか？
　これでは、誤解されたままですよ。」
「事実は全て話したよ。他に何を言っても、言い訳にしかならない。
　あいつを混乱させるだけだ」
　そう言い、エアニスは肩をすくめて見せた。
「憎まれ役は、慣れてるしな」

　他人事のようなその仕草と言葉に、トキは一瞬で頭に血を昇らせる。反射的にエアニスに伸びた手を何とか押さえ込み、トキは出来る限り感情を隠した声でエアニスを弾劾する。
「そこまで話しておいて逃げる気ですか。
　全てを話して拒絶されるより、誤解されたまま拒絶されてる方が、傷つかず済むからですか？」
「・・・っ！」
　エアニス自身気付いていなかった本心を、トキは見事に言葉に変えて見せた。自分の弱さを気付かされた事により、反論するどころかエアニスはうつむき唇を噛んでしまう。その様子を見ていたクラインが、トキの言葉に続いた。
「全てを、チャイムに話してあげて下さい。このままでは、あなたもあの子も可哀そうです。
　シスターレナと、ヘヴンガレットの事、エベネゼルがあなた達にした事、全て。
　大丈夫。あの子なら、あなたの事情を受け入れてくれますよ」
　エアニスは驚き、クラインを見上げる。
「あんた・・・レナやヘヴンガレッドの事まで知ってたのか？」
「えぇ。ですが貴方の人間性を直接知っている訳ではありませんでしたのでね。知らないフリをさせて頂きました」
　呆気にとられたエアニスの顔が、苦笑いに変わる。
「へ・・・意地が悪いな」
　そして、クラインの言葉を聞き流せなかった者がもう一人居た。
「クラインさん・・・ヘヴンガレットって、どういう事ですか？」
　思いもよらぬ所で聞いたその名に、レイチェルは驚きに目を見開いていた。
　レイチェルの素性を知らないクラインは、その言葉に反応した彼女を不思議そうに見つめる。
「レイチェルにも・・・エルカカの人間にも関係のある話だ。
　すまない。本当は、お前と出会った時に話しておくべきだったんだ」
　困惑するレイチェル。エアニスも迷うように視線を足元に漂わせる。やがて意を決したようにチャイムとクラインの間を抜け、病室の扉を開けた。
　「チャイムを追いかける。そして、全て話すよ」

◆

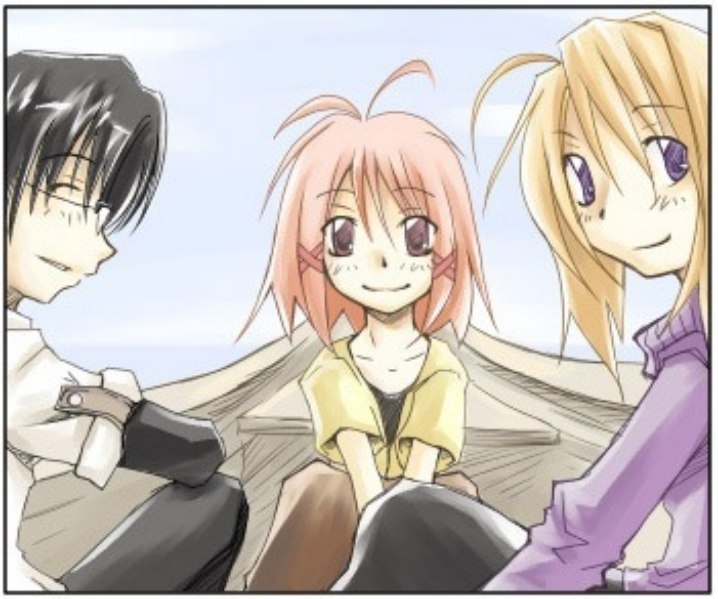
　エアニスとトキ、レイチェルは病院の屋上へ続く扉を開けると、そこには頼りない鉄柵にもたれかかったチャイムがいた。チャイムはやって来た３人に気付くと、複雑な表情を浮かべる。
「ごめんね。
　ちょっと、アタマの整理がつかなくて・・・何て言えばいいのか、分からなくて・・・」
　いつもは、相手を真っ直ぐ見て話をするチャイムが、視線を伏せたままエアニスに言った。
「チャイム。それに、レイチェルも。
　お前たちに、話しておきたい事がある。２年前、俺がエベネゼルを襲った事と、そして前

回の・・・６つ目のヘヴンガレットを巡る戦いの話だ」
「・・・！？」
　エベネゼルの事件とヘヴンガレット。エアニスの言う二つの出来事の関連性を見出せず、チャイムとレイチェルは驚きと、戸惑いの表情を見せる。
　エアニスは二人の目を真っ直ぐ見据えて、決然と言葉を紡ぐ。
「聞いて欲しい。二年前の戦いの事を。
　６つ目のヘヴンガレッドの持ち主の話を・・・」

◆

「ひゃあー・・・すごい、すごい！！」
　チャイムは船首に立ち、視線を慌しく巡らせる。危ないから立たないで、と言うトキの言葉も、今のチャイムの耳には入らなかった。
　青く澄んだ海に、珊瑚礁が広がっていた。この辺りの海水は特に透明度が高く、海面の上からでも、珊瑚礁が綺麗に見渡せた。
「確かに・・・これは凄いですねぇ」
「きれい・・・」
　トキとレイチェルも、船の縁から身を乗り出し、海面を覗き込んでいる。エアニスはというと、心ここにあらずといった風情で薄汚れた船底を見つめている。チャイムはそんなエアニスの様子を見て、声をかける。
「ちょっとエアニスも見てみなさいよ！」
「・・・・。」
「ちよっと、エアニス？」
「あ？　あぁ、すまん。ボーッとしてた」
　チャイムは腰に手を当て、やれやれといった顔で座り込んだエアニスを見下ろす。
「すまなかったな、今まで黙っていて・・・」
「まーたその話？」
　はあぁ、と、わざとらしい溜息をつき、呆れ顔を見せるチャイム。
「アンタなりの正義だったんでしょ？
　戦争中の事だもの。自分の正義が、他人の目には悪に映る事もあるわ。
　アンタの正義は、あたしの目から見たら・・・悪かもしれないけど。
　でも、あたしの正義だって他人から見たらただのエゴだったり、悪だったりするのかもしれないわ。
　人それぞれ違う価値観を持つ以上、ぶつかり合ったり、すれ違ったりするのは仕方の無い事でしょ」
「理屈はな。でも、人の心は理屈じゃ納得しない。
　お前は俺が憎く無いのか？」

「もう、困らせるような質問しないでよ・・・」
　エアニスを気遣い笑顔を見せていたチャイムも、いい加減うんざりして表情を曇らせる。
「そりゃ、あんたは先生や私の仲間を何人も傷つけたんだもの。
　許せないという気持ちは、あるわ」
「じゃあ・・・」
「でも、人の心は理屈じゃないんでしょ？」
　少しだけ、悪戯めいた笑顔を見せ、チャイムはエアニスに言われた言葉をそのまま返してやった。その小悪魔めいた微笑みに、エアニスははなじろむ。そして、
「・・・すまん」
　苦笑して、その一言だけを返すエアニス。チャイムはしてやったりと言った笑みを浮かべ、エアニスに頷きかけた。



「はいはい。では、そのお話はそれでオワリとしまして・・・。
　後の問題は、コレをどーするかですね」
　そう言って、トキは "イヴォーク" を荷物から引きずり出した。ケースは病室での爆発に巻き込まれたり、エアニスに蹴り飛ばされたり、トキに分解されかけたりして、随分と傷だらけになっていた。とても爆弾に対する扱いとは思えない。
「海に沈めるか、山に埋めるか・・・。バラすのは無理なんだろ？」
「申し訳ありませんが、僕の知識では無理ですね」

「ったく、厄介なもの拾ってくれたもんだ。元はといえばコイツを拾ったから、ややこしい事になったんじゃねーか」
　エアニスは毒づきながら、"イヴォーク"のケースをガン、と蹴飛ばした。

　ピコ

　エアニスがケースを蹴ったと同時に、ケースから短い電子音が響いた。暫しの沈黙の後、４人は無言で互いの顔を見合わせる。
「なに、今の・・・？」
「なんか、ピコッて言いましたよ・・・？」
「えっ。俺、何かやった？？」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。』
　トキがケースの蓋を開けると、蓋の裏のパネルには"４６"という数字が示され、それは一秒ごとに、"４５"、"４４"と表示が映り変わっていった。更に長い沈黙が続き、４人は１０秒ほどその数字の変化を眺めていた。
「トキ、こいつは何のカウントダウンをしてるんだ？」
「そうですね・・・丁度、あと３０秒程で正午です。
　お昼の合図か何かじゃないですかね」
「・・・爆発までのカウントダウンじゃないの？」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。』
　現実逃避しかけていたトキを、チャイムが現実へ引き戻した。
「えっと、俺は何をすればいいのかな？」
「僕が教えて貰いたい所ですね」
「あの・・・あと１５秒・・・」
「ちょっと・・・・ちょっとちょっとっ！！　マジ！？　マジでっ！！！」
　ようやく慌て始めた４人だが、残り時間は１０秒も無い。
「トキ、解体、解体しろ！！適当でもいいからコイツぶっ壊せ！！」
「道具がありませんよ、壊すならエアニスの方が適任でしょう！！」
「喧嘩してる場合かぁ！！
　あああああたし達知らないからねっ！！ アンタらで何とかしなさいよ！！」
「あぁ！？元はと言えばお前が・・・」
「あー、あはは。こりゃ駄目ですね」
　残り１秒の表示を見て、トキが十字をきったその直後

　ドヒュン
　突如、腹に響く低音が響き、"イヴォーク"を黒い霞が包み込み込んだ。そしてその霞は一瞬で小さく収束し、姿を消した。イヴォークのケースごと。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。』
　エアニスとトキ、チャイムは情け無い姿で取っ組み合ったまま、暫く固まっていた。
　どさっ
　音と共に、ボートが揺れた。音のした方を見ると、息を切らし冷や汗を流すレイチェルが仰向けに倒れていた。その姿を見て、何が起こったのかを理解するエアニス。
「今の・・・空間転移か！？」
「レイチェル、ナイス！！！」
　レイチェルは自分の家系に伝わる時間と空間を司る魔導で、"イヴォーク"を空間転移させたのだ。
　小さく飛び跳ねると、チャイムはレイチェルの首に抱きつく。
「はぁ、はぁ・・・ちょっとチャイム、苦しいよ・・・」
「大丈夫？　かなりの魔力を使うって聞いたけど・・・」
「うん。"石"で魔力増幅する暇も無かったから・・・かなり魔力を使っちゃったみたい・・・。でも、少し休めば大丈夫だから・・・」
　その言葉に３人は空気の抜けた風船のように、力なくへたり込む。
「いやぁ、流石に・・・今のは焦りました・・・・」
「あぁ・・・。
　でもよ・・・"イヴォーク"は何処へ消えたんだ？」
「空間転移の行き先を指定する事は、まだ私の魔力では出来ません。ここことは違う、何処か別の世界か、この世界の何処かか・・・」
「え。じゃあ、どこかの街中に飛ばされて・・・そこで爆発したりとか・・・・　」
「・・・・してるかも・・・・。」
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。』
　一筋の汗を流しながら恐る恐る尋ねたチャイムに、レイチェルは視線を泳がせながら答えた。
　そのレイチェルの頭に、エアニスの手がポンと乗る。
「とりあえず・・・今のは聞かなかった事にしよう。
　そしてレイチェル、マジで良くやった」
「よ、良かったでしょうか・・・今ので・・・。」
「いい。もういい。」
　そう言いながらエアニスはレイチェルの頭を乱暴に撫ぜた。

　ミシ・・・ギシシッ・・・
　４人の耳に、木が軋む小さな音が届いた。
「ん？　何の音？」
　チャイムが辺りを見回すと、
　ぶしゅっ、ごほぼっ！
　座り込んだ彼女の足元から大量の水が溢れ出した。

「あ・・・おもら　」
「違うわッ！！」
　何かを言いかけたトキの頭をチャイムは船底に叩きつけた。
　驚いたチャイムがその場を立ち退くと、船底の板が小さく裂け、その穴から海水が噴き出していた。良く見ると船底が球体を押し付けた様に削れている。レイチェルの空間転移の魔導が、"イヴォーク"と一緒に船底もえぐり取ってしまったのだ。事態を把握した４人は慌てて船底の穴を手で押さえ付けて塞いだ。
「ちょっとちょっと！！何か穴塞ぐもの！！」
「チャ、チャイムさん！！そんなに強く押さえると穴が広がって・・・うわっ！！」
「あぁ。ちょっと詰めが甘かったな、レイチェル。今度は気を付けような」
「あー・・・ははは、咄嗟の事で、つい・・・スミマセン」
「な・・・！！　何でエアニスはレイチェルにはそんな優しいの がぼかぼぼぼ・・・・」
　そして、４人の乗ったボートはほんの数十秒で沈没してしまった。

◆

「やれやれ。えらい目にあった」
　珊瑚礁の海でボートを沈めてから数時間後。レンタルボートの弁償や着替えに手間取り、予定よりも随分遅れてエアニス達は出発の時を迎えた。この街に寄った本来の目的である車の修理は終わり、今はトキが機関の最終チェックをしている。
「せっかくのバカンスだってのに、最後は随分とバタバタしちまったな。
　もうちょっとのんびりしたかったよ」
　湿った髪をいじりながらぼやくエアニス。その言葉に、レイチェルは楽しそうに茶々を入れる。
「あら、エアニスさん、最初は仕方ないな、って感じで渋々この街に寄ったんじゃなかったですか？」
「んー？　そうだったか？」
　そうだったな。と思いながら、エアニスはとぼけてみせた。
　最初はくだらないと感じていたが、それなりに楽しい休暇だと思えるようになっていた。そして、楽し かったのはこの３人と一緒だったからだという事も、口には出さずともエアニスは認めていた。一人で居るのもいいが、たまにはこういう奴等と旅をするのも悪くないな、と。たった５日の滞在だったのにも関わらず、随分と色々な事を考えたような気がするエアニスだった。
　そして、様々な思いのあるこの街を再び訪れたチャイムは、何処か晴れ晴れしたような、でも少しだけ悲しげな顔で、眼下に広がる街並みを見渡している。その表情に気付いたエアニスがチャイムの横顔を見ていると、不意に彼女と目が合ってしまった。彼女はエアニスの視線に気付くと、にこりと笑い 「また、皆で来ようね」 と言った。
　あぁ、と短く返し、エアニスは余計な心配だったか、と頭を掻く。

　今回の件で、自分の素性を隠す事なく全て語ったエアニスは、ようやくチャイムとレイチェルに、素直に接する事が出来るようになった。今までは自分の素性に後ろめたさを感じ、一歩引いた場所で彼女達と接していたような気がする。だが、そんな自分の過去や素性を、チャイムとレイチェルはそれなりに受け入れてくれたようだ。
　チャイムもこの街に再び訪れた事で、あの戦争中、この街で起きた事を、もう一度冷静に自分の中へ落とし込む事が出来たような気がした。同時に魔法医であった頃の師に、自分の今の姿を見せる事が出来た事で、今まで感じていた師に対する憂いの幾つかを解消する事が出来た。
　チャイムもエアニスと同じく、この街に立ち寄る事に気が進まなかったが、今となっては立ち寄って本当に良かったと感じていた。

「エアニス、車の調子、完璧です。いつでも出れますよ」
　油で汚れた手を拭きながら、トキがエアニスに呼びかけた。修理を終え各部の痛んだ部品を新調した車は、子気味良い排気音を響かせている。エアニスは咥えた煙草を携帯灰皿に押し込むと、気だるそうに伸びをした。
「それじゃ、行くか」
　のんびりとしたエアニスの呼びかけに、他の３人は各々の言葉で返事を返した。

　チャイムとレイチェルの後姿を見て、エアニスは想う。
　自分が今ここに居る事は、
　決して二年前の過去に縛られているからではなく、
　彼女達の、そして自分の未来を紡ぐ為なのだと。
　そうあるべきなのだと、エアニスは想った。

「・・・いつまでも過去に縛られてちゃ、
　レナやゲイルにも怒られちまうな」
　抜けるように蒼い秋の空を見上げて、エアニスはそう呟いた。

-　第三部 おわり　**-**

月の光を纏う者　-3-

http://p.booklog.jp/book/29184

著者：猫崎 歩
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/blah/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/29184

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/29184

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ